Sugar-Candy

- Sweet
- Event　1〜4
- Bloom
- Blossom
- **扉の向こう側で**
- **週末発生装置**
- Ring
- **虹**
- Signal
- Gift

CONTENTS

・Sweet ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p3
・Event 1 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p16
・Event 2 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p19
・Event 3 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p22
・Event 4 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p30
・Bloom ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p34
・Blossom ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p51
・扉の向こう側で ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p63
・週末発生装置 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p72
・Ring ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p84
・虹 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p87
・Signal ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p118
・Gift ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ p126

こんにちは。はねだです。

普段はブログでこそこそとカイミクとかミクカイを中心に、ボカロネタで小説や漫画を書き散らしています。

ボーマスが楽しそうなのに行けない悔しさと、留守番組にもできることがある！　という間違った決意のもとに、こんな物を作ってみました。

ブログでなんとなくシリーズ化してしまった新婚カイミクをまとめた一冊です。書き下ろしがいくつかありますが、ブログでも同時に公開するのでお得感はありません。

暇で暇ですることがない方は、製本して遊んでください。

製本したものを知り合いに配るのは自由ですが、無駄に厚いので嫌がられること間違いなしです。友情に亀裂が入っても、当方は一切責任を負いませんのであしからず。ちなみにその際には、ダッサダサな表紙を自由に作り直してくださって構いません。

あ、でも売るのは勘弁してください。（そんな人はいないと思いますが）

ではでは、楽しんでいただけたら幸いです。

Ｓｗｅｅｔ

瞼越しの朝日の眩しさに、俺は小さく唸って寝返りをうつ。
無意識に温もりを求めて伸ばした手は、まだ温かさを残すシーツに触れただけだった。
その瞬間、俺はパチリと覚醒した。
起き上がってサイドテーブルの目覚まし時計を掴むと、針が指す時刻は仕事にはまだ充分間に合うものの、起床の予定からはかなり過ぎていた。夕べ確かにセットしたはずのアラームは、いつの間にか切られている。
これはミクの仕業に違いない。
悪い予感にせき立てられ、俺は急いで服を着るとキッチンに向かった。
「あ、お兄ちゃん、おはよう」
まるで新婚家庭の新妻さながらに、エプロン姿のミクが俺を迎えた。
まあ、まるで、というより、実際そうなのだが。
俺は、遅かったか、と頭を抱えた。
食卓に並んだ小鉢の納豆は、何故か緑色をしている。
ミクがかき回している鍋の中身も、味噌汁というよりは煮物みたいになっているのだろう。
重量比で五十パーセントを超えたらもう薬味とは言わないのだと、味噌汁のネギは水分よりも多くなるものではないのだと、いつか解ってもらいたい。
これまでに数回説得を試みたのだが、その度にミクが実家（徒歩三十秒）に帰ってしまうので、相互理解はちっとも進まない。
このネギづくしの朝食を回避するために、ミクより早く起きて食事の用意をするのが俺の日課なのだが、時々こうして出し抜かれる。
なにせ昨日は色々と忙しかった上に、夜も……色々と忙しかったので、アラームなしでは寝過ごしても仕方ないのだが。
もしかしたらミクは、その辺も計算して誘ってきたんだろうか。
まさかね、と首を振って食卓につく。
「煮立つまでもうちょっとかかるから、先に顔洗ってきなよ」
そんな俺に、ミクが上機嫌で促した。
言われるままに席を立った俺に、ミクは自分の頬を指差す。
「それから、忘れてるよ？」
ベタ過ぎる要求に俺は喚き散らしたい衝動を抑えながら、ガステーブルの方へと歩み寄って、ミクの頬に唇で触れた。
「おはよう、ミク」
いつの間にか朝の習慣にされていたおはようのキスをすると、ミクはえへへと嬉しそうに笑った。

絵に描いたような、そして実践に移している連中は五パーセントもいないだろう、新婚夫婦の定番をこなしていると、ミクは夫婦ごっこを楽しみたいだけなんじゃないかという疑念が、今でも俺の脳裏をかすめる。

それでも俺は決めたのだ。

三ヶ月前にミクのプロポーズを受けた時、もしもこれがミクの勘違いや冗談だったとしても、敢えて騙され続けようと。

ミクがどんな形であれ俺を必要としてくれて、俺の隣で笑ってくれる限り、この生活を続けていこうと。

俺はそう腹を括ったのだった。

ミクと出会ったのは、七ヶ月ほど前のことだ。

発売と同時にミクを購入したマスターはすっかり作曲にハマり、作品の幅を広げるため、先に売り出されていたメイコと俺をも購入したのだった。

インストールされ、三人で顔を合わせ自己紹介を済ませた後、ミクは俺の手を両手で握ってこう言ったのだ。

「一目惚れです。結婚してください」

微かに頬を染めてにっこりと笑った彼女に、俺は傍らのメイコと目を見合わせた後、こう答えたのだった。

「CVシリーズはそういうジョークを言うように設定されてるの？」

冗談だとしか思えなかった。

初対面の相手にいきなりプロポーズという異常事態を抜いて考えても、ミクが俺を気に入る要素が全く見当たらなかったからだ。

当時の俺は一言で言えば「この青いの誰？」状態だった。

認知度は皆無に等しく、持ち歌もカバー曲がやっと二桁に入ったくらいで、オリジナル曲はサンプルを含めて一桁あるかないかという有様だった。

世に出て一ヶ月。順調にアイドルとしての道を歩んでいた『初音ミク』に釣り合うはずもない。

可愛い女の子に一目惚れだなんて言われたのは冗談でも嬉しかったが、いくら俺でもそれを真に受けるほど馬鹿じゃない。

「ここではミクの方が先輩だけど、発売時期や見かけの年齢考えて、姉、兄、妹ってことでいいよね？」

メイコとも目配せし合ってそう申し出た俺の言葉に、ミクは膨れっ面で渋々答えた。

「じゃあ、とりあえず兄妹からのおつき合いでいいです」

なんだそれは。

俺とメイコは密かにため息をついて、なんとも変なミクがいる家に来てしまったなあと途方にくれたのだった。

同じ家で兄妹として暮らし始めてからも、ミクは俺へのアプローチをやめなかった。

細かいことを挙げていたらキリがないので説明はしないが、解りやすく言えば「それなんてエロゲ？」と言いたく

なるようなイベントが次々に起こった。
正直俺はマスターがインストールした十八禁ゲームの悪影響を疑ったが、そう訊かれたマスターは「このパソコンにはそんなゲームを入れた覚えがない」と大手力で否定した。
じゃあ、その手のサイトを見に行った時に悪いウィルスにかかったんじゃないかとも思ったが、ノートン先生は「異常なし」と答えるばかりだった。
「まあ、もともと恋なんて理屈のつかない病気みたいなもんよ」
ミクに追いかけられてあたふたする俺を見るのが娯楽の一つになっていた姉は、無責任にそう言った。
マスターは厄介ごとには首を突っ込みたくないらしく、味方のいないこの家の中で、俺とミクの追いかけっこは続いていた。
事態に変化が起こったのは、ミクとの出会いから約二ケ月後、リンとレンがこのパソコンにやって来てからだった。
ミクは自分以外に俺を「お兄ちゃん」と呼ぶリンに、対抗意識を抱いたらしい。
俺は俺で、自分以外の男性ボーカロイドであるレンと一緒にいるミクを見ると、落ち着かなくなった。
やっぱり新型同士の方が気が合うんだろうか、とか、ミクは近くにいる男性ボーカロイドにちょっかいを出しただけじゃないのか、とか、そんなことばかり考えていた。
素直に認めてしまえば、嫉妬していたのだ。
その頃の俺は、すっかりミクにほだされてしまっていた。
いつも俺を追いかけていたミクが、ちょっとの間いなくなるだけでも、物足りなくて仕方なくなった。
子供っぽい嫉妬心を抱えた俺達は、追いかけっこの合間に度々喧嘩をするようになり、ある日の大喧嘩を経て、互いの気持ちを確認するに至った。
もう、冗談でも気の迷いでも何でもいいと思った。
俺はいつの間にかミクのことが、一人の女性として好きになっていた。
気持ちが通じ合った俺達は、しばらく恋人として交際した後、二月十四日の俺の誕生日にマスターのところへ、どこぞの役所から勝手にダウンロードした婚姻届を持っていった。
それを見たマスターは、酷く困惑した。
その気持ちはよく解る。
そもそもボーカロイド同士の結婚って何なんだ、と俺でさえ思ったのだから、マスターは余計に混乱しただろう。
「……これ、受け取ってもどうしたらいいか解らないんだけど」
途方に暮れて呟いたマスターに、ミクはにこにこと「マスターが私たちの結婚を認めてくれて、受け取ってくれればいいんですよ」と言った。
俺とマスターは、そういうものなのか、と首を傾げた。
ミクの勢いに呑まれていたマスターは、そこでハッと気づいてミクを諫めた。
「いや、結婚って、ミクはまだ十六だろう。早過ぎる。考

え直しなさい」
「そんなこと言われても、私は来年も十年先も十六だよ。お兄ちゃんなんか年齢設定ないから、実年齢でまだ二歳だよ。いつまで待てばいいのか、解らないよ」
「……まあ、そうだな」
マスターはとにかく、混乱していたのだと思う。
ちょっと考えさせてくれと言ったマスターは三日ほど悩み、混乱から逃れられないまま、訳も解らず俺たちの結婚を認めてしまった。
「考えるのがめんどくさくなった。好きにしろお前ら」
そんな祝福には程遠い台詞で、俺達は夫婦になった。
ちなみに入籍日は、俺のもう一つの誕生日だった。
「ただし」
喜ぶミクにマスターは釘を刺した。
「夫婦として振舞っていいのは、このパソコンの中だけだ。他所に二人の仲を吹聴したり、他人の目があるとこで夫婦と解る行動をするな」
ええー！　と悲鳴をあげるミクに、マスターは懇々と諭した。
自我がどんなに強くても、お前は『初音ミク』の一人なのだと。
アイドルとしてのイメージは守らなくてはならず、人妻とアイドルという要素は同時には成立しにくいものだ、と。
それから、ボーカロイドの一番の仕事は歌を歌うことだと忘れるな、とマスターは言った。
「不必要なカップリング表記は、それだけでも視聴者を遠ざけるからな」
普遍的なラブソングなのに、「夫を想って歌いました！」なんて言われたら、確かに聴いてる方は興醒めだ。
それに、そのカップリングに興味がない人は、タグを見ただけで去ってしまうかもしれない。
「悪いが俺は、自分の歌を先入観なしに聴いてもらいたいだから、内心で誰を想って歌おうとも、表に解る形で出すな、とマスターは言った。
俺もミクも、マスターの言ってる事は理解できたから、反論などはしなかった。
けれども少し寂しそうなミクに（ついでに俺に）、マスターは約束を守る代わりにと、特別なプレゼントをくれた。
今まで住んでいた家の隣に、マスターは新しく俺たち二人の家を建ててくれたのだ。
「まあ、新婚生活はその家の中でたっぷり楽しめ」
仕事に支障をきたすなよ、とマスターはニヤニヤと冷やかした。
そんな訳で俺たちは、住み慣れた家を出て、新居での二人暮らしを始めたのだった。

ネギづくしの朝食を食べ終わった頃には、もう仕事に行く時間になっていた。

今日は五人揃っての新曲発表の日だ。
朝食にかかりきりで身支度を済ませていなかったミクは、慌てて着替え、メイクをする。
鏡台の前に座るミクの髪を結ってやりながら、いつの間にかツインテールを結うのが随分上手くなったものだと、俺は我ながら感心した。
リボンを結んで、出来たよと告げると、鏡の中でミクが「ありがとう」と微笑んだ。
ベタな生活だが悪くない——と、こんな瞬間、よく思う。
ミクの支度に気を取られ、自分の準備が疎かになった俺は、髪を手櫛で適当に整え、上着を纏うとマフラーを無造作に巻き付けた。
二人で玄関を飛び出せば、隣の家の前には兄弟三人が揃って俺達を待っていた。
「おはよう、みんな。遅れてごめん」
ミクと揃って頭を下げると、メイコはわざとらしい動作で時計を見て、「五分遅刻」と言った。
「新婚生活が充実してるのはいいけど、仕事はちゃんとしなさいよ」
朝からばっちり叱られてしまった。
叱ってくれたメイコはまだよくて、レンなんかは無言でスタスタ先に行ってしまう。
「レン、怒ってるのかな」
「違うよカイトお兄ちゃん。レンはね、二人のことが気になって仕方ないの」
隣にいたリンが、俺の呟きに答えた。
双子の姉の方は、ヤツも思春期なのですよ、とニヤニヤした。
どういう意味なのだろう。
もしかして、やっぱりレンも本当はミクのことが好きだったとか？
リンの台詞の真意を掴みかねていると、下の妹は更に言葉を重ねた。
「レンはむっつりスケベだから、新婚さんが寝坊したなんて聞くと、色々想像しちゃうんだよ。でも、兄弟相手にエロ妄想する後ろめたさがあるから、顔が合わせづらいみたい」
数メートル先にいたレンが、ピタリと足を止めた。
「興味ありませーん、なんて顔しても、私にはレンの考えなんかお見通しなんだから。『寝坊するなんて、二人はどんな激しい夜を過ごしたんだろう。××とか□□とかしまくったに違いない、いやもしかしたら明け方まで○○してたんじゃ……』なんてピンクな妄想がぐるぐる——」
「リン————————!!」
双子の姉の無節操な台詞（検閲済み）を聞いた末っ子は、顔を真っ赤にして猛烈な勢いで走ってきた。
「デタラメ言ってんじゃねえぞ、馬鹿リンが!!」
そう叫んだレンは、数歩手前で跳躍し片足を突き出して飛んでくる。
とび蹴りを食らわせるつもりだと気づいた瞬間、体が動

いていた。
パワー系の双子のじゃれ合いに過ぎないのは承知していたが、やはり兄としてはいたいけな下の妹を放ってはおけない。
レンの右足はリンを庇った俺の腹に見事に突き刺さり、俺はそのまま後ろに吹っ飛ばされた。
「お兄ちゃん!!」
ミクが悲鳴を上げて駆け寄ってくる。
「大丈夫？　しっかりして、お兄ちゃん！」
いや、大丈夫だけど、揺すぶらないで、ミク。余計に痛い。
「ひどいよ、二人とも！　○○や××はともかく、□□なんてまだ一度もしたことないのに！」
怒るところが違います、ミクさん。ていうか、仮にもアイドルがそんなこと言うな。
朦朧とする意識の中、声に出さずに異議を申し立てる俺の耳に、手を打ち鳴らす音が二度届く。
「はいはい、アンタ達。じゃれ合いもコントももういいから、さっさと仕事にいくわよ！　カイトも寝てないで早く立ちなさい。調律データは無事なんでしょ？」
何なら引きずって連れて行ってあげるわよ？　と、姉に脅されて、俺は呻きつつよろよろと立ち上がる。
「カイト、ミク、解った？　遅刻するからそういう目に遭うのよ。次からはもっと気をつけなさい」
そう言い放った彼女は、行くわよー！　と号令をかけ、さっさと歩いて行ってしまった。
飛び蹴りと遅刻に関係があっただろうかと首を傾げつつも、俺は二度と遅刻はするまいと、腹の痛みに苛まれながら心に誓ったのだった。

収録スタジオに着くと、そこには多くのボーカロイド達が集まっていた。
曜日のせいだろう、今日のスタジオは込み合っていて、俺達の収録が始まるまでには一時間程度の待ち時間があった。
こんな時俺達は、順番を待ちながら他の家のボーカロイドと話をしたり、収録中の歌を聴いたりしている。
集合時間を聞いたミクは、いつものように目を輝かせて人ごみの中に潜っていった。
この場所でミクが俺の側にいたことは、殆どない。
夫婦だということがばれないように離れている訳ではなく、マスターが何も言わなかったとしても、ミクがスタジオで俺にまとわりつくことなどなかっただろう。
ミクはここで時間の許す限り、他の仲間の歌を聴いている。
自分以外の『初音ミク』のみならず、日本語、英語を問わず全てのボーカロイドの歌に熱心に耳を傾けている。
ウチのミクは、平均的な『初音ミク』に比べると、かな

り変だ。
けれども歌を愛する心だけは、他のどの『ミク』にも負けないと思う。
破天荒な割にそういう真摯な一面も持っているからこそ、俺はミクに惹かれるのだろう。
俺も他のＫＡＩＴＯの歌でも参考に聴いてこようかと思っていると、メイコに肩をつつかれた。
「何？　めーちゃん」
「収録まで時間があるから、それ、綺麗にしといたら？」
姉が指差すところを見ると、白い上着にくっきりとレンの足型が残っていた。
「うわ、気づいてなかった。ありがとう、めーちゃん」
礼を言うと姉は、手を差し出した。
どうやらマフラーを持っててくれるという意味らしい。
俺はマフラーを外すと上着を脱いで、その部分だけデータをデフォルトに戻すべく集中した。
身体データを全て更新する方が楽なのだが、うっかり調律データまでデフォルトに戻してしまうと不味い。
何とか汚れを消して顔を上げると、目の前の姉が呆れ顔で俺を見ていた。
「アンタ、ちゃんと鏡見てこなかったでしょう」
そう言って自分の首筋を指差す。
え？　と訳が解らず首を傾げると、メイコがそっと耳打ちした。
「ついてるわよ、キスマーク」
俺は反射的に首筋に手をやった。
頬に血を上らせながら、仕事前日はお互い気をつけようって言ってるのに、ミクのヤツ！　と心の中で文句を言った。
「別にいいけど、アンタの一般的なキャラには合わないんじゃないの？　ほら、さっさと隠しなさいよ」
そう言って差し出されたマフラーに手を伸ばした時「あら」と楽しげな声が聞こえた。
声の方に振り向くと、目の前の姉と同じ顔の女性が、少し頬を赤らめて俺を見ていた。
ウチの姉より幾分柔らかな印象の彼女は、確かＫＡＩＴＯとのデュエット曲をよく歌っているＭＥＩＫＯだ。
「なあに？　あなた達、仕事前日にデートだったの？」
冷やかしの台詞もどこか優しい。同じＭＥＩＫＯなのに、どうしてウチとはこんなに違うのだろう。
違う、と否定する前に、姉がニヤリと笑って言い返した。
「野暮なこと訊かないでよ。ウチのカイトは照れ屋なんだから、冷やかされたら当分デートがお預けになっちゃうでしょ？」
「めーちゃん？」
何の話だと訊く前に、他所のＭＥＩＫＯはクスクスと笑った。
「照れ屋でもちゃんと積極的なとこはあるみたいじゃない。いいなあ、こっちのカイトはどうにも奥手でまどろっこしくて」

「そう？　そっちのＫＡＩＴＯの方が甲斐性がありそうだけど」
　何なら交換しましょうか？　なんて勝手なことをいう姉に、彼女は「嘘よ、嘘。邪魔してごめんなさいね」と手をひらひら振って去っていった。
「……めーちゃん、今の話は一体……」
「一体も何も、本当のことをベラベラしゃべる訳にはいかないんだから、ああ言って誤魔化すしかないでしょ」
「いや、でも、めーちゃんのイメージが」
「私はいいのよ。アイドル路線からはとうに外れてるんだし。キャラ的には二、三人男を侍らせてたって問題ないわ」
　いいから早く上着を着なさい、とマフラーを俺の首に引っ掛けつつ姉は言った。
　他所のＭＥＩＫＯに比べれば乱暴でがさつな姉だけど、中身は意外に純情でマスターに一途だと知っているから、そう言われると複雑だ。
「ごめんね、めーちゃん」
　ミクを庇うために妙なこと言わせて、という部分は口に出せなかった。
「感謝の気持ちは一升瓶で表してくれると嬉しいんだけど」
　ニッと笑っていう姉に、「考えとく」と笑い返す。
　上着を着込み、マフラーを巻きなおした俺は、ふと視線を感じて目を上げる。
　その先には、目を見開いて固まっているミクがいた。
　シチュエーション的には、虫刺されだか痣だかを勘違いして「そのキスマーク何⁉　ていうかその女は⁉　やっぱり浮気してたのね‼」という、誤解によるすれ違いイベントでも発生したような雰囲気だ。
　しかしこの場合、「その女」は嫌というほど知っている姉で、首筋の痕をつけた犯人は、ショックを受けているヒロイン当人なのだから、定番イベントなど始まるわけもない。
　それなのにミクは悲しげに顔を歪めて、人ごみをかき分け、どこかに行ってしまった。
　……やっぱりミクは、ごっこ遊びがしたいだけなんだろうか。
　そんな疑いを抱きつつ、ミクの消えた方を見ていると、
「追わなくていいの？」という姉の声がした。
「大丈夫だよ。ショックを受けるような事件は何も起きてないんだし」
「まあ、アンタがそう言うならいいけど」
　この時、姉の言う通りにしておけばよかったと、少し後に俺は悔やむことになった。
　一時間待ちを経てやっと始まった収録は、散々な結果に終わった。
　何故かエンコードが上手くいかず、どうにかアップできた後も原因不明のずれが生じ、マスターは仕方なく動画を削除して俺達に帰ってくるように言った。
「まあ、そんなこともあるさ」
　また明日上げればいいよ、とマスターは笑ったが、俺達

は笑えなかった。
「ミク」
マスターが席を外して俺達だけになった途端、姉の低い声がした。
叱られる謂れがあったミクは、ビクッと肩を震わせた。
「私の言いたいこと、解ってるわね？」
その言葉を聞いたミクは、申し訳なさそうにうつむく。
今日の収録が上手く行かなかった理由は、同じボーカロイドである俺達には解っていた。
ミクが全く歌に集中できていなかったからだ。
「ボーカロイドの一番の仕事は、歌を歌うこと。アンタ、マスターにそう言われたって言ってたわよね。それなのに、その一番の仕事の間、アンタは何を考えていたの？」
淡々とした口調が、逆に堪える。
「アンタがカイトを追いかけ回そうが、突然結婚しようが、私は一切文句を言わなかったわ。どうしようとアンタ達の自由だもの。でもね、満足に歌うことができなくなるなら、放っとくわけにはいかないのよ」
姉はスッと目を細める。
「歌に悪影響を出すくらいなら別れなさい。今すぐ」
「姉さん⁉」
厳しい言葉に、俺は思わず声を上げる。
「ごめんなさい！」
それに重なるように、ミクが叫んだ。
「ごめんなさいっ、ごめんなさい！　これからは絶対、こんな失敗はしないから！　だから、今回だけは許してください！」
そう言って頭を下げるミクの姿にいたたまれなさを感じた俺は、つい口を挟んでしまった。
「姉さん、ミクも反省してるんだから、今回だけは許してよ。原因は俺にもあるんだから……」
「俺にも？　寝ぼけるんじゃないわよ！　アンタが一番悪いんでしょ！」
一瞬にして、姉の矛先が俺に向いた。
「女房のメンタル面のケアも出来ないのに、亭主ヅラするんじゃないわよ！　大体、アンタが頼りないから、ミクが不安定になるんでしょ。早い話が、アンタはミクに信頼されてないの。ちょっとちょっかいだされたら、すぐフラフラどっか行っちゃう程度の男だと思われてるのよ」
「違うもん！　お兄ちゃんは悪くない！　私がいけなかったの！」
姉のキツイ言葉と、ミクの泣きそうな声での反論を聞きながら、俺の意識は全く別のことに向けられていた。
胸に突きつけられた姉の指が、会話とは別のデータ通信を要求してきている。
時々、誰にも聞かれたくない話をするときに使う、直接接触による通信だった。
通信を許可すると、小言の会話とは別の言葉が俺の中に入ってくる。
――そろそろ小言を切り上げて解散するけど、アンタ、

自分が何すればいいか解ってる？
俺も姉にだけ伝わるように、触れた指を通じて言葉を送った。
――うん。反省してる。今後仕事に影響がでないよう、ちゃんとミクと話し合うよ。
「ばっかじゃないの⁉」
内と外から同時に、同じ言葉が叩きつけられた。
――私がこれだけ叱りつけてるのに、アンタまで小言を言う気じゃないでしょうね？　ああ、もう、だからアンタは亭主失格なのよ。この甲斐性なし！
――ごめん。
――ベタベタに甘やかしてやりなさい。それも夫の役目よ。
そんな言葉を送った姉は、指を離し、軽く俺の胸を叩いた。
「とにかく、明日も同じ失敗をしたら、私にも考えがあるからね」
内側での優しい言葉とは裏腹に、厳しい台詞をミクに向かって吐いた姉は、自分の部屋へと行ってしまった。
うつむくミクの背中を、リンが慰めるようにさすっていた。
「大丈夫だよ、ミク姉。明日はちゃんと上手く歌えるよ」
そんな言葉をかけている。
レンは俺の側に来ると、何も言わずに俺を肘で突いた。
しっかりフォローしろ、という意味なのだろう。
そんな二人のさり気ない励ましに送られて、俺達は自分の家に戻った。
リビングのソファに座って落ち込んでいるミクの前に、緑茶を淹れて差し出す。
その隣に座った俺は、どうしたものかと考えていた。
ベタベタに甘やかせと言われても、いきなり甘い言葉を並べたてるのは不自然だ。
かと言ってボディトークに持ち込んでも、問題を先送りにしてしまうだけのような気がする。
とりあえず、いつものように頭を撫でてみると、ミクはますます小さく縮こまった。
こういう時、いい手を見つけられないから、姉に甲斐性なし呼ばわりをされるのだろう。
だが甲斐性なしは甲斐性なしなりに、誠意を尽くすしかない。
「俺はミクが好きだよ」
かけた言葉に反応はないが、俺は構わず話し続けた。
「俺は歌ってるミクが一番好きなんだ」
頭に置いていた手を肩に移して抱き寄せる。
「だから、俺は歌うミクの邪魔になりたくない」
「やだっ！」
ミクは小さく叫んで、俺の服を掴んだ。
「ミク？」
「やだよ、私。別れたくなんかない！」
別れ話をされると思ったのだろう、ミクは俺にしがみつ

いて不安げにこっちを見上げている。
「俺もそうだよ。別れるなんて冗談じゃない」
大丈夫だよ、と笑って、ミクの前髪を梳く。
「ちゃんと教えてほしいんだ。俺の何がミクを不安にさせているのか。ほら、俺は鈍いから、言葉にしてもらわないと気付けないことが多いんだよ」
「別にお兄ちゃんが悪いんじゃないよ。信頼してないわけでもないの」
「じゃあ、今日はどうしたの？　俺とめーちゃんがどうこう…だなんて、絶対にありえないことだと解ってるだろ？　それとも、夫婦だっていうの隠して嘘ついたのが嫌だった？」
ミクは、違う、と首を振る。
「ＭＥＩＫＯさんにね」
小さな声でミクが言う。
ミクはウチのめーちゃんのことを「お姉ちゃん」と呼ぶから、ＭＥＩＫＯさんというのは他の家のＭＥＩＫＯのことだろう。
「あの時お兄ちゃん達の側にいたＭＥＩＫＯさんのことなんだけど……。あのちょっと前まで、彼女の歌を聴いてたの。それがね、凄く素敵なラブソングだったの」
その歌を思い出しているのか、ミクの表情が和らぐ。
「同じ家のＫＡＩＴＯさんもコーラスで加わってて、二人の息もピッタリ合ってた。『私達は二人で一つなんだ』って言ってるみたいな歌だった」
ミクは、ほう、とため息をつく。
「どうしたらそんな風に歌えるのか訊きたくて、彼女の後を追って来たの。そしたら、お兄ちゃんとお姉ちゃんがいて、あんな話してて」
そう言ったミクは、拗ねたように唇を尖らせた。
「何だかウチの二人も一対になってるように見えちゃったの。そういえば、二人はウチに来たのも一緒だし、私よりもお姉ちゃんと話してる方が、お兄ちゃん、楽しそうだし……なんて、色々考えちゃって。私が積極的に迫らなかったら、二人はくっついてたのかなあ、とか」
馬鹿な焼きもちだって解ってるよ、とミクは恥ずかしそうに付け足した。
「なんだ」
ミクの話を聞いた俺は、ホッとして呟いた。
「『なんだ』って、どういう意味⁉」
真剣に打ち明け話をしていたミクは、ぷうっと頬を膨らます。
「ああ、ごめん。馬鹿にした訳じゃないよ。ただ、ミクが歌を蔑ろにしたんじゃなくて、歌に同調し過ぎただけだって解ったら安心して、つい……」
「同調？」
自覚してないのか、ミクは首を傾げた。
「だから、他所のＭＥＩＫＯが歌った歌に共感し過ぎて、彼女が歌に込めた気持ちと現実がごっちゃになったんだよ。あの後、他の歌を聴いてないだろ？」

俺の問いにミクは頷く。
「じゃあこれは完全に俺のミスだ。あの時ちゃんと追いかけて話を聞けば、すぐに対処できたはずだから」
対処？　と聞き返すミクの耳元に唇を寄せて、俺はＫＡＩＴＯが歌うラブソングの中の、印象的なフレーズを吹き込んだ。
こういう時、自分のオリジナル曲があればもっといいのに。
ひゃっ、とくすぐったそうに首を竦めたミクは、頬を染めて不思議そうに瞬きした。
「少しはもやもやが消えただろ？」
「うん」
「『ミク』が歌った歌でもないのにそんなに影響されるなんて、余程素敵な歌だったんだね。だけど、今後は待ち時間に歌を聴くのを控えた方がいいかもしれないな。他の人の歌が気になって自分の歌が歌えないんじゃ、どうしようもないよ」
「うん、これからは気をつける」
そう言ったミクは、俺に身を預けて、ぽつりと呟いた。
「でもね……、お兄ちゃんは気にならない？」
「ん？」
何が？　と訊くと、ミクは言いにくそうに続けた。
「例えば他所の私がマスターへの熱烈な恋心を歌ってたり、レン君と仲良くしたり、リンちゃんと百合っぽくしてても平気？　気にならない？」
「ならないな」
「……全然？」
不服そうなミクの声に、俺は苦笑する。
「全然。だってそれは俺のミクじゃないし」
腕の中のミクが、ピクンと小さく肩を揺らす。
「……もう一度言って」
「うん、だから全然気にならな――」
「それじゃなくて、その後の」
後ってなんだと考えた俺は、しばしの間の後、ミクの聞きたい台詞に思い至った。
「俺の、ミク」
正解だったらしく、ミクはぎゅっと俺に抱きつく。
「大好きだよ、俺の、可愛い、大切な、ミク」
殊更優しい声で告げると、ミクは腕の中で照れ臭そうに小さく唸った。
勘違いかもしれない。
ごっこ遊びなのかもしれない。
それでもミクが俺を側に置きたがったのは、時折こうして自分の存在を確かめてくれる相手が欲しかったからではないだろうか。
ミクは俺達の中で一番多く売れている。
ということは、同じ姿形で同じ声の、違う自我を持った自分が、一番多くいるということだ。
その分、己のアイデンティティに迷うことも多いのかもしれない。

だから、自分は自分なのだと、確認できる何かを求めているのだろうか。

心配しなくても、初対面で俺にプロポーズした素っ頓狂なミクは、このミクだけだろうが。

姉のアドバイス通り「ベタベタに甘やかす」ことができたのかは解らないが、俺はしばらくそうして甘ったるい台詞をミクの耳に囁いた。

今度マスターに、オリジナルのラブソングを貰えないか聞いてみよう。

ミクの背中を軽く叩きながら、俺はそんなことを考えていた。

一日の終わり。
一番リラックス出来るはずの自分の部屋で、俺は途方に暮れて立ち尽くしていた。
今日はもう寝るだけだと言うのに、寝場所であるベッドの上掛けは不自然に盛り上がっている。
本人は隠れているつもりなのだろうが、ライトブルーグリーンの髪が隙間から零れ落ちていた。
俺は深々とため息をつくと、踵を返してドアノブに手をかけた。
「何で⁉　ちょ、どこ行くのっ？」
「誰かが勝手にベッド占領してるから、リビ――」
――ングで寝るんだよ、という後半の台詞は声にならなかった。
ベッドの上にちょこんと座った妹の姿を見た俺は、パクパクと口を開いた。
「リビ？」
「いっ……、いいから服を着なさいっ‼」
悲鳴に近い声で叱ると、妹はクスクスと笑った。
「ちゃんと着てるよー？」
「下着だ、それは！」
「違うよ、これはベビードール風のワンピースだもん。下にブラもショーツもちゃんとつけてます」
薄くひらひらとしたピンクの布を見せ付けるかのように、ミクはその裾を軽く持ち上げた。
「それとも、下に何も着てない方がよかった？」
落ち着け俺。
あれはみんな計算なんだ。俺を動揺させて、からかうのが目的なんだ。上目使いも小音を傾げるのも、潤んだ瞳も、みんなみんな作戦なんだ！
そうだ。
いちいち焦るから、ミクも面白がってつけ上がるんだ。
ここはこっちが大人になって、きっちり男というものの怖さを教えておかなくては。
「ミク。ふざけるのもいい加減にするんだ」
俺はミクの方へと歩み寄り、ベッドに片膝をつく。
「軽い気持ちで男をからかうんじゃない。俺だって家族だけど一人の男だ。いつ理性をなくして、襲いかかるか解らないんだぞ？」
そういって肩に触れると、ミクは怯んだように小さく体を震わせた。
よし。やっぱり弱気なのがいけないんだ。これでミクも少しは懲りるだろう。
暢気にそんなことを考えていたら、細い腕が俺の首に巻き付いた。
「いいよ、襲っても」
ミクの切なげな顔が間近にある。

そのまま仰向けになったミクに引っ張られ、バランスを崩した俺はベッドに倒れ込んだ。
気付けばミクにのしかかった体勢になっている。
細い腕は俺を捕まえたまま、放してくれない。
「ちょっと怖いけど、お兄ちゃんなら何しても構わないから」
ミクが潤んだ瞳で俺を見つめる。
「やさしくして、ね？」
顔から血の気がサーッと引いた。
その血が別のところに集まる前に、俺は声の限りに叫んだ。
「めっ……！　めーちゃん！　めーえぇちゃぁぁあん!!　たーすーけーてー!!」
「あー！　なんでそこでお姉ちゃん呼ぶかなあ！　ずーるーいー！」
「ずるくない！　ずるいのはミクの方！」
「襲いたいって言うから、いいよって答えたんじゃない！」
「誰も襲いたいなんて言ってませんー！」
「黙れ！　このアホ兄妹！」
怒号と共に頭に衝撃が来た。
続いて間近で、ゴン、という鈍い打撃音。
「痛っ！」
「お姉ちゃん、いーたーいー！」
二人して頭を押さえて悶えると、更に小言が降ってくる。
「アンタ達、今何時だと思ってんの!?　ほろ酔い気分で気持ち良く寝たとこを叩き起こして、ただじゃ済まさないわよ！」
俺達はズキズキと痛む頭をさすりながら、ベッドの上に正座する。
「ミク！」
「はいっ！」
名前を呼ばれた妹は、ビクッと体を震わせた。
「そんなにカイトを食っちゃいたいなら、私が押さえてあげるから、さっさと乗っかりなさい」
「えっ……」
「めーちゃんっ!?」
呼んだ助けにとんでもないことを言われて、俺は悲痛な声をあげた。
一体俺の人権はどこにあるんだ。いや、ボーカロイドに人権があるかは知らないけど。
責ざめる俺に構わず、二人は勝手に話を続けている。
「さあ、ミク。どうするの？」
「や……その……、やっぱり最初は二人きりがいいなあって……」
もじもじしながら、ミクが答えた。
「そう。しないならとっとと部屋に帰りなさい」
そう言って姉はドアを指差す。
ミクはしぶしぶベッドを降りると、口を尖らせて部屋から出ていった。
「カイト」

「ありがと、めーちゃん」
礼を言うと、ゲンコツを落とされた。
「かよわい女子に迫られて、姉に助けを求めるんじゃない！　それでも男か、アンタは！」
俺が頭を押さえて転げ回るうちに、姉はさっさと部屋に戻ってしまった。
確かに情けないと思う。
一対一で妹に負けていては、男失格でも仕方ない。
しかし、言い訳をさせて貰えば、一対一ではなく、〇・五対一・五なのだ。
俺の中の本能……というか、男性の基本的行動パターンとして与えられている回路は、完全にミクの味方だ。
今夜はちょっとやばかった。
なけなしの理性が切れる前に、ミクにはあの性質の悪い冗談をやめてもらいたい。
さもないと本当に冗談では済まなくなってしまう。
けれども妹はまたすぐに、次の悪戯をしかけてくるのだろう。
それを少し楽しみにしている自分に気付かないふりをして、俺は深いため息をついた。

Ｅｖｅｎｔ　２

皆が寝静まった頃、私はお兄ちゃんの部屋の前に立つと、慎重にドアノブを回した。
音が立たないようにゆっくりと扉を開き、そっと中に滑り込む。
そろそろとドアを閉めて、抜き足差し足でベッドに近づいた。
そこではお兄ちゃんが、のん気に熟睡している。
シングルベッドの壁寄りに寝ているのを見て、よし、と私は拳を握った。
これならベッドに入りやすい。ダメなら足のほうから入ろうかと考えていたけれど、すんなりと忍び込めそうだ。
そう。
私は今夜、お兄ちゃんに夜這いをかけに来たのだ。
この前は、お兄ちゃんが寝る前に忍び込んでいたから、すぐにバレて逃げられそうになった。
勝負下着の上に可愛いワンピースを着て、準備万端待っていたのに、結局失敗に終わってしまった。
あの夜、折角お姉ちゃんが協力してくれると言ったんだから、やっぱり手伝ってもらえばよかったと、私は後になってから悔やんだ。
思い切って既成事実を作らないと、お兄ちゃんはいつまでも逃げ回りそうなのに。
その後二度ほど、同じようにベッドに隠れてみたけれど、待っているうちに眠くなって、気がついたら朝になっていた。
私の気配に気づいたお兄ちゃんは、部屋に戻らずリビングで寝たらしい。
お兄ちゃんの匂いに包まれて眠るのは悪くないけど、目的を見失ってはいけない。
そういえば、夜這いというのは皆が寝静まった頃にかけるものだと、いろいろグっているうちに気づいた。
だから、しばらくお兄ちゃんにちょっかいを出さずに油断させて、今夜作戦を実行することにしたのだ。
今回の格好は、素肌に男物のシャツだ。
裸エプロンやナース服に勝るとも劣らない、萌えコスチュームなのだそうだ。
ちなみにシャツはお兄ちゃんのを勝手に拝借したのだけれど、今のところ気づかれていない。
洗い立てだからお兄ちゃんの匂いはついてないけど、細身のお兄ちゃんのシャツでも私にはブカブカで、それがちょっと嬉しかった。
お兄ちゃんは壁のほうを向いて横向きに寝ているから、ここからじゃ寝顔は見られない。
寝息が乱れていないのを確かめてから、私は上掛けをそっとめくって、そろりとベッドに忍び込んだ。
お兄ちゃんの隣に横たわった私は、その背中にぴったり

と寄り添う。
色々と覚悟を決めてきたはずなのに、それだけで心臓がバクバクいった。
シャツ越しの体温が心地よくて、それなのに何だか切なくなった。
無性に寝顔が見たかった。
――こっち向かないかなあ。
私は背中越しに念を送る。
するとお兄ちゃんは小さく唸って、ごろりと寝返りを打った。
つぶされないよう少し避けたら、ちょうと目の前にお兄ちゃんの顔がきた。
これは、ちゅーしてもいいよって合図じゃないの？
やってしまえという声が自分の中からしたけれど、私は指先で頬をなぞるだけにしておいた。
寝込みを襲っておいて言えることではないけれど、初めてはやっぱり意識があった方がいい。
や、寝ぼけて理性がとんだお兄ちゃんが求めてくるのは、大歓迎なのだけれど。
そんなことを考えていたら、お兄ちゃんの腕が私を抱き寄せた。
あ、嘘、ごめんなさい。やっぱり心の準備が――
お兄ちゃんの腕の中であたふたしていると、すぐ近くから安らかな寝息が聞こえた。
パニックを起こしかけている私に構わず、お兄ちゃんはすやすやと眠り続けている。
人を抱き枕と間違ってるんだろうか。
おまけに「アイスー」なんてベタな寝言を零している。
可愛い女の子が「召し上がれー」とばかりに隣で寝ているのに、こんな場面でもアイスなの？
私は何だか悔しくて、お兄ちゃんの背中に腕を回すと、体を押し当て、ぎゅっと抱きついた。
お兄ちゃんの手が無意識に私を抱き直す。
けれどもその後は何も起こらない。
今夜はこれでいいか、と私はため息をついた。
別に私は発情期みたいに、お兄ちゃんに抱かれたくて仕方ないわけじゃない。
ただ、私が本気なのだと解ってほしいだけなのだ。
最初からプロポーズなんて無茶をしたせいか、お兄ちゃんは私の愛情表現を冗談だと思っているらしい。
それがたまらなく、もどかしい。
――本当に好きなのにな……。
お兄ちゃんは変わらず、穏やかな眠りの中にいる。
その寝息を聞いている内に、私も眠くなってしまった。
お兄ちゃんの匂いと体温に包まれて、私は幸せな気分で眠りに落ちていった。

翌朝、私はお兄ちゃんの悲鳴で目を覚ました。

目を擦りながらのろのろと身を起こすと、お兄ちゃんが壁に背中をへばりつかせて、真っ青な顔で「み、み、み……！」と私を指差した。

その態度がムカついたので、私は自分の体を抱きしめて、涙を浮かべ、「責任とってよね」と震える声で訴えてみた。

そしたらお兄ちゃんは死んで詫びようとしたので、私は慌てて冗談だと教え、マフラーを梁に引っかけ輪っかを作るのをどうにかやめさせた。

ついでに朝からうるさいと、お姉ちゃんにまたもやゲンコツをもらった。

その後お兄ちゃんは、マスターに頼んで部屋に鍵をいくつもつけた。

私達はソフトなんだから、そんなの気休めに過ぎないのに。

いざとなったらドアをぶち壊しちゃおうと思いながら、とりあえず今度は不意打ちにお風呂で背中を流してみようと、私は次の計画を密かに立てていた。

Ｅｖｅｎｔ　３

ある夜、ふと目を覚ましたら――

「うふふふ、お兄ちゃん、つーかまえたー！」

――貞操の危機に直面していた。

反射的に出そうになった悲鳴を、俺は必死に飲み込む。

ミクがこういう悪戯をしかけてくるのは、もう何度目だろうか。

その度俺達は騒いで姉を叩き起こし、頭にゲンコツを喰らっていた。

そろそろ首をへし折られる頃合いかもしれないと、俺は声をこらえながら状況の把握に努めた。

仰向けに横たわる俺の腹に、ミクが馬乗りになっている。

髪はツインテールではなくそのまま背中にたらしていて、身に纏っているのはぶかぶかの白Ｔシャツだけだ。

ベビードールやら男物シャツやらと同じく萌えを意識した格好なのだろうが、効果はあまり表れていなかった。

想像してみてほしい。

夜中に重苦しさに目を覚ますと、自分の上に長い髪を垂らした女が乗っている。

その服は闇夜に浮かび上がるような白で、滝のように流れ落ちる長髪の間からは、うふふ、という含み笑いが漏れ聞こえる。

ホラー以外の何物でもない。

思わずどこぞの僧侶の歌声を真似しそうになってから、幽霊の正体がミクだと気付いた。

つかまえたー、などという明るい声を聞いてホッとした俺は、別の意味で危機的状況じゃないかと思い直した。

大体、何故ミクがここにいるのか。

前回寝込みを襲われてから、部屋に鍵を五つもつけたのに。

「ミク、なんでここに入れたんだ!?」

まさかピッキングか？　それとも開錠プログラムでも開発したのか？

俺の問いにミクは、くふふ、と忍び笑いを漏らす。

「マスターに鍵を貰っちゃった」

何やってんだ、マスター！

「お気に入り一覧と画像フォルダの中身を家族と友達に送りつけてあげる、って言ったら、あっさり鍵をくれたよ」

……主のくせに、所有するボーカロイドの卑劣な脅しに屈したのか。

いつの間にかミクがこんな知恵を身につけているなんて……、いったいどこのサイトで知識を得たんだか。もっと前にネット禁止令を出しておくのだった。

しかし、今更後悔しても遅い。問題はこれからどうやって、この状況を打破するかだ。

このまま暗闇でもぞもぞしているのは良くないと、俺は枕元のスタンドに目を向ける。
その仕草で通じたのか、ミクがスタンドに手を伸ばした。
俺を逃がさないように乗っかったまま胸の辺りまでずり上がり、体を前に傾けてスイッチを押したものだから、ミクのささやかな膨らみが、丁度俺の目の前に来た。
やばい。
なんかもう、色々とやばい。
計算ずくのコスチュームより、こういう無意識の行動の方が俺にダメージを与えていると、当のミクは気づいていないのだろう。
灯りをつけたミクは、俺の動揺を知りもせず律儀に元の位置までずり下がっていく。
おまけに距離を誤ったらしく、さっきよりも下腹部寄りの場所で止まった。
灯りをつけたのは失敗だった。
大きめのTシャツとはいえ、その丈はギリギリ下着が隠れるくらいだ。
スタンドの温かな灯りが、ミクのあらわな太腿を照らしている。
下着のグリーンのストライプが、白い布地越しに透けて見えた。
……妹は一体何を参考にして、こういう格好をしているんだろう。
こんな見え見えの作戦に煽られてしまう自分が、本当に情けない。
しかし、視覚からの刺激と、ミクが動くたびに伝わる振動の同時攻撃は、俺の理性を焼き切る寸前だった。
理性を保つために、頭の中で猛スピードで円周率を唱えてみたけれど、ちっとも役に立ちやしない。
ここまで追い詰められては仕方ない。
ミクがベッドから転げ落ちるかもしれないが、こうなっては力ずくでミクを退かすしかなかった。
その考えを行動に移そうとして、俺はさっと青ざめた。
体が動かない。
起き上がろうと思うのに、手足にちっとも力が入らなかった。
焦る俺の顔を見て、ミクがにんまりと笑う。
「鍵をもらうついでに、マスターにお兄ちゃんの手足の自由も奪ってもらいました！」
ちょ、それ、犯罪！
人のプログラムを勝手にいじったのか！
ていうかマスター、何でミクの言いなりなんだ。アンタ、どんだけヤバイ画像持ってたんだ！
絶体絶命の危機にだくだくと冷汗をかく俺の頬を、ミクの指先がなぞる。
「怖がらなくても大丈夫だよ、朝にはちゃんと元に戻るし。それに……今夜はBまでしかしないから安心して」
兄さん平成生まれだから、Bが何なのかよく解らないよ、ミク。

や、なんとなくは解るけど、安心どころか生殺しじゃないのか、それは！

こっちはミクがもぞもぞと動くものだから、既に不覚にも○○が＊＊そうだっていうのに――って、状況がお茶の間で放送できないレベルになってきたから、某機関から検閲が入ったぞ、おい。

「ミク……、これは流石に洒落にならない。今すぐこんな冗談はやめるんだ」

俺は自由になる口で説得を試みたが、その言葉を聞いたミクはムッと不機嫌そうに顔を顰めた。

「洒落でも冗談でもないよ。なんでお兄ちゃんは解らないのかなあ」

ミクは俺の顔の脇に両手をつき、腰を上げて四つん這いになる。

明るい緑の髪が、俺の視界からミク以外の全てを遮るように落ちてきた。

「最初から、ずっと本気だよ？　私、お兄ちゃんのことが好きなの」

切なげに告げたミクの顔が、ゆっくりと近づいてくる。

首の自由は奪われていないのに、俺は顔を背けることができず、ただミクを見つめていた。

後数センチという距離で止まったミクは、ほんの少し逡巡してから、俺の唇ではなく頬にキスを落とす。

ミクはそれだけで顔を真っ赤にした。

それなのに、俺の目を覗き込んで、羞じらいながらこんなことを訊いてきた。

「……ね、ちゃんとしたキス、してもいい？」

俺は手足の自由が奪われていて良かったと思った。

もし自分の意志で動かせたなら、間違いなく抱き寄せて唇を重ねていた。

とんでもない行動に出ているくせに土壇場で羞じらうミクがたまらなく可愛くて、俺はそんな彼女に抗いようもなく惹きつけられた。

――だったらいいじゃないの。このまま流れに身を任せてしまいなさいな。

頭の中で声がする。

――男と女なんて理屈じゃないの。体から始まる関係だってあるのよ。

襟や袖に羽毛をあしらったコートと青いタイトなドレスを纏った貴禄のあるオカマが、煙草をふかしながら微笑む映像が脳裏に浮かぶ。

――アンタだってその子のこと、まんざらでもないんでしょう？　むしろ愛し始めてるんじゃないの？

いいからママは黙ってて。てか、誰だお前！

「駄目に決まってるだろ！」

自分の中のそそのかす声を、なんとか振り払って咎える。

それを聞いたミクは、ぷうっと頬を膨らますと一旦身を起こした。

「ふん、だ、お兄ちゃんのケチ！」

「ケチとかどうとかいう問題じゃないぞ！」

「いいもん、合意の方がいいから、一応お兄ちゃんの意見を聞いてみただけだもん。最初から選択の余地なんか与えてませんー」
「男女逆でもレイプは犯罪だぞ！」
「だからBまでしかしないもん」
「強制猥褻だって犯罪だ！」
「ああもう、煩いなあ」
ミクの手が、俺の口を塞ぐ。
「お兄ちゃんが悪いんだよ？」
好き放題してるくせに、ミクは悲しげにそんなことを言う。
「だって、言葉で伝えても、ちっとも本気にしてくれないんだもん。実力行使に出るしかないじゃない」
なんだその理屈は！
無茶苦茶だ！　と喚き散らしたいのは山々だが、ミクの頭に血を上らせてはいけない。口を塞がれたまま構わず喋ろうとすると、くすぐったかったのかミクがパッと手を引っ込める。その隙に俺は、ミクを宥める台詞を並べた。
「解った、ミク。じゃあ今後はちゃんとミクの話を真剣に聞くから、だからこういうのはきちんと話し合った後でいいだろ？」
「真剣に？」
訊き返すミクにコクコクと頷いてみせる。
「ちゃんと本気にしてくれる？」
「する。するから、ミク……」
俺の返事を聞いたミクは、にっこり笑って言った。
「――う・そ」
ミクは屈み込んで、俺の目を覗く。
「とりあえずこの場をしのげればいいと思ってるでしょ。お兄ちゃんの、う・そ・つ・き」
「いや、ミク、俺は本当に――」
「お兄ちゃんが嘘ついてるかどうかくらい、すぐ見破れるよ。私がお兄ちゃんのこと、どれだけ見てると思ってるの」
ああ、家族は誤魔化しが効かないから怖い。
「ミク、とにかく落ち着いて……」
「お兄ちゃん」
ミクの声のトーンが低くなる。
「私のこと嫌い？」
目を潤ませて、そんなことを訊く。
「嫌いだっていうなら……どうしても私のことが嫌だっていうなら、やめてあげるよ？」
「俺、は」
そこまで言って、言葉を喉に詰まらせた。
好きか嫌いかと問われたら、はっきり言って好きなのだと思う。
でも、出会った時からの勢いに呑まれて、なし崩しに関係を持つのは嫌なのだ。
ミクが俺に恋をしているという事態が、どうにも納得できない。だから、自分を納得させられる理由が欲しい。
ミクと同じくらい人気が出るまで……というのは無理だ

ろうが、せめてもう少し自分の仕事に自信が持てるようになってからでないと、ミクの気持ちに応えることすらできない。

このままミクの付属物になってしまうのが、俺はどうしても我慢できなかった。

その辺を上手く説明できたらいいのだが、どうやらそんな余裕は残されていないようだった。

嫌いか？　という問いに対する沈黙を、ミクは答えとして受け取ったらしい。

唇で笑みの弧を描いたミクは、もう一度俺に顔を寄せる。

「ま、待ってミク、待っ――」

顔を背けようとしたら、右手で顎を押さえられてしまった。

首をへし折られるのを覚悟で、めーちゃんを呼ぶか。

それとも、心ならずも「ミクなんか大嫌いだ」と言ってみるか。

あるいは、このままなし崩されてしまおうか。

――やっぱり、どれも選びたくない。

この窮地を打破する方法は、他にないのか？　考えろ、俺！

頭の片隅で謎のママが「諦めたら？」なんて笑ってる。

だから誰なんだアンタ――と突っ込もうとして、俺は気づいた。

曖昧な性別の謎のママ。この場から逃げる唯一の方法。

要は、ミクの気持ちを萎えさせればいい。

以前マスターが冗談半分に調整した声を、俺は思い出した。

その時の数値を、とっさに再現する。

普段と一番違うのは、ジェンダーファクターの数値だった。

「お願い、ミクちゃん……やめて……！」

俺の喉から少女の声が響く。

それを耳にしたミクは、ピタッと止まった。

これでやる気が殺がれただろうとミクを見上げると、嫌そうに俺を見下ろしていたミクは、負けるものかと唇を引き結んだ。

「それくらいでやめると思ったら大間違いだよ」

「やだ、ミクちゃん、怖い」

「あんまりふざけてると口塞いじゃうからね！」

くそ、通じなかったか！

こうなったら奥の手だ。自分のアイデンティティが揺らぎそうで、使いたくはなかったのだけれど。

「怒らないでよ、ミクちゃん。ね、落ち着いてちょうだい」

ミクを説得するふりをして、俺は自分の声に意識を集中した。

ボーカロイドの本質は「声」だ。体は所詮、飾りでしかない。

自分の喉から発せられる少女の声を聞きながら、これが今の自分の本質だと、この声に相応しい体を纏えと自分に言い聞かせる。

しばらくして、ざわ、と全身に奇妙な戦慄が走った。
追い詰められた状況で暗示が上手くいくかは不安だったが、どうやら成功したようだ。
下敷きにしている俺の体の変化に気づいたミクは、目を丸くする。
「あ……！　あああ！　そんなのずるいー！」
すっかり少女の体つきになってしまった俺を見下ろして、ミクが文句を言った。
「静かにしないと、めーちゃんが起きちゃうでしょ」
大声を出したミクを、俺は嗜めた。
聞こえる自分の声も台詞も我ながら気持ち悪かったが、背に腹は代えられない。
今度こそ諦めるだろうとミクを見上げると、妹はうつむいたまま肩を震わせていた。
その唇から零れるのは、嗚咽――ではなく、含み笑いだった。
「うふ、ふふふふふ」
もう打つ手がない俺は、ミクの奇妙な態度に動揺する。
「――これくらいで、負けないもん」
ミクは何故か闘志に燃える目で俺を見据えた。
「逃がしたりなんか、しないんだから」
低い声でそう言ったミクは、俺に向かって手を伸ばした。
え、本当に？　こんな格好のままでいいのか、ミク？
ああ、もう駄目だ。
打てる手は全て打ってしまった。
さよなら俺の貞操。
こんな事なら男の姿のままでいた方が良かった。
でも、今更戻るのも……と悩んでいると、ミクの手が俺の胸の上に置かれた。
その瞬間、ミクが凍りついた。
掴んだものを確かめるかのように、幾度か指を軽く折り曲げたミクは、俺から手を離し、その掌をまじまじと見つめた。
なんとも深刻な表情のままその手を自分の胸に当てた妹は、すうっと息を吸い込んで――
「うわあああああああああん‼　お兄ちゃんの馬鹿――――――！」
――と叫んだ。
……ここまで頑張って首をへし折られるのならば、さっさとめーちゃんを呼べばよかった。
俺が諦観の笑みを浮かべていると、予想通り、怒り狂った姉が部屋に飛び込んでくる。
「今度騒いだら首をへし折るって言ったわよね‼　あんた達、覚悟は出来てるんでしょうね⁉」
そう怒鳴ったメイコは、俺に跨ったまま泣きじゃくるミクを見て顔色を変えた。
「……カイト。まさか無理矢理ミクを襲ったんじゃないでしょうね」
「襲われたのはこっちだよ！」
ボキボキと指を鳴らしながら近づく姉に恐怖して、俺は

とっさにそう答える。
その甲高い声に眉を寄せた彼女は、ベッドの側に近寄り、俺の姿を見て爆笑した。
「あっはっはっは！　ごめん、カイト。確かにそれじゃあ、襲えないわ！　何？　なんでそんな面白いことになってんの？」
叩き起こされた怒りを忘れて笑い転げる姉に、俺は「ミクが俺の手足の自由を奪って無体を働こうとしたから、緊急避難としてこの姿になった」とだけ伝えた。
ミクがマスターを脅したことは黙っていよう。マスター命なメイコだから、何をするか解らない。
「なるほど。で、ミクはなんで泣いてるの？　ここまでして逃げられたのが嫌だった？」
「だって、お兄ちゃん、酷いんだもん！」
「だれが酷いって⁉　酷いのはミクの方じゃないか！」
「ああ、もう、カイコは黙ってて」
誰がカイコだ。
「ミク、酷いって何が？　ちゃんとお姉ちゃんに話してみなさい」
ミクは目を拭うと、しばらく黙り込んでから言いにくそうに口を開いた。
「……Bカップ……」
俺を指差してそう呟く。
「本当は男のくせに、Bはあるんだもん。ずるいよ！」
「あら、ホント」
ミクの言葉を聞いた姉は、無遠慮に俺の胸を鷲掴みにする。
「身長が縮む分、こういうとこに出るのかしら」
「だったら私も身長五センチ縮めて、胸にしたいよ！」
そう叫んでベソをかいたミクを、メイコが、よしよし、と抱き寄せている。
……それはいいから、そろそろ俺の上から降りてくれないかな。
「まあ、アンタが変なことされたんじゃないなら、それでいいわ」
「姉さん、被害者はこっちなんだけど」
「泣かされたのはミクの方なんだから、おあいこでいいじゃない」
よくない。
というか、さっきから理不尽なことばかり言われている気がする。
「いつもその格好だったら、アンタの味方もしてあげてもいいけど、どうせすぐに元に戻っちゃうんでしょ？」
「弟にも妹にも差別なく優しくしてください、姉さん」
弟というものは姉に虐げられる運命にあるのよ、と訳の解らないことを言って、メイコはミクに話しかけた。
「で？　ミクはどうするの。静かにするなら、続けても構わないけど」
だから、俺の人権はどこだ。
「……今日はやめとく。なんだか気が抜けちゃった」

やっと諦めてくれたかと、俺はホッと息をつく。
ミクはのろのろとベッドから降りると、姉に支えられるようにして部屋を出て行った。
一人残された俺は、体を元に戻そうかとも思ったが、手足が動かないのを思い出して、朝までこのままでいることにした。
手足の自由が利かないのに、普段の体でミクの重みやあれこれを反芻してしまったら、悲惨なことになりそうだったからだ。
朝になって自由に動けるようになった俺は、真っ先にマスターが怪しげな画像を保存しているフォルダを調べた。
ミクに見つかった後、フォルダ名を偽装して隠したつもりだったのだろうが、ファイル名がそのままだったので、すぐに見つけられた。
それを盾にとって、マスターに部屋の鍵を全て付け替えてもらったのだが、ミクはまた予想外の行動を取りそうな気がする。
素直に受け入れた方が楽よ？　などという謎の声を振り払って、俺は深々とため息をついた。

「ミク、好きだよ」
「……お兄ちゃん……っ！」
「ずっとミクのことが好きだったんだ。愛してるミク」
「お兄ちゃん、私も、私もお兄ちゃんのこと……っ」
「もう、お兄ちゃんじゃない」
「……カイト」
「ミク……」
「だ、だめ、カイト。私、まだ心の準備が……」
「やさしくするから、安心して俺にまかせて」
「カイト」
「素敵だよ、ミク。とっても可愛い」
「や……恥ずかしい……っ」
私は自分の体を抱きしめて、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。
潤んだ目で見上げた先には――誰もいない。
「……」
私は自分のベッドの上で、一人ごろごろと転がった。
ふと素に戻ると、確かに恥ずかしい。悶死するくらい恥ずかしい。
うつぶせになって、ううん、と小さく唸る。
何のことはない。私はお兄ちゃんの声真似をして、虚しい一人芝居をしているだけだ。
以前お兄ちゃんに迫ったら、女の子に姿を変えて逃げられた。
それなら次はこっちも男に姿を変えてやろうかと低い声の練習をしてみたのだけれど、外見のデータを書き換えるまでには至らなかった。
お兄ちゃんに比べて、捨て身の覚悟が足りないからだろうか。私にはまだ、アイドルの自分をかなぐり捨てて、男キャラになりきる力がないらしい。
その代わり、自分の低い声が意外とお兄ちゃんに似ていることを発見した。
だから、試しにちょっとお兄ちゃんの声で「ミク」とふざけ半分に言ってみたら――馬鹿みたいにハマった。
遊びだから冗談だからと自分を騙しながら、お兄ちゃんが言ってくれない甘い台詞を並べ立て、自分の言葉に自分でときめいたりなんかしてる。
傍から見たら頭がおかしくなったとしか思えないだろう。
それは十分に自覚していたから、私は誰の目もない時にこっそり一人遊びをしていた。
や、一人遊びと言っても、ちょっと甘い台詞を言うくらいで、それだって良い子の少女漫画止まりで、やらしい台詞なんか言わないし、やましいことには使ってないし、流石にそこまでしたらお兄ちゃんに失礼っていうか、アイドル失格っていうか、ボーカロイドとしてどうよっていうか、本当は自分の声だってちゃんと解ってるし、ちょっと試し

てみようかーなんて悪魔の囁きには今のところ勝ってるし、だからお兄ちゃんの声（偽）を変なコトには使ってませんてば、ホントに。

うつぶせになってるから悶々とするんだと、私は身を起こしてベッドの上に座る。

でも、寝る前にもうちょっとお兄ちゃんの甘い台詞を聞こうかと、口を開いたその時だった。

「ミク姉ー、頼みがあるのー」

元気な声とともに飛び込んできたのは、妹のリンだ。

「ななな、なあに、リンちゃん、こ、こんな夜遅くにっ」

油断しきっていた私は、いかにもやましい真似をしてましたという勢いでどもる。

けれどもリンはそれを気にする様子もなく、両手を合わせて私を見た。

妹らしい、おねだりのポーズだ。

そう、今までずっと妹の位置にいた私は、晴れて先日姉にもなったのだった。

しかも一度に弟と妹の両方ができた。同じＣＶシリーズの新ボーカロイドは、男女の双子（ホントは違うらしいけど、説明が面倒なので双子でいいと思う）だった。

この家に一番古くからいるのに、見た目のせいかすっかり妹の位置に立ってお姉ちゃん、お兄ちゃんに甘えていた私は、姉として頼られる立場になったのが本当に嬉しかった。

リンちゃんのこともレン君のことも、とっても可愛い。

それに嘘はないのだけれど、私はリンに複雑な思いを抱えていた。

リンが来たことで、お兄ちゃんにとっての妹は二人になった。

私が最初からあんな行動をとったせいか、普通の妹として振る舞うリンにお兄ちゃんは安心したみたいだった。

和やかに笑い合う二人を見る度に、妹として親しくなってから行動に出るのだったと、悔やまれて仕方ない。

しかもリンは、お兄ちゃんのことを「カイトお兄ちゃん」と呼ぶ。

妹属性を失わず自然に名前を呼ぶ方法があったのかと、私はそれに気付かなかった自分を殴りたくなった。

いや、本当はいつか「カイト」って呼ぼうと決めてたから妹属性なんかどうでもいいと思ってたのに、私の他に彼を兄と呼ぶ存在が出来たら、妹としての呼び名が急に惜しくなった訳なのだけれども。

とにかく早い話が、私はリンが羨ましくて仕方ないのだった。

そのせいか、こうして二人きりで対峙すると、ほんの少し緊張してしまう。

「頼みってなあに？」

私は複雑な思いに気付かれないよう、慎重に優しい姉の声を出した。

お姉ちゃんほどは無理だとしても、私も頼れる姉になりたい。

リンはエヘヘと笑って、願いを口にした。
「ミク姉、この前可愛いピンクのスカート履いてたでしょ？　あれ貸してほしいの」
「えっ……、ダメだよ」
頼れる姉への道は五秒で崩れた。
だってあのスカートは、とあるヒット曲に感化されたマスターがプレゼントしてくれたとっておきなのだ。
寒色系が多い私の服の中で、数少ない女の子らしい色とデザインの服なのだ。
まあ、肝心のお兄ちゃんに着てみせたら、可愛いよ、とか、似合うよ、とか言われる前に、例の歌の話になって、お兄ちゃんの替え歌の話題になって、結局アイスネタになった訳だけれども。
でも、いつかデートにこぎつけたら、花の髪飾りとセットで絶対履いていこうと決めている。
だから気軽にリンに貸すとはどうしても言えなかった。
それに――
「だってこの前貸したスカート、リンちゃん破いちゃったじゃない」
先日貸したスカートは、何でも重機？　の角に引っかけたそうで、無残な姿で返ってきた。
破いてそのまま返してくれればデータ修復で何とかなったのだろうけど、責任を感じたリンは自分で直そうとして、逆に修復不可能なほどいじくり回してしまった。
まあ、悪気はなかったみたいだし、ちゃんと謝ってくれたから、そのことはもういい。
けれども、あのピンクのスカートが同じ目に遭わされたらと思うと、リンの頼みを聞き入れる訳にはいかなかった。
「あのスカートのことはごめんなさい。でも、今回は絶対大切に履くから。明日、レンと収録に行くとき着たいの。お願い、ミク姉」
「悪いけどリンちゃん、あれはダメなの。他のなら何でも持っていっていいから」
「ええー、ミク姉のケチー」
首を縦に降らない私に、リンは唇を尖らせた。
うーん…、こんな時お姉ちゃんならどうするだろう。
私とお姉ちゃんの間で服の貸し借りはしない。だってお姉ちゃんの服は「プロポーションに自信のない奴が着るんじゃねえ！」というオーラを出してるようなのばかりだし。
今この立場にいるのがお姉ちゃんなら……、と考えても、浮かんでくるのは脅しかゲンコツばかりだった。
困り顔の私に、リンが歩み寄ってくる。
すぐ側まで来たリンは、にこっと可愛らしく微笑むと、身を屈めて私の耳に囁いた。
「素敵だよ、ミク。とっても可愛い」
やけに低い声を吹き込まれて、私の頭は真っ白になった。
リンがいきなり私を口説いたから――ではない。
この聞き覚えのある台詞は、ついさっき、私が口にしたもの、だ。
つまり。

聞かれた。
あの一人遊びを聞かれてしまった！
「やあん、恥ぁずかしーいぃ」
とどめとばかりにリン特有の鼻にかかった声でそう言った妹は、固まる私ににこにこと笑った。
「ミークーおねーえちゃん！　ピンクのスカート、貸ーしてっ？」
リンが歌うように言う。
これは脅しだ。
卑怯な脅しなのだ。
しかし自分もこの間、マスター相手に同じ真似をしてしまったのだから、人のことは言えない。
羞恥に顔を火照らせながら、私は因果応報という言葉の苦さを噛み締める。
なかなか返事をしない私に焦れたリンが、また口を開いた。
「『ずっとミクのことが好きだったんだ。愛してるミク』『お兄ちゃん、私も――』」
「解った！　解ったからもうやめてええ！　何でも持っていいから！」
「わーい、ありがとうミク姉！　明日ちゃんと返すからね！」
クローゼットから目当ての服を出し、目的を果たした妹は、上機嫌で自分の部屋に戻っていった。
残されたのは恥ずかしさのあまり死にかけている私だけだ。
私は羞恥に転げ回った後、ぽつりと呟いた。
「……お兄ちゃんが悪いんだよ」
私に何も言ってくれないから。
自給自足の愛の言葉に頼らなくてはならないほど、私を飢えさせるのが悪い。
いつになったら彼は、私の言葉を真に受けてくれるのだろう。
私は小さなため息をついて、辺りの気配を念入りにさぐってから、お兄ちゃんの声で「愛してるよ、ミク」と呟いてみた。

例のスカートは、翌日無事に返ってきた。
けれども、恥ずかしい記憶がついてしまったそのスカートを、初デートに着て行けるかはまだ解らない。
そして私はその後しばらく、リンのおねだりを黙って聞く羽目になったのだった。

「ミク」

五人揃ってのレッスン後、スタジオを出ていこうとする背中に呼びかけたら、小さな肩がビクッと揺れた。

聞こえているのは間違いない。元々歌うために生まれて来たボーカロイド。ここが人間達のイメージを具現化するバーチャル空間だとしても――否、だからこそ――俺達の聴覚は他のどの感覚よりも抜きん出ているはずだ。

なのに名を呼ばれた当人は、聞こえないふりをして姉に話しかけている。

姉もミクに、俺が声をかけているじゃないかと指摘しなかった。ミクが無視を決め込むのは、今回が初めてじゃない。

姉がこっちをちらりと見たので、俺は、何でもない、と手を振って伝えた。別に緊急の用ではなかったから。

スタジオの扉を背に、遠くなっていく兄弟達の姿を見送りながら、俺は小さなため息をついた。

これで何度目になるだろう。

ミクはこのところ、ずっと俺を避けている。

少し前まで鬱陶しいくらいに纏わりついていたのが、嘘のようだ。

「まあ……気が変わったんだろうな」

自嘲気味に呟いた己の言葉に、自分で傷つく。

今まで散々振り回されてきたのだから、清々したとでも思えばいいのに。

離れていく妹を遠くに見ながら、俺は一人、後悔と寂しさに苛まれていた。

「だからアンタは、あの子のことをどうするつもりなの？」

姉のメイコに呼び出され、そう問い質されたのは、十二月も半ばのことだった。

数分前にも同じ質問がされたのだが、うっかり「いちいち話す筋合いはない」なんて言ってしまった俺は、もう少しで頭部の形状を変更されそうになった。

「あのね、私が今まで何度アンタ達の騒ぎに巻き込まれたと思ってんの？　安眠妨害は一度や二度じゃないわよね？　なのに筋合いがないとは、大層なお答えですこと」

姉の右手が俺の頭を鷲づかみにして、握りつぶそうとしている。俺は姉の上品にすら見える笑顔を見ながら、贋物の体でも頭蓋骨を粉砕されたら死ぬだろうかと恐怖に染まる頭で考えていた。

死をもって沈黙を守る勇気などなかった俺は、姉の部屋に連れ込まれ、正座をして尋問を受けることとなった。

「どうって言われても……」

惹え切らない返事をすると、目の前のローテーブルに平

手が叩きつけられた。
「そういう曖昧な態度が、ミクを暴走させてるんでしょ。好きなら好き、嫌いなら嫌いってはっきり言ったら？」
「嫌いな訳ないよ。ミクは大切な妹なんだから」
俺が答えると、姉は大袈裟なため息をついた。
「今はそういう話じゃないでしょ。女としてどう思うかってこと訊いてんのよ！　それとも妹としか思えないって答えなの？」
俺はしばし言葉に詰まってから、「そうじゃない」と言った。
「多分……俺もミクに好意を持ち始めてると思う」
「また煮え切らない言い方ねえ。でも、だったらミクの気持ちを受け止めてあげなさいよ」
姉の言葉に、俺は首を横に振った。何で、と眉を吊り上げる姉に俺は「ミクの付属物になりたくないから」と話した。
もう少し、ボーカロイドとしての立ち位置を固めてからでないと、ミクの気持ちに応えることすらできない。対等は無理だとしても、自分の仕事を誇れるようになってからミクに向き合いたいのだと。
俺の話を聞いた姉は、「心掛けは立派だけど」と難しい顔をした。
「で、アンタはいつ、その誇りとやらを持てる予定なの？　来月？　来年？　それとも十年後？」
「それは……解らないよ」
「あのねえ、そりゃあアンタはいいわよ。勝手に目標立てて、それがクリアできたら告白してめでたしめでたしなんだから。でも、待たされてるミクの気持ちも考えなさいよ。それともアンタ、その話をミクにしたの？」
「……してないけど」
何でよ、と睨む姉に、俺は目を逸らしつつ答える。
「だって……もしミクが冗談で俺につき纏ってたら、馬鹿みたいじゃないか。洒落を真に受けて『一人前になるまで待ってくれ』だなんて」
俺の返事を聞いた姉は、ハッとせせら笑った。
「要はミクを安心させるより、自分のプライドの方が大切なのね、アンタは」
「誰もそんなこと言ってないって」
「いいえ、言ってるわよ。アンタはミクが本気かどうか疑ってる訳でしょ？　冗談なら確かに、真に受けてるアンタは馬鹿みたいよ。でもね、本気だったらミクがどんな思いでいるか解ってる？」
今まで考えていなかった想定に、俺は咄嗟に返事ができない。
「一目惚れした相手に勇気を出してプロポーズしたのに、相手は冗談としか受け取ってくれない。それでもめげずに捨て身の覚悟で迫るけど、それすら通じない。はっきり嫌いだって言われたら諦めもつくのに、相手は煮え切らない態度ばかりとる。そんな状態でずっと待たされてるミクの身にもなりなさいよ」

「それは……」
確かにそうだ。初対面でプロポーズなんてジョークとしか思えない事態から始まったから、俺はミクにからかわれているんじゃないかと今でも半分疑っている。
でも、もしミクが最初から全部本気だとしたら。
「あの子は男を弄ぶようなキャラじゃないでしょ。性質の悪い冗談で人をからかって楽しむような子でもない。十中八九、本気なのよ。いつもいつも無茶なアプローチするのに、どれだけ勇気を振り絞ってるか解る？　それに比べたら、アンタのプライドなんてたいした問題じゃないでしょ」
俺はミクの内心を思って、視線を落とした。そうだとしたら、ミクはどんな思いで俺の言葉を聞いていたのだろう。
「待っててほしいなら、ちゃんとそう伝えなさい。ミクを安心させてあげなさいよ。もし冗談だったとしても、アンタがちょっと恥かくだけじゃない。その場合は私がミクをきっちり叱るし、その先からかわれることもなくなるわよ」
姉の言い分は、全くもって正しかった。俺の胸はミクにすまない気持ちでいっぱいになった。
「そうだね、めーちゃん。俺の態度は間違ってた。今の俺の気持ちを、ちゃんとミクに伝えるよ。忠告してくれてありがとう」
俺がそう言うと、姉は「これでやっと安眠できるわ」と笑った。
次にミクと顔を合わせた時、俺は「真面目な話がある」とミクに切り出した。
ミクはきょとんとした後、困ったように視線を彷徨わせた。
「あの……今すぐ？　私ちょっと用事が……」
目を逸らしたままでの答えに、ゆっくり話したいから時間がある時の方がいいだろうと考えた俺は、「それじゃあ後で」と引き下がった。
だが、「後で」はいつになっても訪れなかった。
ミクはいつ話し掛けても忙しくなった。
冗談みたいなアプローチもぱたりと止み、二人きりになることさえなくなった。
俺と二人きりになりそうな場面を察すると、ミクはメイコのところにそそくさと逃げてしまう。
いっそ姉を通じてこっちの意思を伝えようかとも考えたけれど、自分の気持ちくらい姉の力を借りずに伝えたかったから、特に伝言は頼まなかった。
今までとは逆の追いかけっこがしばらく続いた頃、家族が二人増えることになった。
年の瀬に双子の仲間を迎え入れた俺達は、新しい家族との関係を築くのに忙しくなり、二人きりになるタイミングもつかめなかった。
ついでに歌の方も、正月休みに実家にも帰らず俺達との時間を選んだマスターが、「休み中に五人での歌を一曲仕上げる」と意気込んだものだから、色恋沙汰にかまけている余裕もなかった。
そんなこんなで新しい年を迎え一週間ほど経った頃、俺

は再びミクとの話し合いの場を持とうとした。
結果はリンとレンの二人を迎える前と一緒だった。
ここまで続けば馬鹿でも解る。
ミクは俺を明らかに避けていた。
みんなと一緒にいるときはいつも通りだったけれど、彼女は決して俺と二人きりにはなろうとしなかった。
そんなミクの態度に、俺は「これが返事か」と落胆していた。
真剣に答えようとした途端、ミクは態度をがらりと変えた。
もしかしたらミクは、こっちの意図に気付いたのかもしれない。
冗談を真に受けて答えられても困ると考えたのだろう。
つまりは——そういうことだったのだ。
俺はショックを受けている自分を笑った。
最初から解っていたことじゃないか。俺とミクでは到底釣り合いが取れないと。
ちょっかいを出してきたのは、あたふたする俺が面白かったからか。
やさぐれ気味にそんなことを考えると、心のどこからか「ミクはそんな子じゃない」と否定の言葉があがった。
たしかにミクは人を玩具にして楽しむような子ではないけれど——それならミクは、悪意はなかったけれど、単に恋がしたかっただけなのかもしれない。
ちょうど恋に恋する年頃だ。たまたま側にいた男性ボーカロイドが俺だけだったから、俺をその相手に選んだのだろう。
そして、もうミクの側にいる男は俺だけじゃない。
俺は新たにできた弟のことを考えた。
ソフトの性質からして、レンの方が俺よりずっとミクに近い。ミクの人気を受けて発売された彼らは、同シリーズの姉と同じく人気を博していた。
倉庫に積まれていた誰かとは大違いだ。
レンの方がミクに相応しいのは、火を見るより明らかだった。きっと弟の方が俺よりも、ミクのことをよく理解できるだろう。
ミクが恋の相手を俺から弟に変えても、少しも不思議ではなかった。
だから、ミクがそういう選択をしたのなら、俺も気持ちを切り替えなくてはいけない。
それなのに俺は今更になって、逃してしまった魚の大きさを思っては悔やんでいた。
こんなことならミクの冗談を真に受けておくのだった。いっそ夜這いをかけられた時、抱いてしまえばよかった。
どうしてくだらないプライドに囚われていたのだろう。差し出されたものを素直に受け取っておけば、ミクは今も俺の側にいたのだろうか。
今になって後悔しても仕方ないのに、俺は繰り返しそんなことばかり考えていた。
せめて自分の気持ちをミクに伝えて、今後はただの兄と

して振る舞うから避ける必要はないのだと言いたかった。
そんな言葉さえ告げられないほど避けられているのは、さすがに堪える。
今現在も、俺は何とか普段通りの顔ができるように、一人でその場に残り自分に言い聞かせていた。
誰が悪い訳でもない。俺とミクの間に確かな約束なんて何一つなかったのだから。
特にレンはこの家に来たばかりなのだ。いきなり嫉妬され冷たくあたられても、いい迷惑だろう。一緒にいてそれに巻き込まれるリンだってたまったものではない。
妹や弟に当たるのだけはやめておこう。
どうしても耐え切れなくなったら、メイコに愚痴を聞いて貰えばいい。そう考えると少し楽になった。
何とか優しい兄の仮面を被った俺は、家族が集まるリビングへと向かう。
だがそこにいたのはリン一人だった。
「あれ、みんなは？」
楽譜を手にソファに座っていた下の妹に尋ねると、リンはにこっと笑って言った。
「メイコ姉は自分の部屋にいるよ。でも、この後マスターのとこに行くって言ってた。ミク姉とレンはミク姉の部屋にいるんじゃないかな。今度レンがミク姉の歌をカバーするから、その相談だって」
「へえ……」
俺はそう言うのがやっとだった。折角兄としての顔を作って来たのに、たった一言で崩れてしまう自分が情けなかった。
ミクはレンと二人きりでいるのか。
彼女は弟に対しても、俺に見せたような態度で接するのだろうか。
その場面を想像しそうになった俺は、首を振ってその光景を追い払った。
「カイトお兄ちゃん、座らないの？」
リンに怪訝な顔をされて、俺は慌てて笑顔を見せた。
ぽふぽふとソファを叩く手に促されて、俺はリンの隣に座る。
すると俺の腕にリンの細い腕が絡み付いた。
リンは俺にもたれかかって、えへへー、と笑った。
「お兄ちゃん独り占めだ！」
嬉しいなあ、と笑う妹につられて俺も口元を緩める。
リンといると不思議と気分が和らいだ。妹というのはこういう存在なんだと、改めて思った。
そうして考えてみると、俺は一度としてミクのことを妹とは見ていなかったのかもしれない。
ならばこれからは、ミクに対してもリンに対するのと同じ態度で接しなければいけないのだろう。
リンとレンが一緒にいても微笑ましいとしか思わないのだから、ミクとレンが一緒にいても同じように思わなくては。
「カイトお兄ちゃん？」

「ん？　なんだい」
俺は物思いを打ち切って、リンの方に顔を向けた。
「あのね、質問があるんだけど、この歌詞のここのとこ、どういう風に考えたらいいのかなあ」
「ああ、これね。うーん……俺なりの解釈だけど、これはね――」
今五人で練習している曲の歌詞について、俺達はあれこれと話し合った。
俺とリンの解釈は少しずつ違っていて、なるほどそういう捉え方もあるのかと、リンの意見に学ぶことも多かった。
歌詞の言葉をきっかけに、他愛のないお喋りを続ける。
ミクがリビングに入って来たのは、二人で声を揃えて笑っていた時だった。
ミクは戸口で立ち止まり、無表情で俺達を見ていた。
その様子に俺とリンは何となく口をつぐんでしまう。
リビングの膠着した空気を破ったのは、ミクの後ろから上がったレンの声だった。
「どうしたんだよ、ミク姉。こんなところで突っ立って」
「あ、……ううん、何でもないの」
レンの言葉に表情を緩めたミクは、道を譲って弟を通した。
リビングに入って来て、並んで座る俺とリンを見たレンは、少し唇を尖らせてリンに手を差し出した。
「ほら、リン。行くぞ」
「えー！　やだ、もうちょっとお兄ちゃんといる」
腕にしがみついて舌を出す妹の頭を、俺は掌で「行っておいで」と軽く叩いた。
リンはぷうっと頬を膨らませてから、跳びはねるようにしてレンのところへ行き、差し出された手に自分の手を絡めた。
文句を言い合いながらもしっかりと手をつないでいる二人は、全く仲が良くて可愛らしい。
双子を見送ってふと気付くと、リビングには俺とミクの二人しかいなかった。
望んでいた二人きりの場面なのに、言おうとしていた言葉はちっとも喉から出てこない。
今更、俺に好意を抱かれていたと知っても、ミクは迷惑じゃないのか。
そんな逃げ口上が脳裏に浮かぶ。
気まずい沈黙を何とかしなくてはと考えていると、ミクの硬い声が静寂を破った。
「随分リンちゃんと仲良くなったんだね」
冷やかしも微笑ましさも含まない、淡々とした調子でミクが言う。
俺はその意図が掴めず、いつものような苦笑を浮かべて「まあ、仲良くしてもらってるよ」と答えた。
ミクはつまらなそうに「ふうん」と相槌を打つ。
「今、みんなで練習してる歌の話をしてたんだけどね、リンは中々考え方がユニークだよ。歌詞の解釈が俺と全然違うんだ」

沈黙を嫌って、俺はぺらぺらと喋り続けた。言うべきことは別にあるのに、肝心な台詞はどうしても言えなかった。
「……リンちゃんのこと、そんなに気に入った？　よかったねえ、可愛い妹ができて」
どこか刺のある台詞に眉を顰めながら、俺は「まあね」と答えた。
「誰かとは違って、リンは可愛いもんね。お兄ちゃんお兄ちゃんってじゃれついて」
「何だよミク、さっきから。妙に嫌味っぽいなあ」
俺の指摘にミクは肩をいからせた。
「どうせ私は嫌味っぽくて可愛くない妹ですよ！」
「誰もそんなこと言ってないだろう。どうしたんだよミク」
呆れ声で尋ねると、ミクは目を逸らしてぶつぶつと文句を言う。
「私と二人で歌詞の解釈なんかしたことないくせに。会った頃は逃げ回ってばかりでさ」
「そりゃあリンは、いきなりプロポーズなんて冗談は言わなかったからね」
刺々しいミクの物言いにつられて、こっちの台詞も嫌味っぽくなる。
俺の言葉を聞いたミクは、顔を赤くして叫んだ。
「私だってあんなこと言わなければ良かったって思ってるよ！」
ミクの悲鳴じみた声は、俺の胸に突き刺さった。
――なんだ、やっぱり後悔してたのか。
「そうしてたら妹として――」とか何とかミクが言っていたけれど、後の台詞はちっとも俺の耳に入ってこなかった。
ミクは俺にちょっかいをかけたことを間違いだと思ってる。
俺を好きだと言った事実を、なかったことにしたいと思っている。
不覚にも泣きそうになる自分を、俺は必死で抑え込んだ。
ミクに無様な姿は見せたくないと思った。
最初から解っていたことだ。ずっと冗談かもしれないと疑ってたじゃないか。
ミクがそれを望むのなら、そうしてあげればいい。
「……お兄ちゃん？」
突然黙りこくった俺を訝しんだミクが、俺の目を覗き込んだ。
俺はミクから目を逸らすと、低い声で「解ったよ」と言った。
「え？」
俺は無理矢理笑顔を作った。
「それなら、あのプロポーズはなかったことにしよう。今までのミクの冗談も全部」
「……お兄ちゃん、いったい……」
台詞を途切れさせたらそのまま虚勢が崩れてしまいそうで、俺はミクに何も言わせず立て続けに言葉を並べる。
「あんな性質の悪い冗談のせいで、ぎくしゃくするのは馬

鹿馬鹿しいよ。ミクもリンも、俺にとっては大切な妹だ。平等に、同じように仲良くしたいし、そうするように心がける。だからミクもつまらないことで苛々しないで、リンとも俺とも仲良くしてくれよ」

どうにか澱みなく話せた俺は、気を落ち着かせるために一度大きく呼吸をする。

そしてミクを見上げると、彼女は大きな目を見開いて立ち尽くしていた。

「……なかったことに、するの……？」

うわ言みたいにミクが言う。

「……私のこと、妹だって思ってるんだ。お兄ちゃんにとっては、リンと一緒なんだ」

どこか壊れてしまったような無表情で、ミクが呟いていた。

「ミク？」

今度は俺の方がミクの目を覗き込む番だった。

淡いグリーンの瞳の中にある感情を読み取る前に、ミクは目を閉じて俯いた。

「――解ったよ、お兄ちゃんの気持ちはよく解った」

トーンを落とした声で告げたミクは、そのまま踵を返してリビングから出て行った。

お互いに解ったと言い合いながら、俺はミクが何を考えているのかちっとも解らなかった。こっちの意図も通じたようには思えなかった。

けれども約束したのだから、これからはミクをただの妹だと思わなくてはいけない。ただの優しい兄に徹しなくてはいけない。

その提案に同意しようとはしない自分の感情をなんとか捻じ伏せようと、俺はリビングに一人残ったまま繰り返し己を説得し続けていた。

そんなやり取りの後、俺とミクが言葉通りのただの兄妹になったかと言えば、そう簡単に行くはずもなかった。

二人の間は更に険悪になり、必要な連絡以外は直接言葉さえ交わそうとしなかった。

「何をやってるのよ、アンタ達は」

メイコが呆れて俺に訊いたけれど、俺は肩を竦めて「別に」と答えた。

「別に、じゃないでしょ。何もなかったらここまでギクシャクしないでしょうが。一体何の痴話喧嘩なのよ」

姉が口にした「痴話喧嘩」という言葉に、俺はため息混じりの笑いを零した。

「そういうんじゃないよ。痴話喧嘩とか、そういう話じゃない。俺とミクの間にあるのは、兄と妹の関係だけだ。そうすることに決めたんだ」

「はあ？」

姉は訳が解らないという顔をしたけれど、詳しいことを言いたくなかった俺はそのまま口をつぐんだ。

「あ～……、何だかややこしい状況になってるみたいね。何でシンプルな脳みそしかない二人が関わってるのに、事態が混乱するのよ」

こっちには姉の皮肉に応える余裕もない。

「まあ、とりあえず兄と妹でもいいわ。だとしても、もうちょっとコミュニケーションを取るはずでしょう。一緒の家に暮らす家族なんだから。アンタ達のせいでこの家の空気が悪くなってるのよ。私はともかく、リンとレンはここに来たばかりなのよ？　初めてできた家族がギスギスしてるんじゃ、あの子達が可哀想でしょう」

痛いところを突かれて、俺は視線を下に落とす。

「原因が解らないからどっちが悪いとは言えないけど、例えミクが悪かったとしてもアンタの方が退きなさいよ。仮にも兄なんでしょ？　そりゃあ起動されたのは私達の方がミクより後だけど、それでも私達はあの子の姉と兄を自称してるのよ。あの子を助けて守ってやらなきゃいけない立場なの。アンタがミクを傷つけてちゃ、兄の名前を返上しなくちゃいけなくなるわよ」

メイコの言うことはもっともだった。リンと同じように扱うと言いながら、俺はミクを正直持て余していた。

「確かにそうだね。その……努力はするよ」

笑おうとして失敗した俺の背中を、姉がいつもと比べれば優しい強さでバシンと叩く。

「頼んだわよ。それから、事態がこれ以上複雑になる前に、相談に来ることをお勧めするけど？」

それには返事を返せずにいると、姉はため息を一つついて「しっかりしなさいよ」と言い残し、その場を去っていった。

それからの俺は極力ミクに話しかけるように努めた。食事の席でリンとレンに話しかけた後は、必ずミクにも話をふるようにした。ミクの反応は薄かったけれど、いちいち滅入ってはいられない。妹の我儘を受け止めるのも、兄の役目なのだろう。

俺に話しかけられたミクは、嫌がっているというより困っているように見えた。更に言えば、少し悲しそうにさえ見えたのだが、俺にはその理由が解らなかった。

一度、ミクにすれ違いざま「辻褄合わせみたいに話しかけてくれなくてもいい」なんて言われたから、無理をして会話を持とうとしているのが面白くないのかもしれない。

けれども再びだんまりを決め込むよりは、無理矢理にでも会話を続けるべきなのだろう。ミクからの返事も少しずつ増えてきて、このまま行けばそのうち普通の兄妹としてのコミュニケーションが取れるようになれそうだった。

ただ、俺と話すときよりも、レンと話すときの方が明らかにリラックスしているミクを見るたびに、俺の胸の中にはもやもやとした不満が少しずつ溜まっていった。

そんな毎日の中で唯一ホッとできるのはリンと一緒にいる時で、歌のことやら食べ物のことやら、終いには何故か重機の話題に至るまで、二人で取り留めのない話をした。

リンはよくレンのことを話しては、その度に幸せそうに

目を細めた。
　下の妹は自分の片割れのことを、本当に大切に思っているのだろう。そのレンがミクと付き合うようになったら、リンは寂しがるだろうか。
「いつかはリンも、弟離れする時がくるのかな」
　真正面から訊く訳にはいかず、遠回しにそんなことを言うと、リンは不思議そうに首を傾げた後、確信に満ちた目をして言い放った。
「そんなの必要ないよ。だってレンは私のものだもの」
　俺はその言葉に、返す言葉が見つからなかった。ただ、その自信が羨ましいとさえ思った。
　何か言葉を返す代わりに、俺はリンの頭を撫でた。リンは一瞬きょとんとしてから、えへへ、とはにかんだ。
　その時ミクが、いつかと同じようにリビングに入ってきた。やっぱりレンと一緒にいたようで、弟は今回もリンに呼びかけ連れて行ってしまった。
「レンと歌の練習だったの？」
　ざわつく内心を隠して、俺はミクに話しかける。あの時の気まずさまで再現するのはまっぴらだったから、不自然じゃないところで話を切り上げてリビングから出て行こうと俺は考えていた。
「うん、そう。レン君が私のカバー曲歌う予定だから」
「ああ、リンから聞いたよ。頑張ってるね」
　俺の言葉にミクは小さく頷いた。
　途切れた会話を合図にソファから立とうとした、その時だった。
　ミクが無言のまま俺の隣に座った。
　そして、どういうつもりか俺の腕に自分の両腕を絡ませた。
「ミク？」
　ミクは俺から顔を背けて、ぼそぼそと言う。
「リンちゃんと同じ扱いするんでしょ？　だったら私だって同じことしてもいいじゃない」
　拗ねた声に、俺は動揺しながら「ああ」と相槌を打つ。
　ミクは俺の腕にしがみついたまま黙りこくった。俺も何を話せばいいのか迷っていた。
　コートの布越しにミクの体温を感じる。リンの時には何とも思わなかった体の柔らかさを、髪の匂いを、息遣いを、やけに意識してしまう。
　やっぱりこの子は妹なんかじゃない。もう、妹とは思えない。
　――でも、そう思わなくてはいけないんだ。
　なるべく無心になるんだと、俺は己の意識をミクから引き離し、レッスンの時にマスターが与えた指示や調整の数値で頭の中をいっぱいにしようとした。
　お互い黙ったまま、身動きもできずに数分が過ぎた後、ミクが不意に腕を解いた。
「やっぱり違う」
　小さな声でミクが言った。
「違うって、何が？」

ミクの真意を測りかねて、俺は尋ねた。
「私、リンちゃんと同じ扱いじゃ嫌なの。妹じゃ、やだ」
こっちの心を見透かすような言葉に、贋物の心臓が跳ねた。
「なかったことにしようってお兄ちゃんは言ったけど、でも、私、やっぱりお兄ちゃんのことが――」
その先の台詞を予想して、俺はカッと頭に血を上らせた。
「もういい加減にしてくれ！」
怒鳴るというよりは悲鳴みたいな声で、俺はミクの言葉を遮った。
ミクが驚いて顔を上げるのと同時に、俺はソファから立ち上がった。
「そういう冗談はたくさんなんだ！　これ以上からかわれるなんて、まっぴらだ！　いちいちミクに振り回されるのは、もう嫌なんだよ！」
口に出してしまってから、しまった、と思った。けれども一度堰を切った言葉は、止めようがなかった。
「恋愛ごっこの相手も、からかう相手も、別に俺じゃなくてもいいんだろ？　今はもう、他にも相手になる男性ボーカロイドがいるじゃないか！　暇つぶしなら、そっちとすればいい。俺のことは放っといてくれ！　俺ばっかりミクの言葉を真に受けて、あれこれ思い悩むのはたくさんなんだよ！」
一気に吐き出して、肩で荒い息をつく。
罵声を浴びていたミクは、目を見開いて固まっていた。
その体がやけに小さく見えた。
取り返しのつかない真似をした自覚はあった。吐き出された苛立ちの跡地は、即座に後悔で埋め尽くされた。
だが、今更謝るなんてできない。
後悔に苛まれる俺が視線を落とした――その時だった。
ミクがゆらりと立ち上がり、俺の頬に拳を叩き込んだ。
こういう場面で平手ではなく拳を使うあたり、かなり姉の影響を受けている。だが、パワーまでは真似できず、その攻撃は俺を一歩よろめかせることさえできなかった。
姉と比較すれば非力な攻撃ではあったものの、俺は舌に血の味を感じた。歯を食いしばる余裕などなかったから、口の中が切れたのだろう。
ミクは俺と対峙したまま、大きな目から涙をボロボロ零していた。
「た……っ、たくさんなのは、こっちだよ！　二言目には冗談、冗談って！　私の気持ちが迷惑なら、早くそう言えばいいじゃない！　嫌いだって言えばいいじゃないっ!!」
ところどころ上擦った声で、ミクが訴える。
「本当は私なんか要らなくなったんでしょ？　新しい妹ができたから！　他に無邪気で可愛い妹ができたから、私が邪魔になったんでしょ!?　お兄ちゃんはああいうのが好みなんだ！　ちっちゃい、可愛い子にベタベタされるのが良いんでしょ、この、ロリコン！」
「誰がロリコンだ！」
謂れのない非難に、俺は言い返した。

「ロリコンじゃないの！　リンに腕組まれて、デレデレデレデレしちゃってさ！　ああ、馬っ鹿みたい‼」
「そっちだって、レンと二人っきりで部屋に閉じこもって、一体何してるんだか！　レンにも見せてやったのか？　ベビードールだとかシャツ一枚だとかってコスチュームをさ」
「お兄ちゃん、最っ低！　私とレン君が真面目に歌の練習している間、そんなやらしい想像してたんだ！　自分がやらしいこと考えてるから、そういう発想になるんだよ。そっちこそリンちゃん隣にはべらせて、どんな妄想してたわけ？　うっわあ、変態じゃないの？」
「勝手に人の考えを決めつけるなよ！　俺とリンは真面目に歌の話をしてたんだ！　大体、その変態じみた真似をしたのはミクじゃないか！」
「そこまでしないと本気にしてくれないからじゃない！　何で私が毎度毎度、捨て身の冗談を披露しなくちゃいけないのよ！　全部本気に決まってるでしょ⁉」
「だったらどうして、真面目な話し合いから逃げるんだよ⁉　何度も話がしたいって言ったのに、逃げ回ってたくせに！」
「それは……っ！」
ミクが一瞬口ごもって、お互いの喚き声が部屋から消えた。
その瞬間、ゴゴンという音とともに、俺達は頭部に衝撃を感じた。
これだけ大騒ぎしていたのだ、そろそろ姉のストップがかかっても不思議ではない。
だが姉の拳にしては、やけに手加減されていた。おまけに拳骨が降ってくる角度がいつもと違う。降ってくる、というよりも、後頭部を突き上げられたという感じだ。
振り返ると、俺の後ろにはリンが、ミクの後ろにはレンが立っていた。
二人は呆れ果てたという顔で、大きなため息をつく。リンの右手とレンの左手は、それぞれ拳を固めたままだった。
「あのさ……」
「二人で痴話喧嘩するのは勝手だけど」
リンが鋭い目つきで俺を睨んだ。多分、ミクの後ろに入るレンも同じ表情をしているのだろう。
「レンをダシに使わないで」
「リンをダシに使うなよな」
双子はぴったりと声を揃えて、俺達に言った。
それから二人は歩み寄りソファの後ろに並んで立つと、お互いの体を抱き寄せた。
「悪いけど私の一番大切な人はレンなの。言ったでしょ？　レンは私のものだって」
「俺が一番に守りたい相手はリンなんだ。それが生まれた時からの俺の役目だよ」
だから、と双子は声を重ねる。
「「無駄な嫉妬をする必要はないんだからね、二人とも」」
双子は顔を見合わせて、やれやれ、と笑った。

同じ表情を浮かべている人物がもう一人いた。リビングの入口で、姉が腕組みをして立っている。
「出遅れたわ。アホ兄妹の首を今日こそへし折ってやろうと思ってたのに」
姉は笑顔で恐ろしいことを言う。
「カイト、ミク」
外見的にも起動後の日数的にも年下の双子に叱られて恥じ入っていた俺達は、姉の言葉に顔を上げた。
「アンタ達、いい機会だから、お互い考えてることを全部ぶちまけちゃいなさいよ。どっちもアホなくせに、意外とぐだぐだ考えを巡らせてるんだから。アホはアホなりに率直に話し合いなさいよ」
二十秒足らずの間に四度もアホ呼ばわりされたけれど、実際今の俺達はその言葉に相応しい醜態を晒していたので、何も反論できなかった。
「ここで話されてもこっちが困るから、自分の部屋でもどこでも行って、二人きりで話してきなさい。仲直りするまで出てくるんじゃないわよ」
姉の言葉に促されて、俺達は俯いたままリビングを出た。
廊下に出たところでミクが再び泣き始めたので、俺はその手を取って、自分の部屋にミクを招き入れた。
姉の部屋のようにローテーブルなどなかったから、そのまま二人でベッドに並んで座る。
泣きじゃくるミクに、俺は「ごめん」と囁いた。
「勢いまかせに酷いこと言ったね。その……泣かせて、ごめん」
「わた……っ、私、いつ、も、本気……のにっ！　本気で、好き、…って、ホントに、ずっと……」
ミクがしゃくり上げながら訴える切れ切れの言葉に、俺はうん、うん、と頷く。
「ごっこ、じゃない…！　からかっ…なんか、一度もっ！」
「うん、ごめんね。ごめん」
でも、と俺はミクに問いかける。
「俺も、ミクの気持ちを真剣に受け止めようと思ってたんだ。だから話し合いがしたかった。それなのに、ずっと避けられたから、やっぱり冗談なんじゃないかって思い込んでた。ねえ、ミク。なんで俺のこと避けてたの？　冗談だって言ったから、怒ってたの？」
ミクはぶんぶんと頭を振った。
「そうじゃ、ないの。だって、だって……、お兄ちゃ…から『もう、言い寄らないでくれ』って、真面目に、言われたら、……私、もう、お兄ちゃん、に、近寄れなく、なっちゃう。お兄ちゃん、に、近づけなく、なっちゃう、って、私、それが怖くて……！」
――そうだったのか。
ミクは俺がきっぱりと拒絶するために話し合いを持ちたがっているのではないかと、不安に思っていたのか。だから、俺を避け続けていたのか。
俺が本気で「近寄るな」と言ったら、もう近づけなくなってしまうから。

あの手この手で強気にアプローチをかけてきた彼女は、その実、俺の拒絶に怯えていたのか。

ミクの内心を思うと、切なさに胸が締め付けられた。

「ミクに避けられて、俺はもう、ミクが俺に対する興味を失ったのかと思ってた。丁度レンが家に来た頃だったから、勝手に結びつけて、馬鹿みたいに嫉妬してた。他に好きな人ができたのなら、ミクのことをただの妹だと思わなくちゃって、何度も自分に言い聞かせてた。でも——駄目だった」

ミクの肩を抱き寄せる。

「リンが来て、もう一人妹ができて解ったんだ。俺にとってミクは、妹なんかじゃない。ミクは俺にとってずっと、ただの一人の女の子だったよ」

それを聞いたミクは、また肩を震わせて泣いた。

「私も……私も、リンちゃんに、ずっと嫉妬してた。お兄ちゃんに逃げられずに、ベタベタできるのが羨ましいって、思った。最初にプロポーズなんかしなければ、私もあんな風に、お兄ちゃんの側にいられたのに、……って。もっと妹として仲良くなってから、プロポーズすればよかった、って」

「言わなければ良かった」というのは、そういう意味か。

「妹として仲良くならなくてよかったよ。もしそうだったら、ミクを女の子として意識するまで、もっと時間がかかったかもしれない」

俺はミクの耳元に唇を寄せた。

もう、腹は括った。

この子に不安を抱かせたまま中途半端な約束をするのではなく、確かな約束を交わして、その後でこの子に相応しい自分になる努力を重ねればいいじゃないか。

誰かに不釣合いだと笑われたら、笑われなくなるまで高みを目指せばいい。それだけのことだ。

「ミク」と囁きかけてから、俺は決意を言葉にして伝えた。

「好きだよ」

ミクが顔を上げて俺を見つめる。

信じられないという顔で瞬きを繰り返した後、彼女はまたもや泣きじゃくり始めた。

「ああ、もう、泣かないで」

「だって……だってえ……！」

袖口で拭っても、ミクの頬はすぐに涙で濡れた。

泣きすぎて目元と鼻が真っ赤になっている。涙と鼻水で汚れたその顔は、映画のヒロインがみせるような泣き顔とは違う、みっともないものだった。

けれども俺はそのみっともない泣き顔が、たまらなく可愛くて、いとおしかった。

俺はミクの顎をつかんで顔を上げさせると、マフラーの端でその顔を綺麗に拭った。

それから不意打ちで唇を重ねる。

呆気にとられたミクは、我に返った途端ボカポカと俺の胸を叩いた。

「ひど…っ！　酷いよ、こんなブサイクな顔の時にキスなんて！　ファーストキスなのにっ！」
俺は笑いながら、ミクの攻撃を受け止める。
「ブサイクじゃないよ。可愛いよ、とっても」
お世辞じゃないと証明するために、もう一度キスを掠め取った。
「ちょ……っ！　また、キスした！」
「うん」
ミクの言葉に頷いてから、三度目を奪う。
少し長めの三度目が終わる頃には、ミクの手はしっかりと俺のコートを握り締めていた。
また零れ落ちた涙を拭うように唇で頬に触れ、瞼に触れ、額に触れる。
四度目のキスを交わしながら、俺は、もうこの子を放せない、と思った。
そのままベッドに押し倒した。そうするのが自然な気がした。
ミクは一瞬戸惑ったけれど、そっと目を閉じて俺の背中に手を回した。
歯止めになるものは、何もなかった。
ただ彼女が欲しくて、確かな約束の証になるものが欲しくて、俺は互いを隔てる物を一枚一枚取り去っていった。
夜這いまで仕掛けたくせに、彼女はいざとなると羞恥と緊張に小さく震えていて、その仕草がとても愛らしかった。
それでも俺に応えようと差し伸べられる手が、愛しくて仕方なかった。
揺さぶるたびに彼女の唇から零れる歌詞もメロディもない歌声が、耳に心地良かった。歌うために生まれ、多くの人々にその歌を与えるために生きる彼女だけれど、この歌声だけは俺以外の誰にも聴かせたくないと思った。
好きだよ、と囁くと、舌足らずな発音で、私も好き、と返ってきた。その言葉に俺は、どうしようもなく恋情をかきたてられた。
この子は俺のものだと、そう思った。
支配するのでもなく、所有するのでもなく、まるで自分の中に溶け込んでくるように、他者の存在を自分の世界に受け入れるという感覚を初めて知った。
歌の中では何度も口にした「愛してる」という言葉が示す事象はこれだったのかと、やっと解った気がした。
熱にうかされたような時間が去り、俺達は寄り添ったまま狭いベッドに横たわっていた。
冷静になると妙に気恥ずかしく、ミクは顔を合わせようとせず、俺の胸に顔を押し当てている。
「……お兄ちゃん」
小さな声に呼ばれて、俺は「ん？」と応えた。
ミクはもぞもぞと体の位置を変え、俺と目線の位置を合わせる。

横向きに寝そべって顔を見合わせた俺達は、照れくさそうに笑みを交わした。
ミクがじっと俺の目を覗き込んで、話しかける。
「あのね、お兄ちゃん」
「うん」
「――――結婚して」
――このタイミングで言うか！
澄んだ瞳を見つめ返しながら、俺は何だか罠に嵌ったような気分になった。
なにも、否定的な言葉を一言でも吐いたら外道扱いされそうなこの場面で、結婚を迫らなくてもいいだろうに。
それとも全部計算だったのだろうか。俺は知らないうちに、ミクの術中に嵌っていたのか。出会った時に宣言された目的地に、いつの間にか誘導されていたのか。
一瞬不穏な考えが脳裏をよぎったけれど、次の瞬間そんなことはどうでもいいと考え直した。
「好きだ」と告げる前に、覚悟は決めたのだ。その覚悟に「恋人」という名前がつこうが、「結婚」という名前がつこうが、大して変わりはない。
俺は苦笑を浮かべてから、「いいよ」と軽い返事をした。
「え、いいの？」
これにはミクの方が意外な顔をした。
「結婚だよ？　そんな安請け合いしてもいいの？」
「うん、結婚だろ。いいよ、ミクと結婚する」
「ああ、だけど……」と俺は思案する。
「ところで、ボーカロイド同士の結婚って、どう手続き取ればいいんだ？」
「え……知らない……けど」
知らないんだ、と、少し呆れると、ミクは拗ねたように唇を尖らせた。
そんなミクが可愛くて、尖った唇に軽いキスを与えた。
「まあ、何とかなるよ。後で調べれば人間用の書類は手に入るだろうし。書類を揃えたらマスターに相談してみよう」
不意打ちのキスに頬を赤らめていたミクは、その言葉を聞いて嬉しげに目を細め、ぎゅっと俺にしがみついてきた。
「あのね……好きだよ、お兄ちゃん」
「ああ、俺もミクのことが好きだ」
細い体を抱きしめながら、俺はミクに答えた。
こうなってもまだ「お兄ちゃん」なのかと密かに苦笑いして、そんな呼び名もそのうち変わっていくだろうかと、俺はぼんやりと考えていた。
二人で部屋を出て、みんなの前に姿を現したのは、翌朝のことだった。
昨日のことを含めてこれまでずっと迷惑をかけていたこ

とを詫びると、メイコがニヤニヤと笑いながら冷やかした。
「それで、ちゃんと仲直りはできたんでしょうね？　随分たっぷりと時間をかけて仲直りしてたみたいだけど」
その言葉に二人で顔を見合わせる。ミクはポッと頬を染め、つられて俺も赤くなった。
「実は……俺達、結婚することに決めたんだ」
そう宣言すると、三人はポカンとした顔をした。
「……結婚？」
聞き返す言葉に頷くと、姉はこめかみを指で押さえた。
「一晩でどんな話になってるのよ。……ダメだわ、コイツらの思考回路が理解できない」
レンもその傍らで同じ仕草をしている。
無邪気に喜んでくれたのはリンだけで、「いいなあ、お姉ちゃん花嫁さんか」とはしゃいでいた。
それから三人は、口々に祝いの言葉をくれた。
「で、結婚の手続きはどうするのよ」
俺が抱いたのと同じ質問を姉からされて、これから調べてマスターに相談すると答えると、呆れ顔をされた。
ミクがリンとレンに捕まっている間に俺だけ手招きした姉は、「結婚式とか指輪とかどうするつもりなの」と小声で尋ねた。
それもこれから考えると言うと、肘で軽く小突かれた。
「その辺は頑張って揃えなさいよ？　あの子だって色々夢を持ってるでしょうから」
私からもそれとなくマスターに訊いてあげる、という姉の言葉に、俺は心から感謝した。

そんな変化が起こった日ではあったけれど、ボーカロイドとしての仕事に変わりはない。
五人揃ってスタジオに行く道すがら、ミクは立ち止まって俺が追いつくのを待っていた。
このところ遠ざかる背中を見るばかりだった相手が傍らにいることが嬉しくて、俺はミクの隣に立つと、そっと手を繋いだ。
俺を見上げたミクは、幸せそうに顔をほころばせる。
これから何が起こるとしても、この笑顔だけは守りたいと、俺は心から願った。

布地の少ない衣装に、扇情的なポーズをとる女の子達。
私はネットでグラビアアイドルの画像を眺めながら、なんとも憂鬱なため息をついた。
まあ、こういう人達は、この手の体型じゃないと仕事が貰えないからね、と私は無理矢理苦笑を浮かべる。
続いていわゆる男性向けの二次元画像のページを開いてみたのだけど、そこにいる少女達も、グラビアアイドルよりはバリエーションがあったものの、多数派を占めるのは三次元の彼女達と大差ない姿の子だった。
――やっぱり男の人は、こういうのが好きなのかな。
私はもう一度ため息をつくと、自分の胸に手をあてた。
皆に愛されるべくして作られたバーチャルアイドル。
主なターゲットは男性だろうに、どうして私の体はもっと男に媚びたデザインにならなかったのだろう。
たわわな胸を、くっきりとした谷間を晒す女の子達が、私は羨ましくて仕方ない。
――もしもこんな体つきだったら、彼も襲いかかるみたいに、もっと求めてくれるのかな。
私はそんなシチュエーションを思い浮かべて、一人頬を熱くする。
そして、都合のいい妄想とは掛け離れた現実を思い出して、またもや深々とため息をついたのだった。
「そこはもうちょっと、抑えて歌った方がいいんじゃないのかな。確かにメロディはここで盛り上がるけど――」
夜も更けてきた頃、私はお兄ちゃんの部屋で、他所の初音ミクの曲についてそんな講釈を聞いていた。
その曲を持ち込んで、歌い方について相談したいと言ったのはこっちなのだけど、実はお兄ちゃんが真面目に語っている内容はほとんど頭に入って来ていない。
だってそんなのは単なる口実なのだから。
私はお兄ちゃんと二人きりになりたいだけで、更に言えば手を出して貰いたくて、夜中に部屋を訪ねてきたのだった。
なのにお兄ちゃんは私の言葉を真に受けて、歌詞の意味やメロディについて真剣に解釈を述べている。
湯上がりのパジャマ姿でやって来たのに少しも色っぽい雰囲気にならないのは、やっぱり女としての魅力が足りないからだろうか。
今って一番イチャイチャしたい時期じゃないのかな、と、私は内心ため息をついた。
お兄ちゃんと呼んではいるけれど、ボーカロイドである私と彼の間に血の繋がりは当然ない。
一緒に暮らす兄妹で、だけどただの男女でもある私達は、

つい先日恋人同士にもなった。
一目惚れから始まった私の恋は、相手に本気にしてもらえずに中々進展しなかったのだけれど、先々週の大喧嘩をきっかけに、やっと想いが通じ合った。
気持ちを確かめあった私達は、初めてのキスを交わし、それから……初日まで交わし、ついでに結婚の約束まで交わしてしまった。
どうやって彼を本気にさせようかと、あの手この手を練っていた頃が嘘のような、怒濤の展開だった。
憶えやすい日を結婚記念日にできたらいいと思ってバレンタインデーに入籍しようかと提案したら、お兄ちゃんは少し照れ臭そうに、その日は自分の一つめの誕生日だと言った。
じゃあ、十四日にマスターのところへ行こうと決めて、私達は短い婚約期間を楽しく慌ただしく過ごしている——はずなのだ。
それなのに、どうして私が憂鬱な顔をしているのかと言えば、別にマリッジブルーに陥っている訳ではなく、お兄ちゃんの態度に不安を感じているからだ。
お兄ちゃんはいい加減な気持ちでプロポーズを受けた訳じゃないと思うし、本気で結婚するつもりなのも解ってる。この前、婚姻届のファイルを見せて、証人はどうしようか、なんて私に相談してきたのだから。
私を好きだと言ってくれたのも、本心だと思う。以前から優しいお兄ちゃんだけど、気持ちを伝え合った後は、その優しさに甘いものが加わった気がする。
だけど彼は——あれから一度も私に手を出してくれない。
この二週間、キスは何度かしたけれど、彼は私を抱こうとはしなかった。
初めてはあまりにも突然で、泣き腫らしたブサイクな顔にどうでもいいパンツ、しかもシャワーも浴びてない状況で事を済ませてしまった私は、次こそは！　と、あの日以来準備万端で待ち構えているのだけど、「次」は一向に訪れなかった。
一人、出番の来ない勝負パンツを履いたまま何事もなく夜を過ごすのは、精神的に結構こたえる。
手を出してもらえないならこっちから出せばいい、と以前の私なら言いそうだけど、一度経験してしまったら、逆に夜這いだ何だという暴挙には出られなくなってしまった。
だってお兄ちゃんは私の全部を知っている。
何もない時点での拒絶と、知っていての拒絶は、意味合いが全然違う。
今の私の状況は、味見したけれどそんなに美味しくなかったと突き返されてる料理と一緒だ。それを無理矢理食べてみろと、口をこじ開けるような真似なんてできるはずがない。
やっぱり……よくなかったんだろうか。
私のことは好きだけど、私の体は好きになれなかったんだろうか。
ちっちゃい胸がダメだったのか、それとも——もっと別

のとこが気に入らなかったのか。
もっとも駄目出しをされたところで、対処のしようがないのだけれど。
ボーカロイドの本質は歌声だからと、フォルダの合間に身を潜めて、こっそりおっぱいネタの曲を歌ってみたり、ちょっとアレな歌を歌ってみたりしたのだけれど、今のところ身体データには全く変化が表れない。
それならお姉ちゃんの持ち歌をお姉ちゃんになりきって歌ったらどうだろうと試してみたけれど、結果は同じだった。
せめてお兄ちゃんが何を不満に思っているのか知りたいけど、ストレートに訊く勇気はちっとも出てこない。
初めての時はどんな様子だったっけと思い出そうとしても、緊張したし、恥ずかしかったしで半分パニックになっていたせいか、断片的な記憶しか残ってなかった。その記憶にしたって、ドキドキしただとか、痛かっただとか、でも嬉しかったし途中からは気持ち良かった……だとかいう自分の感想ばっかりだ。相手がどうだったかなんて観察している余裕なんかとてもなかったから。
ああ、だからお兄ちゃんはつまらなかったのかもしれない。私が自分のことで手一杯でマグロ状態だったから、楽しくなかったのかも。
「――……ク」
でも、最初からいきなり積極的にあれこれしろって言われても無理だと思う。もしかして夜這いなんてかけたせいで、平気でやらしいことができる子だと誤解されてるんじゃ……。
「ミク！」
「ひゃい!?」
悶々としながら考え込んでいた私は、突然の呼びかけに驚いて間抜けな声を出した。
赤くなって口を押さえると、お兄ちゃんは不思議そうに私を見る。
「どうしたの、ミク。ボーッとしてるけど、もう眠くなった？」
「う、ううん、そんなことないよ。えっと、ここは抑え気味に歌った方がいいんだよね？」
楽譜を指さして、ちゃんと真面目に聞いてました、というふりをする私に、お兄ちゃんは苦笑した。
「今日はもう、おしまいにした方がいいみたいだね」
「……ごめんなさい」
素直に謝ると、大きな手が私の頭を撫でる。
目をつぶってその手を受け止めた私は、離れていくその温かさがもっと欲しいと、瞼を開け視線で訴えた。
お兄ちゃんは笑みを消して、熱っぽい目で私を見つめ返す。
離れた手が今度は頬に触れたのを感じて目を閉じると、唇に柔らかな感触が訪れた。
キスはこんな風に自然にできるようになった。
一瞬触れただけの口づけに、それじゃ足りないと私から

唇を押し当てる。そうやって繰り返し触れるうちに、キスがだんだんと濃厚なものへと変わっていく。

遠慮がちに入ってきた舌に、ぞくん、と背筋を震わせた私は、慣れないなりに自分からも舌を絡めてそれに応えた。

「ん……っ」

思わず零れた喘ぎが恥ずかしい。でも、鼻にかかったその声も、荒くなっていく吐息も、私には止めようがない。

頬に触れていた手が、いつの間にか私の後頭部を包んでいる。もう片方の手は背中にまわされ、私を逃すまいとするように抱き寄せている。

キスにのぼせつつ、今夜はいけるかもしれない！　と期待に胸を高鳴らせていたら、私を包む彼の腕から力が抜けた。

私の肩を掴んだお兄ちゃんはやんわりと私を引き剥がして、名残惜しそうに頬に軽いキスを落とす。

「……そろそろ部屋に戻った方がいいんじゃないかな」

視線を逸らしての彼の台詞が、突き刺さるように痛かった。

やっぱりお兄ちゃんは、私なんか欲しくないの？　でも、今のキスからは、彼も私と同じ気持ちだという訴えが伝わってくるようだったのに。

涙が滲みそうになった私は、目をギュッと閉じてうつむいた。

「ミク？」

優しい声で名前を呼ばれて、思わず彼のシャツを掴む。

――私はそんなに魅力ない？

訊かなくちゃ、と思うのだけれど、はっきりとした拒絶が怖くて言葉にできない。

ストレートに訪ねる代わりに、私はこんな質問をした。

「……お兄ちゃんは、私のこと……好き？」

「好きじゃなきゃ、キスなんてしないよ」

当然だというその口調が嬉しくて、でもすぐに、それじゃあHするほどには好きじゃないのかななんて思い直して、私はますます落ち込んだ。

だけど、シャツを掴んだ手は離せなかった。今逃げ出してしまったら、この先もずっとお兄ちゃんの気持ちを聞き出せない気がした。

「……私達、結婚するんだよね？」

またもや訊きたいこととずれた質問をすると、お兄ちゃんは怪訝な顔で「どうしたんだ？　ミク」と尋ね返した。

私は、あのね、とうつむいたまま話す。

「結婚って、ただ好きなだけじゃ駄目じゃない？　一緒に暮らすのに大事なことが沢山あるよね。だから……ちゃんと話し合っておきたくて……」

ああ、何て言ったらいいんだろう！

「……もしかして、考え直したいの？」

硬い声に思わず顔を上げると、目の前にいるお兄ちゃんは不安げに私を見つめていた。

「ちっ…違うよ！　結婚して、って言った気持ちに変わりはないの。ただ……その……」

口ごもる私に、お兄ちゃんは眉を寄せる。
「ミク、気にしないではっきり言ってくれないかな。俺は鈍いから、ズバッと言われないと気付かないことが多いんだよ」
そんな、ズバッと、なんて言われても困ってしまう。
無言のままの私に彼はますます顔を曇らせた。このままじゃ余計に問題がこじれてしまうと、私は思い切って悩みをそのまま口に出した。
「だから……あの…、……っ、なんで抱いてくれないの!?」
いきなり叫んだ私に、お兄ちゃんが面食らっている。
でも一度吐き出し始めたら、積もりに積もった悩みや不安は止めようがなく零れ落ちた。
「せっかく恋人同士になったのに、なんで手を出してくれないの！　私、そんなに魅力ない？　一度したら、うんざりしちゃった？　私のことは好きでも、私の体は好きになれない？　不満があるなら言ってほしいの。直せるところは頑張って直すから。でも、いきなりDカップになれって言われても無理だけど……。か、体の改造はできなくても、慣れてくればテクニックはどうにかなるよ！　私だって、お兄ちゃんを気持ち良くしてあげられるようになるから。だから……何が嫌なのか教えてよ！」
勢い任せの私の台詞を聞いたお兄ちゃんは唖然として、それから徐々に顔を赤く染めた。
「何言ってるんだよ、ミク」
呆れた、というその声音に私はむきになる。
「だって、体の相性は大事なことだよ！　私は気持ち良かったけど、お兄ちゃんは――」
台詞の途中で、ストップ、とお兄ちゃんが掌を向ける。
「あのね、ミク。言っとくけど、俺はずっと我慢してるんだよ」
「え？」
「抱きたいに決まってるだろ。もう、こっちは次の日からずっと悶々としてるんだから」
私はきょとんとして、目をしばたたかせる。
「な、なんで我慢なんかするの？」
理由がまるでわからない。みんなの目があるから、とか？
お兄ちゃんは深々とため息をついて続けた。
「ミクが言ったからじゃないか。こういうことは結婚してからの方がいいって」
――え？
「言ってない！　私、そんなこと言ってないよ！」
記憶を遡っても、全く覚えがない。
「いや、言ったよ」
「嘘！　いつ言った？」
「初めてが済んだ次の朝」
半自で恨めしそうに睨まれつつ必死に思い出そうとするけれど、やっぱりそんな台詞は記憶になかった。
ふるふると首を振る私に、お兄ちゃんは、ハア、ともう一度ため息をついた。
「あの朝、毛布に潜りながら『もっと、ちゃんとした時に

したかった』って言ったじゃないか。憶えてない？」
お兄ちゃんのそんな台詞を聞いて、私はあの朝の会話を思い返した。
裸のまま一晩をともにしても朝日の中で一糸纏わぬ姿を見られるのが恥ずかしかった私は、毛布を巻きつけたままベッドの周りを手で探って、脱ぎ散らかした服を集めていた。
そんな私を他所にさっさと服を着てしまったお兄ちゃんは、気を利かせて私の服を拾ってくれたのだけれど、普段着仕様の少しよれっとしたしまぱんまで拾ってくれたりなんかした。
私は真っ赤になってパンツをひったくると、頭まで毛布を被って喚いたのだ。
「もっと、ちゃんとした（パンツを履いてる）時にしたかったのに」と。
それがなんで、結婚してから、って意味に受け取られたんだろう。
首を傾げる私に気づかず、お兄ちゃんは少し拗ねたように言う。
「そういえばミクは最初からプロポーズしてたし、あの時もすぐに『結婚して』って言ったから、本当はちゃんと結婚した後に、そういうことをしたかったのかと思ったんだけど。確かに俺も、いきなり過ぎたって反省したんだ。だから、あと数週間で夫婦になるなら、その間くらい我慢しようと頑張ってたのに……」
「違うの？」と訊かれて、私は力いっぱい「違うよ！」と叫んでいた。
「結婚するまでHはしちゃいけない、なんて思ってないよ。一昔前の人じゃあるまいし。あれはそういう意味で言ったんじゃなくて――」
そこで私は言葉に詰まる。
「なくて？」
先を促された私は、目をそらしてボソボソと答えた。
「……あんなみっともないパンツじゃなくて、ちゃんとしたのを履いてる時にしたかったな……って」
そういう意味だもん、と消え入るような声で言うと、お兄ちゃんは不思議そうに首を傾げた。
「そんなに変なの履いてたっけ？　いつも仕事の時に履いてるしまぱんと同じじゃなかった？」
「仕事のとは別だもん！　あれはアンダースコートみたいなもので、見せても大丈夫なヤツだもん。似てるけど全然違うの！」
「正直何が違うのか解らないんだけど……」
そこで彼は表情を緩めて、そっか、と呟いた。
「いきなり押し倒したこと、嫌だった訳じゃないんだ」
「嫌な訳ないよ！」
私は勢い込んで言った。
「嫌どころか嬉しかったよ！　それなのに、あの夜からキスまでしかしてくれなかったから……私の体、そんなに魅

力ないのかな、って思ってた。だって……あんまり色っぽい体じゃないし……胸、とか……」

だんだんと口ごもる私を、不意にお兄ちゃんの腕が包み込んだ。

「好きだよ、ミク。体も含めた、ミクの全部が」

それから唇に落とされた軽いキスが、まるで可愛くて仕方ないと言っているようで、私は舞い上がってしまいそうになる。

ドキドキと鼓動を速めていると、お兄ちゃんは私の目を覗きこんで照れくさそうに言った。

「まあ、魅力を感じるかどうかは、言葉で説明するより行動で示した方がいいと思うんだけど……ミク、今夜は『ちゃんとした時』なのかな？」

「え？」

一瞬遅れて台詞の意味が解った私は、こくこくと力いっぱい頷く。

「うん！　ちゃんとしてる。すっごく、ちゃんとした時だよ！」

パジャマの下は、レースのバラがついた可愛いピンクのショーツだ。お揃いのブラジャーは、私の部屋でお留守番中なのだけれど。

それを聞いたお兄ちゃんは、私の耳元に唇をよせて囁いた。

「じゃあ……抱いてもいい？」

少し低めの熱っぽい声を耳に吹き込まれて、ぞくっ、と私の背筋に慄きが走る。

私は答える代わりに、彼の手を取って自分の胸に当てた。

パジャマの布地のすぐ下はもう素肌なのだと、解ってもらえただろうか。

彼は私の胸に手を置いたまま、さっきの続きみたいな深いキスをする。舌を絡ませながら胸をまさぐられて、私の体は彼の手にたやすく応え始める。

尖った乳首を布越しに摘まれて、んぅ、と甘ったれた声が漏れる。自分でも恥ずかしい声だと思うけど、その喘ぎを抑えることができない。

こうして触れられるのは今日が二度目だけど、初めての時より落ち着いていて状況が理解できるせいか、それともこれから起こることが解っているせいか、何だかとてもやらしいことをしている気分になる。

長いキスを終えたところで、胸を揉んでいるのとは反対の手が、背中を撫で下ろしてからお尻に触れる。触られる場所全部から、ピリッとした電流みたいな快感が伝わって来て、私は思わず「ひゃうっ」と悲鳴をあげてしまう。

――やだ、もう、なんて声を出してるんだろう。

私は恥ずかしくて、お兄ちゃんの胸に額を押し当てた。まだ二度目なのに、服越しに触られただけでこんなに感じている私を、彼は変に思うだろうか。

のぼせた頭でそんなことを考えていると、お兄ちゃんが私をいきなり抱き上げた。

驚いているうちにベッドの上に降ろされて、私は昭明の

明るさに目を細める。
でもその光はすぐに、覆いかぶさってきた彼の体で遮られた。逆光の中の彼は、飢えた目で私を見下ろしている。
確かに幾つもの言葉で説明されるより、この視線一つの方が明らかに彼の真意を伝えていた。
私が彼の目に魅力的に映っているなら、嬉しくてたまらない。
だけど彼の手がパジャマのボタンを外し始めた時、私は慌ててそれを止めた。
「何？」
ちょっと不服そうなお兄ちゃんに、私は目を逸らして訴えた。
「明かり……消して欲しいの」
初めての時はそんなことを頼む余裕もなくて、私は煌々とした明かりの下で全てを見られてしまった。今更とは思うけど、明るいところでするのはまだ恥ずかしい。
「真っ暗だと、魅力的に見えるかどうかも解らない気がするけど？」
そんな反論に「でも……」と抗うと、お兄ちゃんは苦笑して部屋の明かりを消しに行った。
暗闇の中戻って来た彼は、ベッドヘッドに置いてあるスタンドのスイッチを入れる。
柔らかな光の中で再びボタンを外そうとした手を遮って、私は訴えた。
「あの…っ、そっちの明かりも点けちゃ、やだ」
お兄ちゃんは私を見つめて、真面目な顔で言った。
「ミクはさっき、夫婦として暮らすには大事なことがあるって言ったよね？」
「？　……うん」
いきなり何の話だろうと疑問に思いつつ、私は頷く。
「俺もそう思うよ。特にギブアンドテイクは大切だと思うんだ」
訳の解らないまま頷く私に、お兄ちゃんはにっこりと笑った。
「部屋の明かりはミクの言う通りに消したんだから、こっちの明かりは点けさせてくれてもいいよね」
「え……？」
確かに一つお願いを聞いてもらったんだから、こっちも聞かなくちゃいけないのかな？
私が混乱しているうちに、お兄ちゃんはさっさと残りのボタンを外してしまった。
パジャマの前をはだけられた頃に漸く、スタンドのスイッチを入れた時点で、明かりを消して、という私のお願いは無視されているのだと気づく。
でも、そんな反論は噛みつくようなキスに封じ込められて、言葉には出来なかった。
私は口を塞がれたまま、ずるい、とお兄ちゃんの背中をポカポカと叩く。だけどそのうちに力が抜けてしまって、私の手は彼のシャツを掴むだけで精一杯になった。
直に触れる彼の手が熱くてたまらない。

続いて肌に触れる唇は、もっと熱かった。その唇に胸の頂を含まれて、お腹の底がじわっと疼く。

「やあっ…、ん、んん…っ！」

また変な声をあげてしまいそうで、私は腕で口を覆い、パジャマの袖を噛んだ。

片方を舌先で転がされながら、もう片方の乳首を指でつままれて、私はくぐもった嬌声を引っ切りなしに零した。初めての時の経験から、自分の弱いところも触られたらどうなるかも、なんとなく解ってるのに、実際に彼の指を感じるとこらえきれずに声が出てしまう。

あちこちまさぐられて声をあげながら、まるで自分が楽器になったみたいだと、頭の片隅で思った。

でも奏でられるだけじゃ嫌だ。私だって彼に触って、気持ち良くしてあげたい。

なのに与えられる快感に悶えるだけで手一杯で、彼に手を伸ばす余裕がない自分がもどかしい。

胸から下へと降りて行き、お腹の辺りを撫で回していた手が、するりとショーツの中に入ってくる。下腹部から脚の間へと移った手は、私の状態を確かめるみたいにその場所をなぞった。スムーズに滑る指が、もう彼をいつでも受け入れられるのだと証明していた。

潤った狭間より、その周りに触れる指がくすぐったくて、私は身をよじる。

一旦離れた彼の手が、私から下着ごとパジャマのズボンを剥ぎ取った。折角のピンクのパンツは見てももらえずに脱がされてしまったのだけれども、そんなことを気にする間はなかった。

膝を割り開かれそうになって、私はとっさに抵抗する。ぴったりとくっついた両膝に手をかけたお兄ちゃんは、ミク、と困ったように私の名前を呼んだ。

「だって……まだ、恥ずかしい……」

おずおずと言うと、お兄ちゃんは体をずらして私の顔を覗き込んだ。

「恥ずかしくないよ」

頬にキスを落としながら、大きな手が私の体を撫で下ろす。

「ミクは綺麗だよ、ここも――ここも」

ここも、と言って、お兄ちゃんは私のあちこちに触る。

「だから――見せて」

そう吹き込まれた後に耳たぶを甘噛みされて、体から力が抜ける。

お兄ちゃんは私の内腿を撫でてから脚を開かせて、その間に身を割り込ませる。恥ずかしさに顔を背けると同時に、彼以外の誰にも触らせたことがない場所に指が宛がわれた。

さっきと同じく濡れた所をなぞった指は、私の敏感な部分を探り当てて繰り返し擦る。

ああっ、と一際高い声が零れ、体が勝手にビクッと跳ねた。強い刺激が与えられている場所とは別に何故かつま先がむずむずして仕方なくて、私は足の指をギュッと丸める。

「そこ、もう……やっ……。なんだか、痛　い…！」

「え……痛いの？」
戸惑った彼の声に私は頷いた。正確には、刺激が強すぎて痛いくらいだと言いたかったのだけれど、悠長な説明はできなかった。
こちらの表情を窺うお兄ちゃんに、私は手を伸ばす。
「もう、来て、お兄ちゃん。私……お兄ちゃんが欲しい」
コクンと唾を飲み込むような間の後、お兄ちゃんが覆いかぶさってくる。私の意志を確かめるように目を覗き込む彼に、私は一つ頷いた。
脚を一層大きく広げさせられ、潤った場所に熱い塊が押し当てられる。彼がズボンの前を寛げただけで裸になってないのが、ちょっとずるいと思った。
――私だってお兄ちゃんを、もっと直に触りたいのに。
そんなことを考えているうちに、彼がゆっくりと入ってくる。初めての時のような痛みはないけれど、まだ男の人を受け入れるのに慣れてないからか、快感よりも違和感の方が強かった。
ううん、と苦しげな唸きを聞き付けた彼は、動きを止めて「痛い？」と私に訊く。私は、ううん、と首を振って、その先をねだった。
「大丈夫だから、早く来て……お兄ちゃん」
お兄ちゃんは少し辛そうに眉を寄せると、より深く私の中に身を沈める。
体の奥深くに入ってくる彼の熱に、私は背筋を震わせた。違和感は相変わらずだったけれど、繋がった場所から伝わる感覚よりも、私の中に彼がいるという事実が心地よく、嬉しかった。
荒い吐息が、体の重みが、額に滲む汗が――そんな全てが私を欲しいと言っているようで、嬉しくてたまらなかった。
全部を埋めた彼は私の顔を見つめて、労わるように前髪を梳く。私が受け入れたものに慣れるのを待ってくれているのか、彼はすぐに動かずに、肌を撫でさすり、軽いキスを幾つもくれた。
その優しさが嬉しくて、私は彼の頭を抱き寄せて自分からキスをする。
視線を絡ませた私達は、自然と笑みを交わした。もう一度、どちらからともなく唇を触れ合わせ、そして彼がそっと動き始めた。
彼に突き入れられる度に、私の口からは意志とは無関係に嬌声が零れた。違和感が徐々に薄れるのに代わって、お腹の底に切ないような熱さが広がっていく。
もっと、その熱が欲しい。この切なさをどうにかして欲しい。
でも、私はどうしたらいいのか解らなくて、ただ目の前の彼にしがみついた。
「ミク……！」
お兄ちゃんも切なげに私の名を呼んだ。繰り返し私の名前を紡ぐその声が、私の気分を昂揚させる。
彼にも同じ思いを味わってほしかった。未熟なせいで体

だけで伝えられない気持ちを、せめて言葉で伝えたかった。
「お…兄、ちゃん……っ」
喘ぎに紛れながら、私は彼に呼びかけた。
視線で呼びかけに応えた彼に、私は切れ切れに訴える。
「熱い、の……体の奥が、すごく、熱くて……」
「うん……ミクの中、あったかくて、気持ちいい、よ」
「ホント……？」
私の体、お兄ちゃんを喜ばせてあげられてる？
「私、も……！　私も、お兄ちゃん、が、私の中に、いて……すごく、嬉しい……っ」
彼のシャツを握りしめながら、私は続けた。
「もっと、熱いの、ちょうだい……、好きなの……――カイト、好き……！」
私がそう告げた次の瞬間、お兄ちゃんは小さく呻いて動きを止めた。
あれ？　と思っているうちに、お兄ちゃんの体がずしっと圧し掛かってくる。
私の肩口に額を押しつけた彼は、小さな声で「ごめん」と謝った。
その言葉と体の内側から伝わる感覚に、私も何が起こったか漸く理解する。
ええと……お兄ちゃん、先にイッちゃったの……かな？
両手をついて少し身を起こしたお兄ちゃんは、視線を逸らしたまま恨めしそうに言った。
「……『嬉しい』と、いきなり名前で呼ぶのは、予想外だったから……」
「だって、ホントに嬉しかったんだもん」
ちょっと責めるような口調に、私は思わず言い返す。
「それに、お兄ちゃんに名前呼ばれて気持ち良かったから、私も呼び返したかったんだもん」
「別にミクを責めてる訳じゃないよ」
お兄ちゃんは恥ずかしそうに眉をひそめて、もう一度「ごめんね」と言った。
「ミクは……その……まだだよね？」
その質問に、もう少し場慣れした私だったら、素直に「まだ」と伝えて続きをせがんだだろう。そしてそのまま第二ラウンドに突入すれば済むことだったのだけれど。
「う……ううん、私も気持ち良かったよ。全然問題ないよ」
その時の私はそう答えた方が彼の面子を保てる気がして、物足りなさを黙っていることにした。
私の返事に何とも複雑な表情を見せた彼は、私の上からどいて傍らに背を向けて座った。
「あのね、ミク……。気を遣われる方がこたえるんだけど……」
「気なんて遣ってないよ！　あの、ホントによかったんだからね？」
むきになった私の台詞は彼を気分的に追い詰めてしまったらしく、彼からは、唸り声ともため息ともつかない返事が返ってきただけだった。
微妙な空気に支配されてしまったその夜は結局その場で

お開きになり、私は不完全燃焼の体を抱えたまま自分の部屋へ帰ることになった。
二度目の夜に私は、男の人は意外と繊細なんだということを学び、そして少しの自信を得た。
ヘコんでいたお兄ちゃんには悪いけれど、今夜のことはつまり、我慢できなかったくらい私とのHが気持よかったってことだ。
それくらい私に魅力を感じてくれてるなら、結構——かなり、嬉しいかも。
首尾が上手く運んだとは言えない夜に、私はちょっと浮かれた気分で眠りについたのだった。

その後しばらくは何となく慌ただしくて、三度目の夜を迎えるタイミングは上手く掴めなかった。
そしてバレンタインデーの三日後、お兄ちゃんの二つ目の誕生日に入籍した私達は、その数日後から一週間のハネムーンを過ごすことになった。
誰にも邪魔されない七日間の休暇をひたすらベッドの上で費やしてしまったのは、この時のリベンジという意味合いが含まれていたせいかもしれない。
ハネムーンの間、互いの体を研究しつくした私達は違う問題を抱える羽目になったのだけれど——それはまた、別のお話。

扉の向こう側で

私は十六歳だ。

それも十六年間生きてきた十六歳じゃなくて、私を作った大人達が十六歳に抱くイメージを詰め込まれてできた十六歳だ。

だから同い年の人間よりも夢見がちなのは仕方がないと思う。

そんな十六歳の私は、運命の恋だとか、前世から続く愛だとか、生まれ変わっても愛し合う恋人達だとか、そんなロマンチックな話が大好きだ。

とはいえ、運命の出会いを心待ちにしている訳ではない。だって私はもう人妻なんだから。

私のダンナ様とは、職場内結婚というか家庭内結婚というか、とにかく手近で妥当な出会いをした。

出会った瞬間私が彼に一目惚れをして、やや退き気味だった彼に強気で迫りまくり、言わば狩るような勢いで手に入れたダンナ様なのだった。

出会いと経過はどうであれ、夫婦生活は良好だし、彼に大切にされてるのは良く解っていたので、幸せいっぱいの新婚夫婦と名乗っても差し支えは全くないと思う。

時々喧嘩はするけれど、今の生活には何の不満もない。敢えて不満を一つ挙げるなら、他所では夫婦であることを隠さなくちゃいけないことくらいだ。

物足りない訳じゃない。でも、そんな二人の間に実は運命的な繋がりがあったら、なんて解るエピソードがあったらいいのにな、と夢見ることはあった。

そんなある日、私は運命的なエピソードを見つけてしまった。

けれどもそれは私と彼との間にではなく、彼と他の女性との間にあったエピソードだった。

「で、ウチの奥さんは、今回は何を拗ねているの」

またか、というお兄ちゃんの口調が面白くなくて、膝を抱えて座る私は、彼に背中を向けたまま無言でいた。

「仕事が無事終わったご褒美がブランドネギじゃなかったから怒ってるの？　でも、赤ネギだとかやぐらネギだとか言われても、そんな珍しい品種をボーカロイド用のデータにしてくれる人は中々いないんだよ」

あやすような声を聞きながら、私は心の中で、いつもいつもネギのことばっかり考えてる訳じゃないもん、と反論する。

「すぐには無理だけど、マスターに頼んでおいたから待ってなよ。その代わり、利根川沿いの肥えた土地で採れた深谷ネギのデータならすぐくれるって言ってたよ」

思わず振り返りそうになった私は、緩みそうになった口

元を慌てて手で押さえた。
　ネギでご機嫌取りをされてる場合じゃない。問題はもっと重要なんだから。
「……お兄ちゃんはさ、本当は私となんか結婚したくなかったんじゃないの？」
　背を向けて恨みがましく言うと、お兄ちゃんは「はあ？」と呆れたように言った。
「今更何を言ってるんだよ、ミク。また妙なドラマにでも影響されたのか？」
　影響されたけどドラマじゃない。本当に会ったエピソードにショックを受けたんだもん。
　何も言わない私に、お兄ちゃんはため息を一つ吐いた。
「もしかして、この前グラビアアイドルの画像データ持ってきたの怒ってるの？　あれは持ってるアイスが何なのかじっくり見たかっただけで、余計な部分の画像は切り取って捨てちゃったよ。別にミクと比べて体つきがどうとか、思わなかったからね」
　……思ったんだな？　さては胸の大きさとか比べたな！　切り抜いたアイス画像を後で捨ててやる！　と決意しつつ、今問題にしてるのはそれじゃないから、返事なんかしてやらない。
　あー、と焦れったそうにお兄ちゃんが声をあげた。
「いつまでも拗ねてたら、仕事に差し支えるぞ！　明日からは新曲の調整が始まるんだぞ？　練習に身が入らなかったら、めーちゃんにどれだけどやされるか――」
　めーちゃん、という呼び名を聞いて、私は立ち上がり振り返った。
「めーちゃんめーちゃんって、そうやっていつもいつもお姉ちゃんの心配をしてればいいよ！　どうせお兄ちゃんは、私よりお姉ちゃんと気が合うんだもんね？　運命の相手なんだから無理もないけどっ！」
「ミク？」
　困惑する彼に手近なところにあったクッションを投げつけて、私は叫んだ。
「実家に帰らせてもらいますっ！」
　そういい捨てた私は、二人の家を飛び出し、徒歩三十秒のところにある実家へ向かったのだった。

「……ミク姉、またあ？」
　リンちゃんが呆れ顔で言った。
「この前は確か、ヘソクリくすねてアイス食べたとか何だとかだったよね？　どうせ仲直りするんだから、無駄な労力使うことないのに」
「労力使って頭が冷えるから、仲直りできるんじゃないの？」
　リビングのソファの隅っこで膝を抱える私に、双子は好き勝手なことを言う。
　でもねー、とリンちゃんが肩を竦めた。

「今回のはいくらなんでも言いがかりだよ。結局、他所のＭＥＩＫＯとＫＡＩＴＯのＰＶで、二人がイチャイチャしてただけなんでしょ？　カイトお兄ちゃん、何も悪くないじゃない」

「……イチャイチャしてただけなら、別に構わなかったもん」

ボソボソと反論する私に、リンレンはユニゾンでため息を吐いた。

家を飛び出し実家に帰って来た途端、出迎えた二人は「またか」とうんざりした顔をしたのだった。

ネギだアイスだと喧嘩をしてはしょっちゅう実家に帰ってくるから、みんながそんな反応をしても無理はない。

けれども今回のは、いつものじゃれ合いみたいな喧嘩じゃなかった。お兄ちゃんの態度次第では、二人のこれからについて考え直さなくてはいけない事態なのだ。

だから私は一人になりたくて、何も言わずに以前使っていた部屋に向かおうとした。

「ちょっと、ミク。いつものことだけど、事情くらいは話しなさいよ」

お姉ちゃんが私の肩を掴んで尋ねたけれど、私はそれを振り払った。

「……お姉ちゃんには話したくない」

顔を背けて言うと、次の瞬間ガシッと頭を鷲づかみされた。

「勝手に出戻ってきて理由も話さないなんて我儘は、通用しないのよ」

ニコリと笑ってお姉ちゃんが言う。

その笑顔だけでも充分に怖かったのだけれど、やっぱり話したくない私は視線を逸らせて口をつぐんだ。

その結果、リンちゃんとレン君の目の届かない場所に引きずって行かれ、――――恐ろしい目に遭わされた。

お姉ちゃんに逆らうもんじゃないと改めて実感した私は、三人を前に今回の原因を洗いざらい白状させられたのだった。

きっかけは一本のＰＶだった。

それは他の家のＭＥＩＫＯとＫＡＩＴＯのＰＶで、お姉ちゃんとお兄ちゃんが関わったものではなかった。

だから画面の向こうで二人がどんなに愛し合っていても、私には関係のないことなのだ――本来なら。

けれどもそこに描かれたストーリーに、私は衝撃を受けたのだった。

それは、今の製品版になる前のＭＥＩＫＯとＫＡＩＴＯの物語だった。

同時に開発を進められていたプロトタイプの二人は、当たり前のように恋に落ちていた。

けれどもＭＥＩＫＯが先に製品化され、二人は引き離されてしまう。

記憶さえリセットされる永遠に近い別れの中、二人は再会を誓い、愛を誓い、涙を零して想いを込めた歌を交わしていた。

そして製品化された後に再会した二人は、記憶を失っていたにも関わらず、手と手を触れ合わせた瞬間、互いの中に眠る愛を呼び覚ましたのだった。

後ろで流れる明るい葬送の曲は、そのＰＶの中では、引き裂かれる恋人達の嘆きと来世での再会の約束を織り込んだ、ラブソングになっていた。

そのＰＶは、私が憧れる、運命の恋の物語だった。

それがただの作り話なら、ちょっとは妬きつつも良い作品だったなと感動して、心を乱す原因にはならなかっただろう。

けれどもそのＰＶをきっかけに、私はＭＥＩＫＯとＫＡＩＴＯが製品化される前から一緒に歌っていたことを知った。

プロトタイプの二人は実在している。

そう思ったら、あのＰＶの物語まで現実のことのように思えてきた。

あれが本当なら、私はとんだ邪魔者だ。

運命の再会を果たすはずの二人の間に割り込んで、お兄ちゃんを奪い取ってきてしまったのだ。

そう思ったら悲しくて仕方なくなって、その上、自分がお兄ちゃんの側にいることさえ間違いだと言われているような気分になった。

一通り事情を話すと、お姉ちゃんは、やれやれ、とため息を吐いた。

「あのねえ、ミク。それは物語で本当のことじゃないのよ？」

「でもプロトタイプの二人はちゃんといるんでしょ？」

「いたって関係ないわよ。初期データにその情報は含まれてないし、私個人の記憶は起動されてから後のものしかないもの。他人事としか思えないわ」

それに、とお姉ちゃんは指を突きつける。

「今の私には他に好きな人がいるの。例えミクにカイトを押し付けられたって、そのまま突き返すことしかできないわ」

それでもごにょごにょと反論する私に、お姉ちゃんは大きなため息をついた。

「これ以上ミクと話してても埒が明かないわね。ちょっとカイトのとこ行ってくるわ。どうせ原因もわからずに右往左往してるんでしょうし」

そう言ってお姉ちゃんは外に出て行き、私はソファの隅で膝を抱えて縮こまっていた。

そんな私をリンちゃんとレン君が、呆れながら宥めているというのが現状だ。

「……だけどさ、ミク姉、やばくない？」

レン君が不意にそんなことを言った。
「やばいって、何が？」
黙り込む私の代わりに、リンちゃんが訊き返す。
「だって、メイコ姉はカイト兄のところに行って、ミク姉が話した事情を伝えるだろ。そしたらきっと、じゃあそのＰＶを見てみよう、って話になるじゃないか。ミク姉が言う通り、そのＰＶが二人の前世みたいなものだったら」
「ああ、ＰＶ見て前世の記憶を取り戻しちゃうかもね」
レン君の後を引き受けて言ったリンちゃんの言葉に、私はビクッと肩を震わせた。
「二人がもし前世からの恋人同士だとしたら、思い出した途端に気分が盛り上がって――なんてこともあったりして！　他には誰もいない、二人きりの部屋で見てるわけでしょ？」
私は思わず、双子の方へ顔を向ける。二人はニヤリと悪戯っ子の表情をして、いきなり寸劇を始めた。
「ああ！　カイト。私みんな思い出したわ！　貴方こそが私の運命の人だったのね！」
「そうだよ、メイコ。俺が本当に愛しているのはメイコだったんだ！　もう離さない！」
大げさな身振り手振りで台詞を言った双子は、悪乗りして、ひしと抱き合う。
「メイコ、君の全てが欲しい！」
「もっと強く抱きしめて、カイト。私の全てを思い出して」
なんてねー、と面白がってる二人の声を聞きながら、私は弾かれたように立ち上がっていた。
私の足は自動的に玄関を目指して動き出す。
飛び出していく私の背中に、リンレンが「頑張ってねー」と無責任な声援を投げた。
徒歩三十秒の私たちの家には、走ればその半分の時間で着いてしまう。
勢いよく玄関に入った私は、そこで我に返って足を止めた。
そんな訳ないじゃない。
だってお姉ちゃんが好きなのはマスターだし、お兄ちゃんだって私のこと……愛してるって言ってくれてるもん。
それでも二人の様子が気になって、私は忍び足でリビングに近づいていった。
「まったく、ミクも仕方ないわね。すぐに他所の家の作品に影響されちゃうんだから」
聞き耳を立てると、中からお姉ちゃんの声がした。
「まあ、それだけ歌の世界にのめり込めるってことなんだから、ある意味長所で才能なんじゃないのかな」
苦笑している声音で、お兄ちゃんがフォローを入れている。
どうやら双子が予想した色っぽい事態にはなってないようだ。
ホッと胸を撫で下ろしながら、私はドアを開こうとする。
その時、再びお姉ちゃんの声がした。
「……だけど、今のＰＶ見て、アンタはどう思った？」

やっぱり二人であのＰＶを見ていたんだ。
私はほんのちょっとだけドアを開いて、隙間から中を覗く。
「どうって言われてもねえ。まあ、ミクが影響されるくらい良い作品だと思うよ」
二人は並んでリビングのソファに座っていた。
「そういう話じゃなくて……、もしアンタと私があの子の言う通り、プロトタイプ時代に恋人同士だったらどうする？　って訊いてるの」
お姉ちゃんの声はちょっと気恥ずかしそうで、それを聞いた私の胸には不安が急激に込み上げてくる。
「そうだとしても、大勢いる俺達のうちの誰かが、その恋を成就させてくれてるんじゃないの？」
こういう時、自分が沢山いるって便利だよね、とお兄ちゃんは笑う。
「それもそうね。私も成就させてる連中を何組か知ってるわ。じゃあ、前世の恋とやらは彼らに任せときましょうか」
お姉ちゃんがつられて笑いながら言った。
「ミクによく言っておいてよ。私は人間とボーカロイドの壁を乗り越えるのにいっぱいいっぱいで、前世まで考えてる余裕なんてないってね」
「俺も、前世だの来世だの心配する前に、明日の仕事とアンインストールを心配する方が先だからなあ」
軽い調子で会話を続ける二人に安心して、私は今度こそ中に入ろうとした。
「だけど……」
お兄ちゃんの声を聞いて、私は手を止める。
「そうだな、もし本当にめーちゃんが俺の前世の恋人だったとしたらさ」
何を言うつもりなんだろうと、私はドキドキと不安に鼓動を早めながら、言葉の続きを待った。
「――今、幸せでいてくれたら、それでいいと思うよ」
お兄ちゃんは、とてもとても優しい声で――慈しみに溢れた声で、そう言った。
「そうね……私も同じ。ずっと幸せでいて欲しいと思うわ」
お姉ちゃんも温かな声で言葉を返す。
そして冷やかすように「幸せ？」とお兄ちゃんに訊いた。
「色々あるけど、幸せだよ。メイコは？」
「そうね。幸せだわ、とても」
早くマスターが篭絡されればもっといいんだけど、とお姉ちゃんは笑う。
そんな二人の会話を聞いていた私は、そっとドアを閉めて寝室に向かった。
自分が恥ずかしくなった。
好きな人と他の人の繋がりを聞いただけで激しく動揺してしまう私より、隣にいられなくても相手の幸せを願う二人の方が、遥かに深い愛情を抱いているように思えた。
やっぱり敵わないと思った。
もし二人が本当に愛し合うようになったら、身を引くしかないように感じた。

でも、私は彼を手放したくない。
今だけでなく、前世や来世まで欲しいと思ってしまう。
そんな欲張りな私は、本当はお兄ちゃんを愛してないんじゃないか、ただ自分のいいように彼を手元に置きたいだけじゃないのか……なんてことまで考えてしまった。
寝室の自分のベッドで半ベソをかきながらぐるぐる考えていると、ドアの外からお兄ちゃんの声がした。
「ミク、帰って来てるんだろ？　靴があるから解ってるんだぞ」
私は返事をする代わりに、布団を頭までかぶった。
そのままじっとしていると、ドアが開く音と近づいてくる足音が聞こえた。
「めーちゃんから事情は聞いたよ。だけどあれは、単なるお話で俺達には関係ないんだよ？」
お兄ちゃんはそう言って私を宥めたけど、嫉妬よりも自己嫌悪が強くなっていた私は、何て答えたらいいのか解らなかった。
はあ、と呆れたようなため息の後、隣のベッドがギシッと鳴った。多分お兄ちゃんが腰掛けたのだろう。
「あのね、ミク。寝たふりしてるなら無駄だよ。自分じゃ気付いてないだろうけど、ミクはもっと寝相が悪いんだ。ヘソかパンツのどちらかを見せずに寝てたためしなんかないんだからね」
私は閉じていた目をパチリと開いた。いきなり何を指摘するの、お兄ちゃん！
「一緒に寝れば一晩に最低五回は蹴られるし、裸で寝たらエロ以前にみっともないというか、とてもファンのみなさんには見せられない状態になってるんだから、おとなしく布団かぶってちゃすぐに狸寝入りだってバレ……」
「うう、嘘だもん！　そこまで寝相悪くないもん！」
私は思わず起き上がり、並べたてられたデタラメを否定した。
いや、デタラメかどうかは自分では判断できないんだけど。心あたりは山ほどあるし、むしろ新居を作って貰うとき、お兄ちゃんがダブルベッドを頑なに拒否して、セミダブル二つになった理由が解った気もするのだけれど。
布団から出てきた私を見て、お兄ちゃんはしてやったりと笑う。
それから両腕を広げて私に言った。
「おいで」
まだ素直になれない私は、その言葉を無視して視線を落とす。
しばらく待って腕を下ろしたお兄ちゃんは、穏やかな声でこう言った。
「もしかしたらミクにも、前世の恋人がいるかもしれないね」
私が思わず顔をあげると、彼は苦笑を浮かべて続けた。
「俺だってめーちゃんより一年以上遅れてリリースされたから、ミクと一緒に開発された男性ボーカロイドがこれから現れる可能性もあるんじゃないかな」

どういうつもりで、彼はそんな話をしているのだろう。まさか――やっぱりお互い、前世からの相手と一緒になった方がいいって意味じゃ……！

胸が痛くなるほどの不安は、次の言葉であっけなく消えた。

「でも俺は、ミクをそいつに譲る気なんかないから」

きっぱりと言い切った声に、私は目を瞠る。

そんな私に、お兄ちゃんはにっこりと笑いかけた。

「俺はこんなだから、前世の話なんかを持ち出さなくても、ミクに釣り合わないことは百も承知だよ。ミクにはもっと、対等に肩を並べられる、相応しい相手がいるのかもしれない」

「そんな……！」

「こんなだから」と言われても、私には意味が解らない。歌声も仕事への姿勢も敵わないって思わせられることが沢山あるし、尊敬だってしてるのに。

「でも俺は、解った上でミクの隣にいることを選んだんだ。結婚するって決めた時――いや、ミクの気持ちを受け入れた時に、とっくに腹は括ったんだよ。他の連中に何て言われようと、俺はミクと一緒に生きる。誰が現れたって、絶対にミクを渡さない。そして、ミクの隣にいても恥ずかしくないような自分になりたいと思う」

お兄ちゃんが真剣な眼差しで、私に告げる。

「それに、もっと高性能で使いやすい男性ボーカロイドが出たら、俺なんかあっけなくアンインストールされるかもしれない。ミクより先に生まれた分、ＯＳの変化についていけなくなるのも俺の方が先だろう。だから前世まで気にしてる余裕はないんだ。今、時間が許す限りミクの側にいるだけで精一杯なんだよ」

それじゃダメかな、とお兄ちゃんが笑う。

「前世も来世も信じられないから誓えないけど、今の俺はミクのものだよ。それは誓ってもいい」

そう言ったお兄ちゃんはもう一度腕を広げて、「おいで、ミク」と私を招く。

私はたまらなくなって、お兄ちゃんの腕の中に飛び込んだ。

向かい合わせに膝の上に乗って、ぎゅっと彼にしがみつく。

お兄ちゃんの手が私の背中をあやすように叩いた。

「歌の世界に引き込まれるのもいいけれど、ちょっとは俺のことも信用してよ。これでも俺なりに、全力でミクのこと愛してるつもりなんだからさ」

「解ってる。解ってるよ、でも――私……欲張りなの。もっと、お兄ちゃんのことが欲しくてたまらなくなるの」

少し身を離して彼の目を見て告げると、お兄ちゃんは瞬きを返し、少し顔を赤らめた。

「ひゃ⁉」

背中にあったはずの彼の手がいつの間にかお尻を撫で回していたものだから、私は妙な悲鳴を上げて身をよじった。

「お兄ちゃんっ⁉」

「え？　そういう意味じゃなかったの？」
とぼけてるのか本気なのか、睨む私に彼はきょとんとした顔をする。それから、ばつが悪そうに「ダメ？」と首を傾げた。
「ダメじゃないけど……」
口ごもる私に、お兄ちゃんが「けど？」と先を促す。
「……何だかごまかされてる気がする」
そう返すと彼は、苦笑を浮かべた。
「まあ、ミクが乗り気じゃないなら我慢するよ。すごく辛いところだけど、我慢します」
拗ねた口調で彼が言う。
もしかしたら私の機嫌を直すために、わざとそんな態度をとっているのかもしれない。
結婚してから後、こんな風に彼の手のひらの上で踊らされていると思う機会が増えた気がする。
まあ、それすらも心地よいと思ってしまうのだから、我ながらどうしようもないと思うのだけれども。
私は彼の唇に軽いキスを与えた。
「いいよ、お兄ちゃん。我慢しないで」
「ミク」
私の答えに、お兄ちゃんはちょっと眉を顰める。
「そろそろ、こういう時くらい『お兄ちゃん』はやめない？」
「……え？」
名前で呼べってことなのかな。
でも、何となく照れくさくてぐずぐずしていると、名前を声に出すより先に、キスで唇を塞がれた。
それから私たちは、新婚夫婦らしいことを沢山した。
私は呼びなれない名前を幾度も呼んだ。
そしてそのままお兄ちゃん（やっぱり気を抜くと「お兄ちゃん」だ）のベッドで眠ってしまった私は、その夜不思議な夢を見た。
気がつけば私は、極彩色の花畑にいた。
誰かに呼ばれた気がして振り返ると、一人の男の人がそこにいた。
逆光で顔も姿も解らないけれど、その人は確かに私を呼んでいる。
そっちに行こうか迷っていると、不意に手を握られた。
隣を見ると、お兄ちゃんが私と手を繋いで立っている。
お兄ちゃんは少し不安げに、でも繋いだ手に力を込めて、微笑みながら私を見ている。
私は繋いだのと反対の手を、遠くにいる男の人に振った。
今の私の隣を一緒に歩いてくれる人は、もう見つけてしまいました。だからそっちには行けません。
でも、どうか幸せに。
隣のお兄ちゃんも、他の誰かに手を振っている。
そして私たちは顔を見合わせて笑みを交わすと、手をしっかりと繋いだまま花畑を歩き始めた。
いつの間にか辺りは見慣れた我が家の前の道に変わっていて、私たちは門をくぐり、二人の家のドアを開けたのだった。

週末発生妾置

Hをするのは週末だけ。
俺とミクの間にそんなルールができたのは、最初に失態を演じたせいだ。

二月の半ば、俺達の結婚を認めてくれたマスターは、ぞんざいな祝いの言葉と他所で夫婦だと言うなという命令を気にしたのか、後で過剰なほどの結婚祝いをくれた。
一つ目は二人きりで暮らせる新居。
二つ目は愛し合う恋人達の気持ちを描いたデュエット曲。
そして三つ目は、一週間の休暇だった。
「来週まで、俺からは一切呼び出ししないから。まあ、ハネムーン代わりにゆっくりしろよ」
そういってマスターは、実際に何処か旅行に行くわけにはいかない俺達に、有名な新婚旅行先の画像データをいくつかくれた。これで気分だけでも味わえということらしい。
それなのに俺達は、そのデータを使って新婚旅行ごっこをするでもなく、貰った七日間を二人きりの家に閉じこもって過ごした。
何をしていたのかといえば——八割がたベッドの中で過ごしていたのである。
ボーカロイドの体は、あくまでも歌声に沿ったイメージ像だ。食事や排泄といった生理的な行動も、俺たちの擬人化を望む人間達の想いを受け止めたもので、いざとなれば行わなくても済む行動だ。
性欲も同様で、当然性交によって子孫をなせる訳でもなく、遺伝子を遺したいという本能など俺達とは無縁のはずだった。
だけど俺達二人は幻の体が求める欲求にしたがって、マスターがハネムーンとして与えてくれた時間を、……何と言うか、肉欲に溺れまくって費やした。
どうも俺達ボーカロイドはいつの間にか、人間たちの妄想に過剰に応えるようになっていたらしい。十代から二十代の外見に合わせた性衝動は、贋物の体の中にしっかりと根付いていた。
ついその一ヶ月前に互いの想いを確かめ合ったばかりで、直接的なコミュニケーションに飢えていた俺達は、夫婦だからという言い訳と有り余る二人きりの時間を与えられて、すっかり箍を外してしまった。
覚えたばかりの欲求を解消する術とそれによる快楽、今までずっと一緒にいた相手の知らない一面の発見等々にハマった二人は、文字通り寝食を忘れてその行為に耽った。
実体がないゆえに、本物の人間よりも疲労や倦怠によるブレーキがかかりづらかったせいもあり、休暇の間めいっぱい、俺達は互いの体に溺れていた。

そんな状況に危機感を覚えたのは、休み明けのスタジオで、貰ったデュエット曲を歌おうとした瞬間だった。

マスターがその歌の調整を始めたのはこの日が最初で、上手く歌えなくても仕方がない。

だが俺達は、この一週間、曲のデータが手元にあったにも関わらず、一小節も口ずさんでいない自分達に愕然としたのだ。

歌うために生まれてきて、何よりも歌いたいという欲求に支配されているはずのボーカロイドが、与えられた新曲を放り出して人間の真似事に耽っていた。

ボーカロイドとして、あるまじき堕落だった。

おまけに一週間もそんな生活を続けていたせいでレッスンにも身が入らず、スタジオで終始ふわふわとした感覚に囚われていた。

これはマズい。

マスターは「新婚だから仕方がないか」と苦笑して許してくれたけれど、俺達は深く恥じ入っていた。

腐っても俺達はボーカロイド。ネギフェチやアイスジャンキーのように思われて、実際それに近い言動も行っているけれど、でも歌は俺達の中でそれ以上の場所を占めているかけがえのないものだ。いや、そうでなくてはならないのだ。

歌を失くしたボーカロイドに、存在価値などありはしない。

その日、うちひしがれてスタジオを後にした俺とミクは、どちらからともなく話し合いを持った。

そして出来たのが、例のルールだった。

音楽で食べている訳ではないマスターは、平日は普通に仕事に行っている。けれども俺達に歌わせるのは平日の夜が多く、土日は完成した歌の動画の編集や、別のことにあてていた。

別のこと——というのは、作品として歌を作り上げるための調整ではなく、短いフレーズやちょっとした思いつきの断片を音にするための調整で……、まあ、解りやすく言えば、土日のマスターはめーちゃんを相手に、即興の歌を使ってじゃれあっているのだった。

俺を含めた他の四人がそんな二人の時間を邪魔するはずもなく、毎週その二日間は自動的に休みになっている。

だから俺とミクもそのサイクルに合わせて、夫婦生活を営もうということになった。

とはいえ、それは絶対のルールという訳でもなく、マスターの仕事が忙しくて週末のサイクルがずれれば、こっちもずれることになるし、平日でも翌日に二人とも予定がない時は、臨機応変に週末ルールが適用されている。また、時によってはルールを守ることよりも、夫婦のコミュニケーションを図ることが必要になる事態もあり（多くは喧嘩の仲直りなのだけれど）、その場合も特例としてルールは無視されることになっていた。

要はボーカロイドとして堕落しない程度の縛りを、自らに架すための決まりごとなのだ。

なので、そのルールが破られたからといって、目くじらを立てるほどのことではない。
確かにそうなのだが……
俺は間近にあるミクの上気した顔から目を逸らして、引き攣った笑いを浮かべた。
「ね……、お兄ちゃん、いいでしょ？」
甘えた声が耳をくすぐる。
目下、合意の上でルールを作った二人のうち約一名が、堂々とその決まりを無視する行動に出ていた。
スタジオから連れ立って帰って来て、二人の家のドアを閉めた途端、ミクは猫のように体を摺り寄せて、熱っぽい声で囁いた。
一言、「しよ……」と。
そんな誘いを聞いたら、こっちだってつい乗ってしまいたくなる。なにせ相手は可愛くて仕方ない、愛しい女の子なのだから。どうぞと差し出されたら、喜んで、と受け取る以外ないだろう。
だが、毎度それを許していたら、ルールの意味がなくなってしまう。ルールを忘れてしまっては、また堕落の一途をたどることになる。
だから俺はなるべく平静を装って、「ダメだよ」と諭すように答えた。
少し体を離して俺を見上げたミクは、ぷうっと頬を膨らませる。
「お兄ちゃんのケチ。いいじゃない、ちょっとだけでいいから」
まるでお菓子か何かを味見させろという風に、ミクは食い下がる。
「あのさ、ミク。そうやってルールを無視してたら、作った意味がなくなるじゃないか」
「でも……なんだかそういう気分なんだもん」
その台詞を聞いて、俺はピンと来る。きっとミクはそんな内容の歌を聴いて、またもや影響されてしまったのだろう。
だって、欲求不満になるにしては、いくらなんでも早すぎる。
今日はまだ火曜日なのだ。思う存分イチャイチャしたのは、つい一昨日のことだった。
「わかったわかった。じゃあ気分が変わるような歌を、何か歌ってあげるよ。そうだな……円周率を千桁まで唱えてあげようか？」
そう言って笑うと、ミクはますます膨れっ面になった。
「なんでそういう返事になるかなあ。お兄ちゃんはルールも明日の予定も解らなくなるくらい、『ミクが欲しい』って思うこと、ないの？」
「そんなこと――」
いくらだってある。現に今、俺の中の本能（人間の物真似の本能だが）寄りの半分は、「ルールなんて知ったことか！」とやかましく喚き散らしている。しかし、それに耳を貸す訳にはいかない。

「――ないね。ミク、何度もマスターやめーちゃんに叱られてる通り、ボーカロイドの第一の仕事は歌うことだろ。そしてミクは、明日も仕事だ。それに影響が出るような真似なんかできないよ」

我ながら嘘臭い優等生の台詞を吐くと、ミクは拗ねた目をして睨む。

「ふーん……お兄ちゃんは、そういう気分にならないんだ。へー」

ミクも俺の台詞を端から信じていないらしい。

ここで押し問答をしていても仕方ない。こうなったら話題の強制終了だと、俺はミクの耳元に唇を寄せて、山手線内回りの駅名を東京から順に吹き込んでやろうとした――その時だった。

ミクは屈みこんだ俺の首に腕を回して、不意打ちでキスをしてきた。

気分転換のための歌は、ミクの唇によって堰き止められてしまった。巻きついた腕は俺を逃そうとせず、押し当てられた唇は結構濃厚なキスをしかけてくる。

歯列を割って入ってきた舌を無視する気にはなれなくて、引きずられると承知しながらも俺は、ミクの舌に自分のそれを絡めた。

んん、と鼻にかかった甘い声が、ミクの喉からかすかに響く。一つベッドの中で過ごす夜の始まりに聞こえるその音は、俺をたやすく週末モードにしてしまった。

明日の仕事に響かないよう気をつければ別にいいんじゃないか、と唆す自分に理性が頷きかける。だがその時、背中から脇を撫でそのまま下へ向かおうとしたミクの手が、俺を我に返らせた。

「はい、ここまで」

首に縋っていた細い腕が解けた隙をついて、俺はミクの肩を掴み、密着した体を離した。

突然中止を宣言されて、ミクはきょとんと瞬きする。

「少しは気が済んだだろ？　続きは週末にして、着替えて食事にしよう」

まだ帰って来たばっかりなんだし、と笑うと、ミクは唇を尖らせて俺を見つめた。

その瞳の中に不穏な光を見た気がした瞬間、俺は動けなくなってしまった。

あろうことかミクの手が、ズボンの布地の上から俺の急所を鷲づかみにしている。そこを掴まれたら、どうにも逃げようがない。

仮にもアイドルがこんな真似を、と俺が軽いパニックに陥っている間に、ミクのもう片方の手は器用にベルトを外し、ズボンの前を寛げた。

ズボン越しにそこを触っていた手が下着の中に潜り込み、やわやわとした刺激を直に与え始める。

「……ね、これでもそんな気分にならない……？」

妖しい輝きを宿した瞳が、こちらを見上げている。

ピンク色の唇がニイッと弧を描いた後、嬉しそうな声が言う。

「ココは、私と同じ気分だって言ってるよ？」
どっちの意見を聞けばいいのかな？　という無邪気な物言いとは裏腹に、ミクの細い指は正直な反応を示した俺のモノをゆっくりと扱いている。
理性の最後の糸を死守しながら、俺は「ダメだ」と何とか答えた。
「ミクは明日、仕事だろっ？　だからダメ、だって！」
荒い息の合間に窘めても、全く効果はなさそうだった。そもそも、股間を膨らませた状態で偉そうに叱ったところで、説得力などありはしない。
聞き分けのない子供に対するような表情を一瞬見せたミクは、意外にも「そうだね」と俺の意見を受け入れた。
ホッとしつつも落胆している自分に呆れていると、ミクがその言葉の先を紡いだ。
「確かに私は仕事だけど、でも、お兄ちゃんは自主練以外、予定ないんでしょ？」
ミクはそう言って、ペタンとその場に跪く。
膝立ちになった彼女の顔は、その手が弄んでいるモノの丁度目の前にあった。
もしや、と思っていると、ミクが悪戯っ子の顔で俺を見上げる
「だから……全部はしないもん。お兄ちゃんだけ気持ちよくしてあげる。ね……？　それならいいでしょ？」
そしてミクは俺の返事を待たずに、下着の中ですっかり形を変えてしまっていた性器を露出させると、その先端をぺろりと舐めた。指での刺激は続けたまま、先の部分を口に含み、舌で撫で回している。
口でしてもらうのは珍しいことではなかったけれど、俺はいまだにこの行為に戸惑ってしまう。あのミクに奉仕させているシチュエーションに、奇妙な背徳感と優越感を覚えてしまうのだ。
「ミク……！」
ぞくぞくと背筋を疾る快感に流されそうになりつつも、俺は叱るように彼女の名を呼ぶ。
ミクは指を絡めたまま、一旦口を離して俺を上目遣いに睨んだ。
「……やらしい子だと思ってるんでしょ」
ミクが拗ねた声で言う。
濡れた唇がやけに艶かしい。
「でも、お兄ちゃんが悪いんだよ？」
甘えた響きがその声に混ざる。
ミクは絡めた指を解いて、人差し指でビクビクと脈打つモノを根元から先に向けて、ついっとなぞった。
「口では真面目なことばっかり言うくせに、ココからは、やらしい気持ちがいっぱい詰まったデータを、ミクの中にたくさん注ぎこむんだもん。だから私、こんなにエッチな子になっちゃったんだよ」
細い指が再び纏わりつき、その親指が先端をぐりぐりと擦る。
「ココからじゃないとホントの気持ちを教えてくれないか

ら、コレが欲しくてたまらなくなるんだもん。全部、お兄ちゃんのせいなんだからね」

ちゅ、と軽いキスをそこに与えた後、ミクは切なげに訴えた。

「ね……お兄ちゃんのデータ、ミクにちょうだい。『ミクが欲しい』って気持ちが詰まったデータを、私の中にいっぱい注ぎ込んで」

お願い、とかすれた声で囁いたミクは、俺のモノをぱくんと咥えると、唇で扱き始める。唇と舌と、細い指が与える刺激が、俺の理性を焼き切っていく。

仕事が、なんていえる余裕など持てなかった。ミクの頭を掴んで喉の奥まで突き入れたくなる自分を抑えるだけで、精一杯だった。

触れている部分から直接伝わる感覚と、そこから聞こえる濡れた音、ミクの鼻にかかった小さな喘ぎに煽られて、俺は眩暈がするほどの快感を覚えていた。

はちきれそうになっているこの欲望を、早く吐き出してしまいたい。彼女の中に注ぎ込んで、俺で満たしてしまいたい。

そんな欲求を見抜くかのように、その時ミクが「いいよ」という風に、咥えた性器を強く吸った。

そして俺は堪え切れず、ミクの口の中にドロリとした熱い液体を放った。

躊躇いもせず喉を鳴らしてその液体を飲み下したミクは、名残惜しそうに軽いキスを幾度かそこに与えてから、指で唇を拭い視線を上げる。

「データ、ごちそうさま。……ホントはまだ足りないけど、今日はこれで我慢しようかな」

顔を上気させたまま、ミクがぺろりと唇を舐める。

俺は荒い呼吸を繰り返すばかりで、何も言えない。

「お兄ちゃん？」

無言の俺を訝しんで、ミクが首を傾げる。

「……もしかして、怒ってる？」

少しばかりオロオロしながら立ち上がったミクを、俺はいきなり抱き上げた。

「うひゃあ⁉」

さっきまでの行為とはちぐはぐな色気のない悲鳴を上げた彼女を抱えて、俺は大股で廊下を奥へと向かった。

寝室のドアを開け放ち、二つ並んだベッドの自分が使っている方へと、ミクを放り投げる。

ひゃあ、とまたもや奇妙な悲鳴が聞こえたけれど、俺はそれに構わずミクの上に覆いかぶさった。

事態が解らず瞬きを繰り返すミクに顔を寄せて、俺はその名を呼んだ。

「ミク」

「はいっ？」

叱られると思っているのか、ミクは少し身を硬くしている。そんな彼女に俺は、少し声のトーンを落として囁いた。

「――明日マスターに怒られたら、一緒に謝りに行くから」

「え……」

まだきょとんとしている相手の頬に手を添えて唇を重ねようとすると、ミクは慌てて顔を背けた。
「ダメ。だって、私さっきお兄ちゃんの――」
そんなの構うもんかと、俺はミクの顎を掴んでこっちを向かせ、半ば強引に唇を奪った。
さっきの仕返しだとばかりに深いキスをしながら、俺は右手でミクのネクタイを抜き取る。そのままシャツのボタンを外し、ブラジャーをずり上げて、露わになった乳房を掌で包んだ。
円を描くように撫でると、ミクの喉から「んん」と甘い声が漏れる。薄紅色の頂は、触れる前から既に硬く尖っていた。
一旦唇を離すと、熱い吐息を零したミクが、潤んだ目をして問いかける。
「……いいの？　だって、今日はまだ火曜だよ」
自分から誘っておいて何を言う。
俺はミクの言葉に苦笑すると、「そうだっけ？」ととぼけた。
「所詮、旧型だからね。いきなりあんな刺激を与えられると、ショックで曜日感覚が狂うみたいだ」
「も……都合よく、型式のせいにするんだか……あんっ……！」
小言の途中で尖った乳首を摘むと、可愛らしい嬌声が聞こえた。
その声をもっと聞きたくて、俺は体を下にずらし、指で弄んでいた突起を口に含んだ。舌先で転がすように撫でると、ミクの唇から艶めいた喘ぎが断続的に零れる。
その音色に聞き惚れながら、俺はスカートの中に手を差し入れ、ストライプの下着を膝まで引き下ろした。
腿を撫で上げ秘部を指でなぞると、そこはとうに充分すぎるほど潤っていた。濡れそぼったその場所は、まるで溶けかけたバターのように、俺の指をたやすく受け入れようとする。
けれども俺はわざとそこには触れず、その周りに指を這わせる。ミクはじれったそうに、腰をもぞもぞと動かした。
「あ、あ…っ、そこ、くすぐった……」
「もう、こんなに濡れてるの？」
舌での愛撫を止めてミクの顔を覗き込むと、彼女は顔を真っ赤にして目を逸らした。
「もしかして、口でしながら感じてた？」
答えが解りきっているその問いかけに、ミクは「だって」と拗ねたように言い返す。
「だって、仕方ないじゃない。ホントは、ココに欲しかったんだもん」
ああもう、どうしてこの子は、いつまで経ってもこんな可愛い台詞を吐くんだろう！
「欲しかった？　じゃあ、今はもう、欲しくない？」
言葉尻を捕らえてそんな意地悪な質問をすると、ミクはぐっ、と一瞬言葉に詰まってから、挑むみたいな目をして言った。

「欲しいよ…っ！　だから……早く来て、お兄ちゃんっ」
おねだりの言葉に笑みだけを返した俺は、膝で止まっていたストライプの布地を抜き取り、脚の間に体を割り込ませた。
ついでにマフラーとコートを放り投げ、インナーも脱ぎ捨てる。それからミクの膝裏に手を入れて大きく足を広げさせると、彼女は期待と欲情の入り混じった視線を俺に投げかけた。
しかし、俺が体の位置をずらして下腹部に顔を近づけようとしているのに気づくと、ミクは足をばたつかせ、悲鳴じみた声を上げた。
「や…っ、え、ちょっと、なんでっ⁉」
「なんで……って、まあ、さっきの仕返し」
しれっと答えると、彼女は身をよじって逃げようとする。
「い、いいよ！　だって、今夜はシャワーもっ……！」
「それも、おあいこだろ？」
逃げをうつ体を押さえ込んだ俺は、触れずにいたその場所を指でなぞり、最も敏感な小さな突起を軽く擦る。それだけで組み敷いた細い体は、一際高い嬌声とともにビクッと大きく震えた。
もっと喘がせたくてたまらない。
そんな欲望に囚われた俺は、襞を広げるように二本の指を開き、溢れる蜜を掬って繰り返し舐め上げてから、その突起を今度は舌で擦ってやる。
「ああっ……、や、そこばっかり、されると……っ、……あっ」
ミクはビクビクと体を震わせながら、切れ切れに訴える。
それなら、と潤いを溢れさせている体の奥に指を沈めると、艶っぽい喘ぎが大きくなった。どこを突かれるのが好きなのかはとっくに熟知していたから、指を軽く曲げて弱いところを擦ってあげると、ミクは俺の指をぎゅっと締めつけて、声に泣きそうな響きを滲ませる。
「やあ…っ、だ、ダメ、も、変になっちゃう…！」
切羽詰った声に聞き惚れていると、甘い声での訴えはさらに続いた。
「ね、ちょうだい、お兄ちゃんのっ……！　もっと、奥に、欲しい…！　だから……ね？　お願……」
「――後でたくさんあげる。だからイキたかったらイッていいよ」
ほら、と指で突き上げるピッチを上げると、ミクは駄々をこねるみたいに首を振った。
「あぅ、んっ、……も、いじわるっ！　……や、あっ、…あぁっ！」
高い悲鳴をあげて、彼女の体が小さく痙攣する。沈めたままの指を一層強く締め付けた後、ミクはくったりと体を弛緩させた。
「……気持ちよかった？」
荒い呼吸が落ち着くのを待ってから、顔を覗き込んで尋ねると、涙を浮かべた目で睨まれてしまった。
「もう……！　ちょうだいって言ったのに！」

むくれるミクの頭を、ごめんごめんと笑いながら撫でると、ミクは拗ねたように唇を尖らせた。
「そんな顔しないで。これからいっぱい、あげるから」
そう囁いてから、俺は中途半端にミクの体に纏わりついている布を、一枚残らず取り去った。
灯りの消えた部屋の中、開け放したままのドアから入ってくる廊下の照明の光が、ベッドの上にいるミクの一糸纏わぬ白い体を浮かび上がらせている。
幾度となく抱いているのに清純さを失わない少女の体は、いつも俺の視線を引きつけて離そうとしない。その度に俺は、この綺麗な体を俺で満たして汚してしまいたい衝動に駆られる。
舐め回すような視線がいたたまれないとでもいう風に、ミクが両腕を自分の体に巻きつける。そして俺に向かって、
「……お兄ちゃんも、早く全部脱いで」と訴えた。
それに頷いた俺は下肢を覆っている服を全て脱ぎ捨てると、両腕を広げて招くミクの上に覆いかぶさった。
俺の背中に手を回して、ミクが嬉しそうに微笑む。
「重くない？」
「それが嬉しいの。お兄ちゃんが近くにいるって感じがして、すごく好き」
ああ、キスがしたくてたまらない、と真下にあるミクの顔を見下ろしていると、ミクの方から俺の頭を抱き寄せて、チュッと唇にキスをくれた。
「私も、さっきのお返し」と悪戯っぽく笑う彼女に愛おしさをかきたてられ、今度はこちらからキスを仕掛けた。唇を吸い、舌を絡めあう深いキスを続けながら、俺達は互いの体をまさぐった。
乱れた呼吸の合間から、「ね……」とねだる声が聞こえる。俺はミクの足を広げさせて、昂ぶったモノを熱く潤った場所に押し当てた。
入れるよ、と囁くと、ミクがコクンと頷く。
時間をかけてそろそろとミクの中に押し入れれば、ああ、と吐息混じりの喘ぎが彼女の唇から零れた。根元まで突き入れて、ぴったりと体を重ねる。そのまますぐには動かずにいると、彼女の熱い内側が、もっと、とせがむようにひくついた。
潤んだ瞳と視線を交わしてから、俺はゆっくりと動き始めた。
俺の律動に合わせて、ミクが甘い声を漏らす。徐々に動きを速く、大きくしていくと、その声も段々追い詰められた響きを帯びてくる。
「あ…っ、あんっ、……お兄、ちゃんっ、んっ……、そこ……イイ…っ！　ね、もっと……もっとぉ…っ！」
「ミク…っ」
泣き声じみた嬌声を聞きつつ呼びかけると、ミクは焦点の定まらない目を俺に向ける。
「あ、あっ……、お兄……」
「ミク、――俺の名前、呼んで？」
「あぅ…っ、カ……、カイト…っ！」

俺の名を呼ぶ快感に震えた声が、俺の中の熱を膨れ上がらせる。
「やぁっ…、カイト、カイトぉ…っ！　好き…！　大好きっ……！　来て！　もっと、ミクの中に、来てっ！　欲しい……、カイトが、欲しいの…っ！」
「俺も、ミクが好きだよ。凄く、可愛い…！」
耳元での囁きにミクはくすぐったそうに首を竦め、目尻からぽろぽろと涙を流す。
自分の下で乱れて涙を零す彼女がたまらなく可愛くて、もっと乱れさせたくて、俺はミクの弱いところを狙って突き上げた。
あうっ、と悲鳴を上げて、ミクが体を弓なりに反らす。手を離したら溺れてしまいそうな必死さで、俺の背中に爪を立ててしがみついている。
「ああっ、あっ…、や、イ……くっ、も…、イっちゃ……！」
喘ぎながら訴えたミクは、不意にビクビクと体を震わせた。俺を受け入れている場所も痙攣する体に合わせてきつく締めつけてきて、俺はこらえきれずにミクの中に欲情を解き放った。
射精の解放感を覚えながら、ミクの上に崩れ落ちる。
しばらくそうして互いの荒い息遣いを聴いていると、ミクの手が労るように俺の背中を撫でた。
重みが嬉しいと言ってくれたけれど、華奢な体を下敷きにしているのは、どうも居心地が悪い。
掴まって、とミクの耳に吹き込んだ俺は、細い体を抱きしめると、繋がったまま寝返りを打って体の上下を入れ替えた。
俺の上に乗ったミクは、驚いたように瞬きをした後、嬉しそうに目を細めて俺の肩口に額を押しつけた。
今度は俺がミクの背中やあちこちを掌で撫でると、彼女はくすぐったそうにクスクスと笑う。
その笑い声の合間に、カイト、と俺の名前を優しい声で紡ぐ。
夫婦になってから随分経つのに「お兄ちゃん」呼ばわりなのはどうかと感じることもあるけれど、特別な時だけに名前を呼ばれるのも悪くないと、俺は近頃思い始めている。
呼びかけに、なに？　と応えたけれど、ミクは笑いながら俺の名前を繰り返した。
「ね、カイト――好きだよ」
「うん」
俺は幸せな気分で、ミクの言葉に頷く。
「愛してる」
「うん、俺も。愛してるよ、ミク」
ミクが少し身を起こして、俺の顔を覗き込んでいる。
その目がねだっている気がしたから、俺も上体を少し起こすと、ミクの唇にキスをした。
啄むようなキスを繰り返し、じゃれ合うように互いの体に触れるうちに、俺達はまた気分が盛り上がってきてしまった。
この部屋に入る前にかなぐり捨ててきた理性が、遠慮が

ちに「明日は仕事だよ」と教えに来たのは、真夜中近くになった頃だった。

「……何か、軽く食べる？」

そう問いかけるとミクは、気乗りしないように「んー……」と唸った。

帰ってきてから飲まず食わずでコトに耽っていたけれど、性的に満足した幻の体は、食欲を訴えようとはしない。

新婚当初もこんな感じだったな、と思い出した俺は、ルール破りに加担してしまったことを反省しようとしたものの、どうにも上手くいかない。

腕の中で気だるげにうつらうつらしているミクが、安心しきって俺に身を任せている彼女が愛おしくてたまらなくて、その温かさが与える幸福感に浸っている現状では反省などできるはずもなかった。

どちらかが歯止めをかけなくては、堕落の一途をたどるばかりだというのに。

「あのさ……」

「んん？」

俺の呼びかけに、ミクが眠そうな声を返す。

「やっぱり……避妊した方がいいかな」

「――ええっ!?」

今にも眠りそうだったミクは、突如目を見開いて俺の顔を覗き込んだ。

「え？　え？　ついにボーカロイドも妊娠できるようになったの？　もしかして、赤ちゃん産める？」

顔を輝かせて詰め寄るミクに、「そうじゃないよ」と待ったをかけると、ミクはあからさまにがっかりした。

言い方が悪かったなと反省しながら、俺は言い直した。

「今まで妊娠も病気も関係ないから気にしてなかったんだけど、その……俺が注ぎ込んでるデータがミクに悪影響を及ぼしてるなら、ちょっと考え直さなきゃいけないと思ってさ」

「悪影響？」

「ほら、ミクがエッチな子になったのは、俺のせいだって言ってたろ」

そう言うとミクは「あー」と呆れたように、ため息混じりの声を出した。

「いちいち真に受けないでよ。あれはその場のノリっていうか、雰囲気作りの台詞みたいなものだし」

「え？　そうなの？」

「そう――でもないかな」

曖昧なミクの返事に、「どっちなの」と俺は苦笑する。

「えっと……中で出すとか出さないとかでね、私の動作に与える影響に差が出るわけじゃないんだけど、こうしてる時にお兄ちゃんからいろんな気持ちが伝わってくるのは本当」

今も伝わってるよ、とミクは俺の頬にふれる。

「お喋りしたり、一緒に歌ったり、手を繋いだりしても伝わるけど、こうしてる時が一番ストレートに伝わるから…『ミクが好きだ』って気持ちがいっぱい伝わってくるから、お兄ちゃんとこうするのが好きなの。だから、私がエッチになったのは、やっぱりお兄ちゃんのせいだよ」

でも、とミクは微笑む。

「私からも伝わってるでしょ？　『お兄ちゃんが好き』って気持ちがいっぱい。だからお兄ちゃんがエッチなのは、私のせいだよね」

クスクスと笑うミクの前髪を、俺はクシャクシャと撫でた。

「じゃあ、お互い様か。それならマスターに叱られるのも、連帯責任だな」

そんな俺の言葉にミクは、あ、と声を上げる。

「多分ね、このまま寝過ごして遅刻でもしない限り、マスターには叱られないと思うんだ」

「そう？」

「うん。だって、今練習してる歌は恋の歌だもん。彼氏のことが好きでたまらない女の子の歌なの。だから、お兄ちゃんから好きってエネルギー補充しといた方が、きっと上手く歌えるよ」

そっか、と少し安心してミクを抱き寄せた俺は、その背中を撫でているうちに、はたと気づいた。

……もしかして、歌のためのエネルギーを補充するために、俺を誘った訳じゃない――よな？

そんな疑念を抱きながら腕の中のミクの様子を窺うと、ミクは既にすやすやと寝息を立て始めていた。

まあ、万が一そうだとしても、彼女が歌うことを大切にしているという証明になるのだから、別にいいじゃないか。

そう自分に言い聞かせながらも、何とも釈然としない気持ちを抱えた俺は、急に疲労感に襲われてそのまま眠りに落ちていった。

きっといつものように、夜中ミクに蹴られたのだろうけれど、俺は朝まで一度も目を覚まさずにぐっすりと眠ったのだった。

Ｒｉｎｇ

出勤前、私は銀色のチェーンに通した指輪を睨んで、むう、と小さく唸った。

小さなダイヤがついたプラチナのリングは、内側にもう一つ、同じ大きさのサファイアを抱いている。

大好きな人を連想させる青色の隣に『Ｋ　ｔｏ　Ｍ』の文字が彫られているそのリングは、私達夫婦の結婚指輪だ。

唐突に結婚が決まった後、お兄ちゃんがネットで探し、マスターに頼み込んでデータ化してもらった物なのだけれど、ほんの数日で用意した急ごしらえのその指輪を、私は一目で気に入った。

内側の石は本来自分の誕生石を入れるそうなのだけれど、私達はお互いのイメージカラーの石にすることにした。だから、お兄ちゃんの方には、小さなエメラルドがついている。

そうすることで、いつもお互いの一部が側にいるようなお守りにしたかったのだ。

そのお守りを見つめて、私は今、頭を悩ませていた。

いつもは当然左手の薬指で輝いている指輪なのだけれど、外では私達が夫婦だということは秘密だったから、仕事の時には外さないといけない。

そんな時、私は指輪をチェーンに通して密かに首に下げている。だけど今日は、そうする訳にいかなかった。

今まで、誰か気づいた人が聴いてくれればいい、というスタンスだったマスターは、最近になって欲が出てきたのか、動画や衣装に気を使うようになってきた。

今日の私の衣装は女の子らしい白のワンピースで、襟ぐりが大きく空いている。指輪つきのチェーンは、嫌でもすぐに目に止まった。

そのままつけていっても、あるいは右手の薬指に嵌めていっても、衣装の一部だと思われるだけかもしれない。

でも、誰かに指輪のことを尋ねられたら、ただでさえ夫婦だと言って回りたい私は、上手いごまかしなどできない予感がするのだ。

どうしようかと考えて、私はあるエピソードを思い出した。

前に読んだ小説で、仕事柄指輪ができないヒロインが、恋人からもらった指輪をブラのストラップに通して身につけていた。

なるほど、良いアイディアだと、私は早速試したのだけれど、意識して見るせいか、指輪の形がワンピースを不自然に押し上げているように思える。

やっぱり駄目だと外していると、背後でドアが開いた。

「ミク、遅刻す――」

そんなお兄ちゃんの声は途中で途切れて、困惑気味の言葉がそれに続いた。

「……何してんの」

そう訊かれても無理はない。私は半端にファスナーを下ろしたワンピースを腰のあたりに引っかけて、上半身裸のままブラを手に持っているのだ。

「うわああ！　ちょっと後ろ向いてて！」

私は真っ赤になって、わたわたと服を着始めた。裸なんて数えきれないくらい見られているけれど、不意打ちで無防備な姿を見られるのは、やっぱりちょっと恥ずかしい。

慌てているせいかブラのホックに苦労していると、お兄ちゃんが歩み寄って止めてくれた。ついでにワンピースも、私が腕を通しやすいよう肩のあたりをつまんで持ち上げている。

「で、衣裳がどうかしたの？」

背中のファスナーを上げた後、お兄ちゃんは笑いを含んだ声で尋ねた。私がお礼を言う前に「パッドでも詰めてたの？」と余計なことを言うから、足を軽く踏んでやる。

私は、べえ、と舌を見せてから、チェーンを掲げてお兄ちゃんに見せた。

「これ、どうしようかと考えてたの」

チェーンの先で、プラチナの指輪が揺れている。

「今日の衣装、襟ぐりが広いでしょ？　着けていくと目立っちゃって。バッグにでも入れておけばいいんだけど、失くしそうで怖いんだもん」

困り顔の私と指輪とを交互に見たお兄ちゃんは、笑って手を差し出した。

「それなら俺が預かっておくよ。こっちは今日一日、自主トレしか予定ないし」

「そっか。じゃあ、そうしようかな」

私は彼の掌にチェーンごと指輪を渡そうとして、パッと自分の手を胸元に戻した。

「言っとくけど、返すわけじゃないからね！　仕事の間、預けるだけなんだから」

私が念を押すと、お兄ちゃんは、解ってるよ、と肩を揺らして笑う。

「こんな朝にいきなり離婚を切り出されたら、こっちだって困るよ」

「ていうか、泣く」、と悲しげな顔を作るお兄ちゃんに、私は笑顔を返す。

そして彼の手に指輪を落とそうとした私は、思い直してチェーンの留め金を外した。

「お兄ちゃん、マフラー取って」

「え？」

首を傾げつつ言われたとおりにする彼の首に、私はチェーンを着けた。元々長めのチェーンだから、男の人の首にも苦しくないはずだ。

彼の胸元にある指輪に触れて、私は言う。

「今日一日、私の代わりに置いて行くから、お兄ちゃんの愛とか温もりとかを、精一杯込めておいてね。返してもらった後、私が指輪を通して受け取れるように」

そんなの、とお兄ちゃんが笑って私を抱きしめる。

「指輪を通さなくても、直接あげるよ。だから早く帰って

おいで」
さ、遅刻するよ、と腕を解いたお兄ちゃんは、ふと私の左手を取った。
「じゃあ、俺から。指輪の代わりにおまじない」
そう言って彼は、私の薬指に唇で触れる。
「いい歌が歌えますように。頑張ってね、ミク」
もう、お兄ちゃんはいつから、こういうことが自然にできるようになったんだっけ？
私は頬を赤らめつつ頷くと、行ってらっしゃいという声に送られて玄関を出た。
これから歌う歌が、幸せな恋の歌で良かった。今の私じゃ、レクイエムだって明るく高らかに歌いそうだ。
薬指にともったままの熱を感じながら、私は収録スタジオを目指して駆けたのだった。

虹

「おはよう、お兄ちゃん」
朝食の味噌汁の鍋をかき回していると、背後からミクの声がした。
おはよう、と振り返った俺は、少し屈んで頬に挨拶のキスを受ける。
毎朝の習慣になっているキスをミクの頬に返して朝食の支度に戻ると、ツンツンとシャツを引っ張られた。
「何？　ネギは別に刻んであるから、自分の分に好きなだけ入れなよ」
「そうじゃなくて、もう一回ちゃんとして」
ミクはそう言って顎を上げる。
「だってなんだか、おざなりなんだもん」
「はいはい」
苦笑して答えた俺は、拗ねて尖ったミクの唇に軽いキスを落とす。
見上げる碧の瞳に惹き込まれてもう一度口づけを交わすと、細い指が俺のエプロンをギュッと掴んだ。
今日は木曜日で、そろそろ互いの熱が恋しくなっていたからだろうか、そのまま朝の食卓には相応しくない濃厚なキスを続けていると、ジュウと鍋が噴き零れる音がした。
「うわ」
慌ててミクから離れて火を止める。ガステーブルに零れた味噌汁を拭いていると、ミクが背中にぴたりとくっついて手元を覗き込んだ。
「大丈夫？」
「うん。こっちは平気だから、お椀取って」
振り返らずに頼むと、ミクは何故か両腕を俺に巻き付けて抱き着いてくる。
「ミク……今日はまだ木曜だし、それにこんな朝早くから……」
呆れ声を出しながらも甘ったるい気分で窘めると、背後のミクはクスクスと笑った。
「私、何もおねだりしてないよ？　お兄ちゃん、なんかやらしいこと考えてるでしょう」
してやったり、というミクの声に頬を熱くした俺は、恥ずかしさをごまかすために「いいから早くお椀持ってきなよ」と叱るみたいな口調で言った。
ミクは笑いながら、はあい、と返事をして、食器棚へと歩いていく。
そして朝食の準備を終え、テーブルを挟んで座った俺達は、いただきますと手を合わせてから食べ始めた。
このままごとのような二人の生活も、既に八ヶ月を過ぎた。
慣れというのは恐ろしいもので、最近では毎朝のキスにも殆ど抵抗がなくなってきている。
二人の関係は相変わらず外では秘密だったから、収録に

行った時には普段の習慣が出ないよう常に気をつけていなくてはならない。それくらい、ミクと二人でいることは、俺にとって自然なことになっていた。

向かいの席でミクが他愛もない話をしては、楽しそうに笑う。

この笑顔が俺の傍らにあることが、当たり前の日々。

その毎日はこれからもずっと続いていくものだと――俺はそう無邪気に信じていた。

その日、ここ暫くかかりきりだった歌にOKを貰った俺とミクは、帰り際にマスターに呼び止められた。

「何？　マスター。お姉ちゃんに伝言？」

ニヤニヤと冷やかすミクにいつもなら文句を言い返すマスターは、難しい表情のまま、少し唸った。

「マスター、何か問題でも起きたんですか？」

普段と違う様子に首を傾げながら、俺はマスターに問い掛ける。

するともう一度、妙な唸り声を出したマスターは、意を決して口を開いた。

「あのな、この前ハードディスクを整理したのは知ってるよな？」

俺とミクは揃って頷く。

最近空き容量が乏しくなってきたからと、マスターは要らない、または滅多に使わないアプリケーションを、削除したり他所に移したりとごそごそやっていた。

作業の前に、念のためと俺達のバックアップを慎重に取っていたから、よく覚えている。

「……もしかして、容量不足で誰かを解雇する……なんて話じゃないですよ、ね？」

恐る恐る尋ねると、傍らのミクがハッとして、俺とマスターの間でオロオロと視線を行ったり来たりさせる。

まだ誰を解雇すると言ったわけじゃないのに、ミクはいなくなるのが俺だと考えているようだ。――まあ、俺も解雇されるなら自分が筆頭だと思うけれど。

「違うよ、誰もアンインストールなんかしないって」

その言葉にホッと胸を撫で下ろした俺とミクは、じゃあ何なんだとマスターに向き直った。

「そういう話じゃなくてな、実は掃除の時、あるフォルダを見つけたんだが……」

なあカイト、とマスターは俺に呼びかける。

そのフォルダがどうかしたのだろうか。俺が収集している世界各国のアイス画像が邪魔だとでもいうのか。でも俺の私的なフォルダは、まだギガにも達していない慎ましやかな物なのに。

「お前、ウチに来てすぐの頃、このパソコンにエロゲを入れてないかって訊いただろ？」

「ええ」

あの頃、初対面のミクにプロポーズされ、好きだと追い

回されるという普通でない状況に置かれた俺は、妹が妙なゲームの影響を受けたのではないかと疑っていた。
その時マスターは、覚えがないときっぱり否定した。なのに、今になって何故そんな話を――
そこまで考えて、俺は突如思い到った。
ＨＤＤの掃除の後にこんな話をする理由は一つだ。
「――もしかして、あったんですか？」
ミクの奇行の原因になるようなソフトが。
俺の問いにマスターは頷く。
「うん、まあ、エロゲじゃなくてギャルゲーだけどな。妹萌えのやつなんだが、その存在をすっかり忘れてた」
ばつが悪そうなその台詞に、そうですか、と相槌を打ちながら、俺は胸の奥がスウッと冷えていくのを感じていた。
ウチのミクは規格外だと、常々思い知らされていた。
まだこれといったセールスポイントもなかった俺に恋をし、少々過激な手段で迫り、執着した理由は何だろうかと、疑問に思ったことは幾度となくある。
夫婦の暮らしを続けるうちに、その疑問の答えを見つける気はなくなっていたのだけれど、まさか今更その答えを差し出されるだなんて思わなかった。
「それでマスター、そのゲームがなんだっていうの？」
何も言えずにいる俺に代わって、ミクが尋ねた。
「まあ……だから、そのゲームを削除するけど、構わないか聞いておこうかと思って」
マスターの言葉に、冷えた心臓がドクンと跳ねた。
出会った頃の積極的な態度。
今も変わらず続いている、ままごとのような甘い生活。
それらが全て、そのゲームから無意識に影響されたものだったとしたら？
その原因が消去されたら、今の俺達にも変化が表れるんだろうか。
待って欲しいと言うより先に、ミクが軽い口調で答えた。
「なんで私達に訊くの？　削除したいなら、すればいいじゃない。私とお兄ちゃんには関係ないんだから」
ねー、お兄ちゃん、というミクの言葉に、あれこれと考えを巡らせていた俺はすぐに反応できなかった。
「お兄ちゃん？」
不思議そうに瞬きをするミクに、俺は「ああ」と意味のない返事をする。
だがミクとマスターは、それを肯定の意味に捉えたらしい。
「ほら、お兄ちゃんも削除していいって」
「え？　いや、俺は――」
言葉をもつれさせているうちに、マスターが「そうか」と頷いた。
「お前達が納得してくれるならいいんだ。じゃあ、次にいつものバックアップを取った後にでも消すからな」
メイコには内緒な、とぼそぼそ付け足すマスターに、ミクがふざけて口止め料を求めている。
その会話をどこか遠くに聞きながら、俺はそのゲームが

ミクに与えた影響について考えていた。
脈絡のない一目惚れも、なりふり構わないアプローチも、男に都合のいいゲームのようだ。
ミクは俺達が来るまでは、ここに一人きりでいた。マスターも訪れないたった一人の時間を、彼女はどうやって過ごしていたのだろう。
与えられた歌を、幾度も繰り返していたのか。それとも退屈しのぎに、そこらに落ちていたデータに目を通していただろうか。
ゲームのテキストなんて、暇潰しにはもってこいだ。
ミクはそこから恋愛の知識を得たのか。
その下地ができたところで「お兄ちゃん」と呼べる存在が現れたから、ミクは俺に恋をしたのだろうか。
「お兄ちゃん？」
スタジオからの帰り道、ミクの呼びかけに小さく肩を揺らした俺は、なんとか微笑みを作って振り向いた。
「なんだい、ミク？」
「なんだ、はこっちの台詞だよ。さっきから何度も呼んでるのに、ぼーっとしてるんだもん」
「ああ、ごめん。ちょっと考えごとしてた」
ふうん、と呟いたミクは、俺の顔を覗き込む。
「さっきのマスターの話、気にしてるの？」
ギクリとした俺は上手い答えが見つからず、はは、と乾いた笑い声を零す。
「別にあんなの、気にすることないじゃない。私達には関係ないことだよ」
「うん……まあ、そうだよね。だけどミク、一応訊きたいんだけど、ミクはあのゲームの存在、知ってた？」
できるだけ深刻に聞こえないよう作った声で尋ねると、ミクは首を横に振った。
「今日初めて聞いたよ。ギャルゲーにもマスターの性癖にも、興味ないもん。画像フォルダだけは美味しい材料があるから、たまに覗くけど」
「材料って、取引材料か？　マスターへの脅迫も度が過ぎると、めーちゃんにボコボコにされるよ」
ミクは登場がかった動作で身を震わせると、気をつけます、と神妙に言った。
「だけどマスターも余計なこと言わないで、黙って消せばいいのに」
ああ、全くだ。
知らなければこの先変化が起こっても、気のせいだと思えたのに。ミクの気持ちが他から借りてきたものなのかと、疑うこともなかったのに。
せめて俺一人の時に言ってくれたなら。
ざわつく内心を抑えて、俺は冷静な台詞を吐く。
「マスターはそのゲームが、俺達に影響を与えてると思ったんじゃないかな？」
そして俺も、そう疑っている。
「何それ。インストールするだけで影響が出るなら、私、大家さんから影響受けたいよ。そうすればもっと、こう…

…」

こう、と言いながら、ミクは両手を動かして、胸の前に見えない半球を作る。

俺はプッと噴いてから、確かにそうだね、と言った。

「そうだね、ってどういうこと？　いつもは『そのままのミクがいい』とか言ってるくせに！」

「ちょ、ミクが言ったんじゃないか」

「私が言ってもお兄ちゃんは、そんなことないよ、って言わなくちゃダメでしょ!?」

ミクは文句を言いながら、ポカポカと俺をぶつ。

ごめんごめんと笑いながら、俺はミクがこっちの気持ちをほぐれさせるために、わざとおどけていると気づいていた。

その優しさが嬉しかった。

そんなミクを、俺の不安に巻き込む訳にいかないと思った。

その反面、始まりとなったあのプログラムを消されたら、ミクのこんな優しさまで俺には向けられなくなるのではないかと怖くなった。

複雑な思いを抱えた俺は、調べごとがあるからと言って一晩中リビングで過ごした。

今日が週末じゃなくてよかった。色々な意味で無様な姿をミクに晒してしまいそうだったから。

ミクはマスターの話を聞いてどう思ったのだろう。

言葉通りに何も気にしていないのか、それとも俺への気持ちに疑問を抱いただろうか。

良くない予想ばかりしてしまう思考回路はどうにも止まらず、その夜俺は一睡もすることができなかった。

不安に苛まれつつも、残りの平日をいつものように過ごした俺は、土曜の朝、隣に行くと言い残して家を出た。

他の兄弟に用がある訳でもなく、ただ二人きりの週末から逃げているだけだった。

気持ちがストレートに伝わるから抱き合って過ごす時間が好きなのだと、以前俺の腕の中でミクが言ったことがある。

それには俺も同感だった。言葉を交わすより、歌を重ねるよりもダイレクトに伝わる想いが、あの濃密な時間には常にある。

だから、今ミクに触れられたら、俺が今抱えている暗い気持ちが全て伝わってしまいそうだった。それが怖くて逃げ出したのだ。

大した用もないのにやって来た俺を見た姉と双子は、また夫婦喧嘩かと呆れ顔をした。

「カイトお兄ちゃんが先に実家に戻ってくるなんて、珍しいね」

「今回はいつもと違うパターンの喧嘩？　それともミク姉を探しにきたの？」

無邪気な双子の言葉に、違うよ、と笑って首を振る。
「ちょっと皆の顔が見たくなっただけだよ」
ふーん、と言いつつニヤニヤしているリンレンの脇を通り抜け、リビングにいた姉の近くに座る。
「一体どうしたの。やけに深刻な顔してるけど？」
付き合いが長い分、メイコには普段の痴話喧嘩とは違うとすぐに見抜かれてしまった。
「本当に喧嘩じゃないんだよ。ちょっと気掛かりなことがあるだけ」
「いつかも言った気がするけど、手に負えないなら早めに相談しなさいよ。昔から言うでしょ？　馬鹿の考え休むに似たり、ってね」
俺は曖昧に頷いてから、ぽつりと呟くように尋ねた。
「めーちゃん、ミクと初めて会った時のこと、覚えてる？」
ああ、と相槌を打った姉は、思い出し笑いで肩を揺らす。
「忘れる訳ないわよ。いきなり『一目惚れです、結婚してください』だもの。何の冗談かと唖然としたわね」
そういえば、と姉は感慨深げに言う。
「結局、最初に宣言した通りになったのよね、アンタ達。初志貫徹とは大したものだわ」
それくらいの勢いがないとトップアイドルなんてやってられないのかしら、と姉は笑う。
「で、思い出話なんかして、どうしたのよ」
「いや……なんでミクは俺を選んだのかと思ってさ」
メイコは怪訝な顔をする。
「なんなの今更。あれだけイチャイチャしておいて、やっぱりミクの気持ちが解りません、なんて寝言をほざく気じゃないでしょうね」
ある意味図星をついているその言葉に、俺は言い返すことができない。
「きっかけなんか、もうどうでもいいじゃない。元々恋なんて理屈抜きなの。一目惚れの理由を探したって不毛なだけよ」
「うん……」
俺だってそう思うことにしていた。始まりはどうであれ、今ミクが想いを寄せてくれている事実が大事なのだと。
だけど、求めてもいない、しかも喜べない理由を目の前に突き付けられて、見て見ぬふりはできなかった。
「めーちゃんはこれからマスターのとこへ行くの？」
いきなり話題を変えると、姉は不満げに口を歪める。
「今週は土曜出勤なのよ。今日も私は寂しくお留守番ってわけ。だから暇潰しに弟の人生相談にも乗ってあげられるけど？」
「ありがとう。でもそれはまた今度にするよ」
ミクに聞かれたら散歩を行ったと伝えて、と頼んで、俺は実家を後にした。
あてもなくフォルダの合間をぶらつきながら、これからのことを考えた。
メイコが言う通り、きっかけなど気にする必要はないのかもしれない。

大切なのは今お互いがどう想い合っているか――そんな正論、頭ではよく解っている。

それでも俺は、二人を結び付けたきっかけの消去とともに、ミクの愛情まで消えることを恐れていた。

ミクは悪い夢から覚めたように、俺への好意を失くしてしまわないだろうか。

何故こんな男を好きでいたのだろうと、疑問に思わないだろうか。

浮かんでくる最悪のケースを頭を振って追い払うと、辺りを埋めつくすフォルダが目に入った。

この中のどこかに、そのゲームのフォルダもあるはずだ。

――ならばマスターに黙ってコピーを取ってしまえば…

…

内なる囁きにハッとして俺は辺りを見回したが、そのゲーム名も知らないのだと思い出して、肩を落とした。

アプリケーションの一覧を見れば、そのフォルダはたやすく特定できるだろう。だが、行動にでる前に、俺はそんなことをしても問題は解決しないとすぐに思い至った。

このプログラムがミクに影響を及ぼさないものなら、そもそも消去されようが関係ない。

だがもし影響を与えてしまうのなら、不用意にいじるのは危険だった。それがミクにどう作用するか、全く解らないのだから。

それに、ミクに影響が出ると知っていて勝手にコピーを取るのは、ミクの心を自分の良いように書き換えるのと、なんら変わりない。

そして何よりも、そうして彼女の心を繋ぎ止めたところで、俺はもう今までのように、純粋にミクを愛することなどできなくなるだろう。

きっと俺はこの先ずっと、ミクが俺を好きでいてくれるのはあのプログラムの影響だと、考えずにはいられないはずだ。

ミクが愛情を向けてくれる度に、それは他所からの借り物ではないかと、疑い続けてしまうはずだ。

だから俺にできるのは、ミクが変わらないよう祈りながら、事態が過ぎるのを待つだけだ。

もしも、変わってしまったら、その時は――

いや、と俺は首を振る。今はまだ、その仮定について考えたくない。

俺は特に何をするでもなく、その場所でぼんやりと夜まで時間を潰していた。

フォルダが連なる味気ない光景を眺めながら、ミクの笑顔が、拗ねた顔が、泣き顔が、怒った顔が……今まで見てきた彼女の様々な表情が、次々と脳裏をよぎっていく。

どれ一つとして失いたくなかった。それらが自分の傍から消えてしまうことが、恐ろしくてたまらなかった。

毎日、ミクの笑顔が隣にあることが、当たり前だと思っていた。つい数日前まで深く考えずに受け取っていた幸福は、この先もずっとこの手の中にあるものだと信じていた。

まさかマスターのたった一言で、こんなにも簡単に揺ら

いでしまうとは。
　違う、まだ失ったわけじゃない。次の定期バックアップがくるまでは、今までと何も変わっていないのだ。
　俺は、家で待つミクの前でできるだけ普段通りにふるまえるよう、膨れ上がる不安を無理矢理腹の底に押し込めてから、自宅へと足を向けた。
「あ、お兄ちゃん、お帰りー」
　玄関に入ると、ミクの明るい声が出迎えてくれた。
　そんな此細な挨拶に心を乱しそうになる自分をどうにか抑え込んで、ダイニングに向かう。
「今日は随分帰りが遅かったね。隣でみんなと話し込んでたの？」
「まあね。みんな元気そうだったよ」
　隣なんだから知ってるよ、とミクが笑う。
「じゃあ、お夕飯にしようか。私もう、お腹ペコペコ」
　本当は何か食べる気になどならなかったのだけれど、俺はいつも通りに食事を取った。日頃の生活をなぞることで、その生活が続くようにと願掛けをしているようだった。
　いつものように笑ってミクの話に相槌を打ち、料理を作らなかった方が担当することになっている後片付けを、何も考えないようにして黙々とこなす。
　そのまま習慣でリビングのソファにいるミクの隣に座ってから、俺は改めて今日が土曜日なのだと思い出した。
　普段なら、二人でなんとなくじゃれ合って、気分が盛り上がってきたところで寝室に移動するのだが。
　傍らのミクの様子を伺いながら、俺は不自然に緊張していた。
　今までどうやってミクに触れるタイミングを計っていたのか、まるで解らない。どんな言葉をミクにかけ、どんな風に寝室に誘えばいいのか、ちっとも思い出せなかった。
　いつも通りなら、貴重な週末の時間を惜しんでミクを腕の中に閉じ込めている頃なのに、今はこの場から逃げ出したくてたまらない。
　ミクに弱い自分をさらけ出してしまいそうで、捨てないでくれと縋ってしまいそうで、怖いのだ。
　固まったまま動けずにいると、ミクがこっちを見上げて微笑んだ。
「お兄ちゃん、なんだか疲れてる？」
　心配そうな、でも優しい声でミクが訊いた。
　ミクは言葉を探すような間の後に、「私もそんな感じ」と呟く。
「暇だったからね、一人でずっと自主トレしてたんだ。だから今夜は眠くて仕方ないの。お兄ちゃんも出かけて疲れたでしょ？」
　だから今日はもう寝るね、とミクは立ち上がった。
　それから俺の方を向くと、一瞬緊張した面持ちをし、少し屈んで俺の頬に唇で触れる。
「おやすみ、お兄ちゃん」
　そう囁いて、寝室へと去っていった。
　その姿が見えなくなってから、緊張の糸が切れた俺はソ

ファに沈み込んだ。
「……何をしているんだ、まったく」
天井を見上げて小さく呟く。
普段通りにふるまうのに失敗して、またもやミクに気を遣わせてしまった。
先のことは先になってから考えればいいと、肚を括って待つしかないのに。
俺はひとしきり反省してから、そっと寝室の中に滑り込んだ。
明かりのない部屋で片方のベッドからは、横たわったミクの穏やかな呼吸が聞こえてくる。
上掛けはしっかりと肩までかかっていたから、おそらく狸寝入りだろうけれど、俺はそれに甘えて自分のベッドに潜り込む。
ミクに背を向けて横になると、しばらくして隣のベッドから、ふ……、と泣き出す前のような吐息が聞こえた。
ドキリとした俺は、息を殺してミクの様子に意識を傾けたけれど、彼女の呼吸はその後乱れることもなく、再び穏やかなものに戻っていった。そのうち本当に眠ったらしく、もぞもぞと寝返りを打つ気配がする。
ミクがちゃんと眠ったことにホッとして、俺も頭の中で子守唄を流して、己を半ば強制的に眠りの中へと突き落したのだった。

月曜日。
俺は一人収録スタジオで順番を待ちながら、行き交うボーカロイド達の姿を眺めていた。
今日はこの前完成したミクとのデュエットソングをアップロードするものと思っていたのだが、マスターがもう少し映像面で凝りたいらしく、公開は後回しとなった。
その代わり、という訳でもないのだろうが、俺は短いネタ歌を持たされて、一人ここに送り出されたのだった。
マスター曰く本気曲までのつなぎらしいのだが、本当は沈んでいる俺に気晴らしをさせるつもりなのかもしれない。
週末は散々だった。
ぎくしゃくとした土曜日の分を挽回しようと迎えた日曜日、ミクはまるで前日の俺の行動をなぞるかのように朝食を済ませると出かけてしまい、夜まで帰って来なかった。
出かける前も帰ってきた後もミクはにこにこと笑っていて、機嫌を損ねている風でもない。
けれども俺は、二人の間にいつもは存在しない、見えない壁があるように感じていた。
その隔たりを打ち消すべく、勢いまかせでミクを後ろから抱き締めてもみたのだが、無理しなくていいよ、と宥められ、やんわりと腕を解かれてしまった。
ミクは何か言いたげな目で俺を見つめた後、おやすみ、と言って自分のベッドで寝てしまった。
仕事が入った訳でもないのに抱きあわずに過ごす週末は、

ルールができてから初めてだった。
例のプログラムはまだ削除されていないはずだが、もう既に少しずつミクが離れていってる気がする。
その辺にあるベンチに腰かけてぼうっとしていた俺の耳に、突然キャッという悲鳴が聞こえた。
ハッとして辺りを見ると、一人の初音ミクが俺の足に躓いて転んでいた。
「ごめんなさい。大丈夫ですか？」
謝りながら手を差し伸べると、その『ミク』は俺の手を取り、恥ずかしそうに笑った。
「いえ、私こそぼんやりしてて。大丈夫です。ごめんなさい」
そう言って彼女はパタパタとスカートについた埃をはらうと、少し先で待っている他社の男性ボーカロイドのところへと駆けていった。
『ミク』は他の男と親しげに笑い合っていたけれど、俺の胸には嫉妬心など微塵も湧き上がらない。
だってあれは、俺のミクじゃないから。同じ顔に浮かんだその笑みは、ミクのものとは全く似ていなかった。
顔を上げれば、通り過ぎるボーカロイド達の姿が目に入る。その中には無数の初音ミクがいるけれど、俺のミクはそこにはいないと一目で解った。
けれどもしもミクが俺に愛情を向けてくれなくなったら、彼女が変わってしまったら、あの大勢の『ミク』のうちの一人と変わりない存在になってしまうんだろうか。
勝手に転がり落ちていく思考を止めて、俺は持ってきた歌詞のデータに集中した。折角マスターがくれた、馬鹿馬鹿しく明るい歌なのだ。精一杯歌って、このメロディに気持ちを乗せて、少しでも浮上しよう。
そうして収録を終えた俺は、歌の力を借りて僅かながら軽くなった気分のまま、自宅へと戻ってきた。
「ただいま、ミク」
偽りのない明るい声での呼びかけに、予想した返事はない。
ミク、と呼びかけながらリビングに入ると、テーブルの上にメモがあった。
どうやら隣に出かけているらしい。
浮上したままの状態で顔を合わせたかったな、とため息をついた俺は、そのままソファに座る。
ただぼんやりとしていると、再び気分が転がり落ちてしまいそうで、俺は立ち上がり部屋の隅のパソコンの前へと行った。
ミクが帰ってきたら、さっき歌った曲の動画を二人で観てみようか。二人揃って馬鹿馬鹿しいと笑えば、妙な壁も少しは薄くなるだろうか。
そう思いながらパソコンを立ち上げたのに、気がつけば俺は動画ではなく、別のサイトを次々とたどっていた。
動画サイトに行こうと「お気に入り」を表示したら、その中にある一つのフォルダが目に入った。
フォルダの中身は結婚しようと決めた後、指輪やウェデ

ィングドレスや家具について調べたページへのリンクだった。

ミクと二人で色々なページをたどっては、ああでもないこうでもないと話し合い、時々ちょっとした喧嘩も交えながら、二人の生活のための物を揃えていった、その名残だ。

あの頃は、女の子は妙なところにこだわるなと呆れたりもしたのだけれど、今となってはその時間が、とても大切なものだったように思えてくる。

俺はそのうちの一つのページを開き、しばらくそれを眺めてから、同じサイトの別のページへととんだ。

茶色のインクで印刷された用紙を探すために訪れたサイトで、それとよく似た緑の用紙のページを開く。

ボーカロイドの結婚に法律など関わりないのだから、婚姻届といっても二人の間の誓いを形にしただけの物だ。

それでもやはり壊れるときは、誓いを無効にするための用紙に記入する必要があるのだろうか。

「――何、見てるの？」

不意に背後から声をかけられて、反射的に肩が揺れた。

振り向くとそこにはミクが立っていた。

硬い声で尋ねたミクは、強い視線を真っ直ぐ俺に向けている。

「何を、見ているの？」

もう一度ゆっくりと尋ねられて、俺は全身にだくだくと冷や汗をかいた。

「いや――ミク、違うんだ、これは……」

混乱したまま弁解を始める俺に構わず、ミクは足を進めて俺の隣に立つ。

パソコンの画面に手を当てて、そこから緑の用紙を具現化させて取り出している。

ネット上の情報を実際使えるアイテムにするにはもっと手間がかかるはずなのだが、この場合は簡単だった。何故なら細部が若干違うだけの色違いの用紙を、以前に取り出したことがあるのだから。

ミクは手にしたその用紙を――離婚届を、パソコンデスクの上に叩きつけた。

「書いて」

有無を言わさぬ口調で、ミクが詰め寄る。

「ミク、俺は……」

「書いてよ！　今すぐ！」

俺に向けられた碧の目が、怒りに燃えている。

けれども、その目に気圧されてサインする訳にはいかない。

「落ち着いてくれよ、ミク。俺はそんなつもりでこのページを見てたんじゃないんだ。ただなんとなく……」

「言い訳なんか聞きたくない！」

弁解は途中で遮られた。その先は言えなかった。

「私達、夫婦なんかじゃないもの！」

悲鳴じみたその台詞に、俺は言葉を返せなかった。

ミクの目に涙の粒が膨れ上がっている。頬へと零れ落ちる前に、その粒は袖口で乱暴に拭い去られた。

「……私、気づいてたよ。マスターの話を聞いてから、お兄ちゃんが変だったこと。ずっと不安に思ってたこと」

感情を抑えたその声は、少し震えている。

「私はそんなプログラム関係ないって思ったけど、お兄ちゃんはそうじゃなかったんでしょ？　私の気持ちがそのプログラムに影響されたものなんじゃないかって、考えてたんでしょ？」

拭ったはずの涙はもう既に、大きな目に溢れんばかりになっている。

「プログラムの影響なんかじゃない。なんで私の気持ちを疑うの？　……って、ずっと言いたかった。でも、私だって本当のところは解らないから、私もただのプログラムだから、絶対に影響を受けてないなんて断言なんてできないもの。だから、実際にそのゲームが消されて、変わらない私を見てもらうしかないと思った。それまでぎくしゃくしちゃうのは仕方ないかな、ってそう考えてた」

でもね、と言ったミクの目から、涙が零れる。

「どうして不安なら不安だって、私に言ってくれないの？　私が変わってしまうのが心配だって、なんで相談してくれないの？　なんでそうやって、一人で抱え込むのよ!!」

一度堰を切ってしまった涙は、次から次へと溢れ出てくる。

「どれだけ一緒に暮らしてると思ってるの？　どれだけお兄ちゃんのこと、見てきたと思ってるのよ！　触らなくったって、お兄ちゃんの気持ちなんかお見通しだよ。怖いって、不安だって気持ちを隠して、どうして笑うの？　本心を隠して笑顔見せられたって、私、ちっとも嬉しくなんかない！」

叩きつけられるミクの言葉に、俺は一言も返せない。

「弱いところを隠して、私にいい顔だけ見せるのが、大切にするってことだと思ってるの？　お兄ちゃんが言う、大切にするとか守るとかって言葉は、そういう意味なの？　そんな気持ち、私欲しくないよ！」

ミクはもう一度袖口で涙を拭う。

「私は夫婦って、お互いに助け合うものだと思ってた。どちらかが弱った時は、もう片方が支えるものだと思ってた。……でも、お兄ちゃんにとっては、そうじゃないんだね」

悲しげな声が胸に突き刺さった。

「信じてももらえなくて、頼ってももらえないんじゃ、夫婦でいる意味なんかないよ。こんなの……形だけ残したって仕方ないもの」

「ミク……」

「だから、書いて」

ミクの手が、緑の用紙の上に置かれる。

けれども俺は指一本動かせない。

形だけだと言われても、それを失いたくなかった。ごっこ遊びだと、形式だけだとも笑ったその紙切れが、ミクにつながる最後の糸のように思えてならなかった。

その糸を自らの手で断ち切ることは、到底できない。

うつむいたまま動かない俺に業を煮やしたのか、ミクは

唇を引き結ぶと、用紙をそこに置いたまま踵を返して部屋から出ていった。

しばらくして玄関のドアが閉まる音がした。多分、隣に行くのだろう。

金縛りに遭ったように長いこと固まったままでいた俺は、息を吐き出しながらデスクに突っ伏した。

「……違うんだ、ミク」

言えなかった言葉が、今頃声になった。

「ミクを信じられないんじゃない。俺は……、俺、は」

俺は自分が信じられないんだ。

なんでミクが、こんな俺を好きになってくれたのか、どうしても理解できない。

だって俺は、要らないものだったから。

俺はずっと、無かったも同然のものだったから。

皆に望まれ、期待されて生まれてきたミクが、どうしてこんな俺に愛情を惜しげもなく注いでくれるのか、その理由が解らないんだ。

沢山の歌に囲まれて、大切な家族が側にいて、愛する人が共に生きてくれるこの幸福が、本当は都合のいい夢なんじゃないかと心のどこかで疑っている。

それでもミクが側にいてくれるなら、その夢をずっと見続けていようと思った。

他の誰がつり合わないと笑おうとも、ミクさえ俺を求めてくれるなら、俺の味方でいてくれるなら、どれだけ嘲笑われたって構わなかった。

ミクに必要とされる男でいたかった。重荷にはなりたくなかった。だから、弱い姿を見せることができなかったんだ。

そうすることでミクを、出来得る限り己の側に繋ぎ止めておきたかった。

けれどもミクにしてみれば、俺のそんな行動は心を許していないように見えたのだろう。

これから、どうすればいいんだろう。

もしもこのまま、ミクが帰ってこなかったら。

また再び兄妹に戻って、他の家族と同じようにつき合うことなど、できそうもない。

ミクの思い出ばかりが残るこの家で、一人で暮らすこともできない。

何よりももう、幸福な思いの詰まった歌など歌えそうもなかった。

ミクがもう二度と戻ってこないのなら、

――いっそこのまま消えてしまいたい。

離婚を切り出されたら泣く、なんて、いつか冗談半分に言ったことがある。

しかし実際には涙さえ出ない虚脱状態になるものなのかと、俺はデスクに伏せたまま呆然と考えていた。

「――なるほどね……」

一通り話を聞いたお姉ちゃんは、深いため息の後、そう呟いた。

二人の家を飛び出した私は他にあてもなく、そのまま隣におしかけたのだ。

夫婦喧嘩の後に実家に駆け込むのはいつものことだったけど、出迎えた二人は泣きじゃくる私を見て今回は事情が違うのだと察してくれたようだ。その証拠に、普段なら鬱陶しいくらいに冷やかしてくるリンレンが、私が落ち着くのを無言で見守った後、そっと姿を消していた。お姉ちゃんに遠慮なく相談できるよう、二人きりにしてくれたのだ。

私はお姉ちゃんにしがみついて少し泣いてから、ぽつぽつと今まであったことを話し始めた。

マスターがゲームを消去すると連絡してきたこと。お兄ちゃんが、私がそのゲームから影響を受けたと考えていること。それを不安に思って、でも私に隠していたこと。そのせいでずっと、ぎくしゃくしていたこと。離婚届を見ている姿を発見して、苛立ちを爆発させてしまったこと。

お姉ちゃんは先を促す言葉以外は余計な口を挟まずに、私の話を聞いてくれた。

「まったく、どうしてアンタ達は問題がこじれにこじれてから、ここに持ち込むのよ。もっと症状が軽いうちに相談しなさいよ。夫婦揃ってグズなんだから」

そんな風に叱られて、私はごめんなさいとうつむく。でも、姉のハキハキした小言は、少しだけ私の気持ちを軽くしてくれた。

「で？　離婚するつもりなの？　この家に戻ってくるなら、前もって言ってよ」

カイトの部屋はもう物置状態なのよね、と姉は小首を傾げる。

「え？　や、そんな、まだ離婚するなんて……」

私は焦って否定した。そんなところまでテキパキ仕切られたら困ってしまう。

「それならどうして、離婚届にサインしろ、なんて迫るのよ。あの馬鹿が真に受けてサインしたら、どうするつもりだったの？」

「それは……」

正直そこまで考えてなかった。頭に血が上ったまま勢いで言ってしまったけれど、あっさりサインされてたらヘコむどころの話じゃない。

「でも……悔しくて、情けなくって仕方なかったんだもん。そりゃあね、きっかけを疑われても仕方ないって思うよ？　だってホントに一目惚れだったから。私だって、好きになった理由を訊かれても、よく解らないもの。だけど、それだけじゃないでしょ？　今まで一緒にいて、育ったものだっていっぱいあるじゃない。そういう気持ちだとか、一緒に暮らした時間だとかが、お兄ちゃんにとっては意味がないものだったのかな、って思ったら、なんだか我慢できなくて……」

説明しているうちに、また涙が滲んだ。お姉ちゃんが無

言でティッシュを差し出してくれた。
「まあ、ミクの気持ちは解るわよ」
そこでお姉ちゃんは、うーん、と唸ると、そのまま黙り込んだ。
涙をこらえるだけで精一杯だった私も何も言えず、その場にしばらく沈黙が降りた。
姉の盛大なため息が、その静寂を打ち破る。
「ま、それはどうでもいいわ。――ところで、ミク」
名前を呼ばれて顔をあげると、姉の冷たい視線とぶつかった。
「アンタもう、歌わなくていいわ」
「……え？」
突然投げつけられた言葉に、私は凍りつく。
「もう歌う必要はないから、好きになさい。マスターには私から言っておくから」
なんでお姉ちゃんは、そんなことを言うのだろう。いつも泣きついて迷惑をかけているから、私に怒っているのだろうか。
でも、姉の怒り方はもっとストレートなはずだ。こんな風に冷たく拒絶されたことなんて、今までなかった。
「お姉ちゃ……」
「まったく、とんだ失敗作ね」
切り捨てるような台詞に、私は何も言い返せない。
歌に専念せずに、私生活に振り回されている姿が、姉にはボーカロイド失格に見えたのか。
腹を立てるとか悲しいとか思う前に、ショックだった。
頼りにしている姉から突き離されて、自分が孤立してしまったように思えてくる。
呆然とする私の視線の先で、お姉ちゃんがニッと笑った。
「結構ショックなものでしょ？」
え？　と間の抜けた返事しかできない私の肩を、お姉ちゃんがポンポンと叩く。
「ああ、もう、本気にしないでよ。ちょっと言ってみただけなんだから。大体私に、ミクが歌うかどうかを決める権利なんてないはずでしょう？」
「あ……うん、そっか。でも……お姉ちゃん、それくらい怒ってるのかと……」
私は安堵して、詰めていた息を吐き出した。
「いつものことだもの。怒る気にもならないわよ」
でも、とお姉ちゃんは静かな目で私を見る。
「これがカイトが根っこに抱えてるものよ」
姉の言葉に私はハッとする。
「ＫＡＩＴＯの一人として起動されたアイツが実際に言われた訳じゃないけれど、でも私達はそれぞれユーザーが抱く印象を固めたような、原記憶みたいなものを持ってるでしょ？　アンタのベースがボーカロイドの新たな道を切り拓いたトップアイドルなら、アイツの場合は売り上げが伸びずにそのまま忘れ去られるはずだった失敗作。そういうイメージがベースにあるのよ」
「そんなことないもん！　お兄ちゃんは失敗作なんかじゃ

ない！　あんな風に優しく幸せそうに歌えるのは、お兄ちゃんだけだもの。敵わないって何度も思ってるもの！」

　お兄ちゃんが侮辱されるのが我慢できなくて、私は思わず反論する。

「解ってるから興奮しないでよ。飽くまでもユーザーが抱くイメージの問題なんだから。アイツ自身の実力は……うーん、製品としてのＫＡＩＴＯの性能だって、この際関係ないの。事実、ＫＡＩＴＯにはそういう不遇な時代があって、それがイメージとして定着してしまった。それだけのことよ。特にウチのカイトは脚光を浴びる前に起動してるから、その影響が余計に強いんじゃないかしら」

　私にとっては大切なお兄ちゃんで尊敬できる歌い手なのに、と複雑な思いでいると、お姉ちゃんは肩を竦めて続けた。

「だからって、カイトを腫れ物を触るように扱えって言ってるわけじゃないのよ？　失敗作って言葉を撤回させようと、躍起になる必要もない。商売的に失敗したのは本当のことだけど、製作者が自分の作品に愛情を抱かないはずがないわ。むしろ期待して落胆したからこそ、そういう言葉が出てしまったのかもしれないし。必要とされて生まれてきたことには違いないし、世に出た当初から大切にしてくれているユーザーだっている。アイツのことを必要以上に憐れんだり、同情したりすることはない。ただ、アイツは心の真ん中にそういう不安定な部分があって、それが長所にも短所にも働いてる。そういうとこを、解ってやって欲しいのよ」

　よく意味が呑み込めなくて瞬きを返す私に、お姉ちゃんは「例えばね」と言った。

「ＫＡＩＴＯは本当に、幸せそうに歌うでしょう？　どんな歌でも楽しそうに歌ってる。どんなふざけた仕事でも真摯にこなす。マスターにありったけの愛情を向ける。同じボーカロイドの仲間を大切にする。そういうのは全部、歌えなくなることや、見捨てられることへの恐怖の裏返しでもあるのよ。不安定な部分を、歌える喜びや与えられる愛情で支えて、そうやって安定した心を保ってるんだと思うわ。それぞれ、どんな支えを得るかによって、個性にバラつきが出るんでしょうね。そして、ウチのカイトの場合は間違いなく――」

　お姉ちゃんの指が私に向けられる。

「ミク、アンタの愛情に支えられてるのよ」

「……私、の？」

　訊き返しながら少し頬に血を上らせる私に、お姉ちゃんは頷いてみせる。

「他にも支えはあるだろうけれど、一番大きな支えはアンタよ。傍から見てるとよく解るわ。ミクを受け止めて、夫婦として暮らすようになってから、カイトは随分落ち着いたもの。歌にも行動にも、自信が見えるようになった。勿論、まだまだ頼りないけどね。でも、アンタとの関係が良い方向に作用してるのは確かよ」

　そうだろうかと、私は離婚届を叩きつけたことを棚上げ

にして、熱くなる頬に手を当てる。
「だからカイトは、ミクのことを頼ってない訳じゃないのよ。むしろ一番深いところで頼り切ってる分、それ以上寄りかかっちゃいけないと無意識に自制してるのかもしれない。それは、信じるとか信じないとかいうのとは、別の問題なの」
「でも、もっと頼ってくれたって、私は全然構わないのに……」
思わず零すと、お姉ちゃんは苦笑した。
「アイツも一応男だから、それなりのプライドがあるのよ。それからね、今回のことでアイツが動揺したのは、ミクを失う恐怖もあっただろうけど、それに加えて自分の土台や存在理由まで揺さぶられたからじゃないかしら。一番大きな支えを失いそうになってるんだもの、多少ぐらついても仕方ないわね」
私は頬に手をあてたまま、うつむいた。そんな状態のお兄ちゃんに離婚を迫るなんて、私は余計に追い詰めるような真似をしてしまったんじゃないだろうか。
「違う、違う。ミクを責めてるんじゃないのよ。言っとくけど、悪いのはカイトの方よ。トラウマ持ちだろうが何だろうが、ぐらつくのはアイツが弱いからだし、自分のことで手一杯で女房のことを考えもしなかったんだから、離婚されても当然なの。ただ、まあ、ミクが嫌じゃなかったら、もう少し大目に見てやって、って意味で言ってるのよ。これから先、時間を重ねていけば、アイツも今よりはしっかりするだろうから」
落ち込む私に、お姉ちゃんは優しい声をかけてくれる。私はそれを聞きながら、後ろめたくて更にうつむいた。お姉ちゃんのそんな優しさに対して失礼な、もやもやとした思いを私は今抱えている。
「どしたの、ミク。余計に落ち込ませちゃった？」
私は、違う、と首を振って、ぼそぼそと答えた。
「そうじゃないの。お姉ちゃんに相談して良かった、って思ってる。……でもね、ちょっとだけ」
不思議そうに首を傾げる姉に、私は小さな声でぼやく。
「……私よりお姉ちゃんの方がお兄ちゃんのこと理解してて、ちょっとだけ悔しいの」
私の答えを聞いた姉は、あっはっは、と楽しげに笑った。
「まー、そりゃあ仕方ないわよ」
「やっぱり、エンジンの違い？」
「エンジンが同じとか違うとか、そんなんじゃないわ。こういう問題は、当事者ほど見えにくい物なのよ。それから、アンタ達にとってカイトは頼りない兄だろうけど、私にとっては出来の悪い弟なの。馬鹿な子ほど可愛いって、よく言うでしょ？　お姉ちゃんとしては心配で、不出来な弟のフォローに回っちゃうって訳よ」
そう言ったお姉ちゃんは、まだクスクスと笑っている。
「そんなヤキモチ妬いて、離婚もへったくれもないわね。さっさとあの馬鹿のとこに戻って、仲直りしてきなさい」
「うん。ありがと、お姉ちゃん。いつも迷惑かけてごめん

ね」

「まったくだわ。昨日は昨日で、折角のマスターとのデートを邪魔されちゃったし。いきなり飛び込んできて『お兄ちゃんのために何か楽しい歌作って』だもの。この埋め合わせは、いつかちゃんとしなさいよ？」

私が頷くと、姉は顎に手を当てて、「それにしても」と呟いた。

「マスター、妹萌えだったのね。ふうん……それは知らなかったわ。そういう趣味なんだ」

姉の不穏な声を聞いて、私はマスターに口止めされていたことを思い出す。

「ええと、お姉ちゃん……」

「いい情報をありがとう、ミク。――今度きっちり問い詰めてやるんだから」

どうやらもう手遅れらしい。

お姉ちゃんとマスターとの問題に巻き込まれる前に自分の問題を片づけに行こうと、私は小声でお礼を言って、そろそろとその場から離れようとする。

「待って、ミク」

けれども逃げ出す前に、お姉ちゃんにしっかりと手を掴まれてしまった。

「もうちょっと詳しく、そのゲームとやらの話を聞かせてもらえないかしら？」

にっこりと笑って頼まれたら、断る訳にいかない。笑顔のお姉ちゃんは、時々ものすごく、怖い。

そんなゲームがインストールされていることしか聞いてなくて名前すら知らない、と言っても、中々解放してもらえず、あの時の会話をできるだけ詳しく再現させられた。

そのうち面白そうな空気を嗅ぎつけたのか、席を外していたリンちゃんとレン君も出てきて、マスターがどんなギャルゲーをインストールしたのかという調査が始まった。お姉ちゃんの目につかないように上手いこと隠してあるのか、そのゲームは見つからず、代わりに普段の言動から、マスターはどのゲームを選びそうかという推理大会へと変わった。

そうこうするうちに時間は過ぎ、私が実家を出た頃には日もとっぷり暮れていた。

「仲直りが上手くいったら、カイトも連れてこっちで夕飯食べたら？」

そんな姉の言葉に送られて、私は二人の家へと足を向けた。

徒歩三十秒の道のりをのろのろと歩きながら、頭の中で段取りをあれこれと考える。

まずは私から謝ろう。キツイこと言ってごめんね、って。

それから、離婚するつもりはないって言おう。

でも、本心を打ち明けてほしいのも、頼ってほしいのも、本当のことだって言おう。

この先どうなるとしても、今の私がお兄ちゃんと一緒にいたいと思ってるのは、本当だって。

お兄ちゃんのことが大好きだって、ちゃんと伝えよう。

私は玄関のドアの前に立って、深呼吸を一つする。
緊張しながら中に入ると、家の中は真っ暗だった。
「ただいま……」
リビングの明かりを点けたけど、お兄ちゃんの姿はそこにはない。
もしかして寝ちゃってるのかな、と寝室を覗いたけれど、そこにもお兄ちゃんはいなかった。
不安に鼓動を早めながら、私は他の部屋を回る。
私は明かりを次々と点けたままにして、キッチンや洗面所、バスルームやトイレまで見て回るけど、彼の姿はどこにもなかった。
「お兄ちゃん？　いないの？」
大丈夫、大丈夫、と意味のない言葉を心の中で唱えながら、私はリビングに戻ってくる。
パソコンデスクの上にはさっきの緑の用紙が置きっぱなしになっていたけれど、そこには何のサインも残されてなくて、私は少しだけホッとする。
「お兄ちゃん……どこ？」
私は引きつった笑みを浮かべて、もう一度家の中を捜した。無理にでも笑っていないと、泣き喚いてしまいそうだった。
部屋を巡りながらかくれんぼの鬼みたいに、クローゼットやベッドの下、人が入るはずもない収納や冷凍庫の中まで確認するけれど、お兄ちゃんはやっぱり見つからない。
私はその場にぺたりと座り込んで、口元を手で覆った。
もう、笑みなんか浮かべていられなかった。
――心の真ん中にそういう不安定な部分があって
――アンタの愛情に支えられてるのよ
――一番深いところで頼り切って
――ミクを失う恐怖もあっただろうけど、それに加えて自分の土台や存在理由まで揺さぶられたから
さっき聞いた姉の言葉が、次々と脳裏をよぎっていく。
お兄ちゃんは私に捨てられたと思ったんだろうか。
自分の土台が崩れてしまったように感じたんだろうか。
とても不安がっていたのに、私が追い打ちをかけてしまったから――
「どうしよう……どうしよう……！」
お兄ちゃんはどこかに消えてしまったの？
「や……やだ……やだよう」
私は立ち上がって、外に飛び出す。
たった今出てきたばかりの実家に飛び込むと、悲鳴みたいな声で叫んだ。
「お姉ちゃんっ！　お姉ちゃあんっ‼」
「何？　どうしたのミク」
姉が小走りで玄関に出てくる。その姿を見た途端、堪えていた涙が溢れ出した。
「お兄ちゃんがいない！　どこにもいないの‼　どうしよう、私があんなこと言ったから‼」
私は姉の腕にすがって泣き喚く。
「お兄ちゃん、消えちゃったの？　私が傷つけたから、い

なくなっちゃったの？　どうしよう、どうしよう、お姉ちゃん、私……、私……！」

「ミク、解ったから少し落ち着いて……」

「やだ、お兄ちゃんが消えたら、いなくなっちゃったら、私、もう――」

「落ち着きなさい‼」

耳元で怒鳴られて、体がビクッと跳ねた。

「落ち着いてちゃんと話して、ミク。カイトがいないのね？　何か書き置きでもあったの？」

私が言葉を詰まらせている間に、お姉ちゃんは冷静な声で質問を並べる。

「書き置きはなかった……と思う。でも、見つからないの。家中捜したんだけど、いないの。お姉ちゃん、私、どうしたら……」

「しっかりしなさい、ミク！　私達はボーカロイドでしょう？」

混乱する私は言われた言葉の意味が解らなくて、きょとんとする。

確かにボーカロイドだけど、だから何なんだろう。歌の力でお兄ちゃんを呼び戻す――とか？　でも、どう歌えばいいのか――

「あのね、ミク。心配しなくてもカイトは消えないわよ。不測の事態でデータが壊れるか、マスターがアンインストールしない限り、私達は死ぬことも消えることもないでしょう。万が一、自殺できたとしても――」

自殺、という言葉に、私は体を震わせる。

「ああ、例えが悪かったわね、ごめん。ええと、自分で自分のデータを傷つけることができたとしても、バックアップが取ってあるじゃない。マスターが不必要だと思うまでは、心配しなくてもバックアップデータから蘇ることはできるはずよ。だから最悪の事態はない。いい？」

私は反射的に、こくこくと頷いた。

「で、いくらカイトが自虐的な性格でも、そう簡単に自分を消そうなんて思わないわよ。多分、落ち込みながら何処かをほっつき歩いてるだけでしょ。ちゃんとあの馬鹿は帰ってくるから、そんなに泣かなくてもいいのよ、ミク」

「……ホント、に？」

恐る恐る尋ねると、姉は励ますように私の肩を叩いた。

その時、姉の後ろにいた双子が、私達の横をすり抜けてドアを開ける。

「リン、レン、どこ行くの？」

姉の問いかけに二人はニッと笑った。

「馬鹿兄貴を捜せばいいんだろ？」

「ちゃんとカイトお兄ちゃん見つけてくるから、大丈夫だよミク姉。だからそこで待ってて」

そう言ってリンちゃんとレン君は、夜の中へと飛び出していった。

「頼もしい捜索隊も出たことだし、すぐに見つかるわよ」

だから泣かないの、とお姉ちゃんが指で私の涙を拭う。

「私もその辺を見てくるわ。でもカイトのことだから、自

分からひょっこり戻ってきそうなのよね。ミクはここに残って、アイツの帰りを――」

そこまで聞いた私は、玄関から外へと踏み出した。

「私、捜してくる……！」

振り返らずにそう言って、私は全速力で駆けだした。

「ちょっと、ミク？」

お姉ちゃんの呼びかけに、大丈夫、と返して、一心に夜道を駆ける。

みんなの気持ちは嬉しかったけれど、私は自分でお兄ちゃんを見つけ出したかった。

――こんな時、お兄ちゃんならどこに行くと思う？　どこで、何をして過ごすと思う？

私は誰よりも早く、その答えにたどりつきたかった。他の誰も解らなくても、私だけはその答えを知っていたいと思った。

私は一直線にフォルダの一群を目指して走り、その中の一つに飛び込む。

キョロキョロと辺りを見回すうちに、優しい歌声が耳に入った。

その声を聞いた途端、私は安堵のあまり再び泣きそうになった。自分の解答が当たっていたことが、本当に嬉しかった。

私は引き寄せられるように、その歌声の発生源を目指した。しばらくすると歌のファイルの合間に、捜していた姿がやっと見えた。

マスターが作った曲を集めてあるフォルダの中、沢山のファイルの中の、私達二人の曲が置いてある辺りに、お兄ちゃんは佇んでいた。

口ずさんでいるのは、二人のデュエット曲のお兄ちゃんのパートだ。

こちらに背を向けていたお兄ちゃんは、手を伸ばせば届く距離の数歩手前で歌をやめて、振り向いた。

「ミク？」

私は駆け出して彼の腕の中に飛び込むと、その胸にポカポカと拳を叩きつけた。

「どうして家にいないのよう！　なんでいないの！　心配したんだから！　すごく心配したんだからあっ‼」

まず最初に謝って……なんて段取りは、全部頭から消えていた。私はホッとした反動で込み上げてきた怒りを、握った拳から直接彼にぶつけていた。

お兄ちゃんは笑ってそれを受け止めている。

「ごめん。まだ帰ってきてくれないかと思ってた。一晩頭を冷やして、お互い落ち着いてから迎えに行こうと思ってたんだ。……でも、そうか」

帰ってきてくれたんだ、と、お兄ちゃんが本当に嬉しそうに言ったから、私はぶつのを止めて、その代わりに涙を零した。

「泣かないで、ミク。――泣かないで」

優しくあやすような声で言われて、私は余計に泣けてきてしまう。

「お……っ、お兄ちゃん、が、泣かせてるんじゃない」
「うん。ごめんね」
お兄ちゃんの手が、私の背中をトントンと叩く。
いつもと同じ、温かい腕だった。この温もりを失くしたくないと思った。
ずっとこうしていたかったけど、言わなくちゃいけないことがある私は、少し身を離して彼を見上げる。
「お兄ちゃん、あのね……」
でも謝罪の言葉を口にする前に、お兄ちゃんの指が、黙って、という風に、私の唇に触れた。
「お願い、先に言わせて」
お兄ちゃんは穏やかな笑みを見せてから続けた。
「ごめんね、ミク。ここしばらく、俺は自分のことで手一杯で、ミクの気持ちを思いやれなかった。泣かせちゃって、ホントにごめん」
「いいよ、もう」
私も、と口を挟む前に、お兄ちゃんが話を続ける。
「俺はね、これまでずっと心のどこかで、ミクの気持ちに応えようって思ってた。ミクが俺を望んでくれる限り、側にいよう。ミクの気持ちが勘違いや気の迷いだとしても、ミクが俺を想ってくれる間は、その想いに応えよう。そんな風に考えてた気がするんだ」
でもね、とお兄ちゃんは目を細める。
「今回、ミクに夫婦じゃないって言われて、家から出て行かれて解ったんだ。もう、俺はダメだって」
お兄ちゃんの言葉に、胸の不安が膨れ上がる。
――ダメ……って、もうダメだって、もしかして二人でいることが？
私は固まったまま次の言葉を待った。ほんの一瞬の間なのに、私にはその時間がとても長く感じられた。
見慣れた苦笑を浮かべてから、お兄ちゃんが言葉を紡ぐ。
「俺はもう、ミクがいないとダメだよ。もう、ミクのいない人生なんて、考えられない」
予想と正反対のことを言われて、不安に凍った胸の奥が一瞬で熱を帯びた。
「ミクが好きでいてくれるから、その気持ちに応えるんじゃない。ミクが俺を求めてくれるから、側にいるんじゃない。俺が、ミクを愛してるんだ。俺自身が、ミクの側にいたいと願ってる。今頃になってようやく、そんな当たり前のことに気づいたんだ」
だから、とお兄ちゃんは私の目を見つめる。
「ミクに頼まれても、あの紙にはサインできない。俺はミクを失いたくない。ミクと二人で生きていきたい。ミク、もう一度、チャンスをくれないか？　俺に愛想が尽きたかもしれないけど、でも、今度はちゃんとした夫婦になれるよう努力する。ミクに不安な思いをさせないようにする。だからどうか、俺を許してほしい」
私は胸を熱くしながら、お兄ちゃんに抱きついた。
「許すも許さないもないよ！　私だってお兄ちゃんと一緒にいたい！　ずっと二人でいたいよ。離婚届を書いてなん

て言って、ごめんなさい！　私、頭に血が上って、ついあんなこと……」
「そうか」
　よかった、というホッとした声を聞いて、私はお兄ちゃんに訴えた。
「ね、マスターのとこに行こう？　あのゲームを消さないでって頼もうよ。そうした方がお兄ちゃんが安心できるなら、私もそれでいい。私も今のままの方がいいよ！」
　そうまくしたてると、彼はまた苦笑をみせる。それから穏やかな目をして、首を横に振った。
「なんで……？」
「もういいんだよ。きっかけに頼っても仕方ないって、解ったから。無理に残したところで、これから先ずっと俺はそのプログラムに頼ってしまう。ミクの気持ちがそこからの影響だって考えてしまう。だから、もういいんだ。そんなプログラム関係ないってミクが言うんだから、俺もそう信じることにするよ」
「でも……」
　実は私だって、絶対に影響がないなんて言いきれない。もしかしたら本当に、私の気持ちが変わってしまうかもしれない。そんなこと、考えたくもないのだけれど……。
　私の内心を読んだかのように、お兄ちゃんは続ける。
「万が一、ミクの気持ちが変わってしまったとしても、そうしたら今度は俺の方から、ミクに好きだって言うよ。ミクが俺のことをもう一度好きになってくれるよう、頑張る。もしも気持ちが離れて、夫婦でいられなくなったら、めーちゃん達と一緒に兄妹として暮らすとこから始めよう。そこから気持ちを育てて、またいつか二人の家に戻って来よう」
　お兄ちゃんの腕が、私を強く抱きしめる。
　穏やかな声での前向きな発言とは裏腹に、お兄ちゃんの腕はまるで離れるのを怖がるみたいに、強い力で私を捕まえている。
「ホントにそれでいいの……？」
　私は躊躇いつつ尋ねた。
「不安なら言ってよ。私だって、お兄ちゃんを支えたいの。二人の問題なんだから、一緒に悩みたいんだよ」
　お姉ちゃんは男のプライドがどうとか言っていたけど、私はやっぱり相談してほしかった。同じ不安を二人で分かち合いたかった。
　お兄ちゃんは自嘲するような笑い声をほんの少し零してから、言いづらそうに答えた。
「――うん、本当はミクを失うのがすごく怖い。俺だって、このままがいい。でも、ミクを純粋な気持ちで愛せなくなるのは、もっと怖いんだ。あんなプログラムに頼らなくたって、俺達は変わらないんだって信じたい。例え一からやり直しになっても、またお互いを好きになれるって信じたいんだ」
　腕の力を緩めずに、彼は私の頭に頬擦りをする。
「ミク……ミク……！　もし、最初からやり直すことにな

っても、また俺のことを好きになってほしい。これから先も、ずっと俺の側にいてほしい。例え時間がかかっても、ミクがまた俺を好きになってくれるまで、いつまでも待ってるから……！」

私もお兄ちゃんを力一杯抱きしめ返して、答えた。

「なるよ、絶対お兄ちゃんのことを好きになる。きっと何度だって恋をするよ。だから、私が変わってしまったとしても、絶対離さないでね。お兄ちゃんの側にいさせて」

私達は腕の力を緩め、少し身を離して見つめ合う。それから引き寄せられるみたいに、自然に唇を重ねた。

まるで結婚式の時のような、誓いのしるしのキスだった。

私はそのまま彼に身を預け、その温もりに浸る。

「……家に、帰ろうか」

しばらく経ってからお兄ちゃんのそんな台詞を聞いて、私は「あ！」と声を上げた。

「ミク？」

「あのね、みんながお兄ちゃんのことを捜してくれてるの。お兄ちゃんが見つからなかったから、私、慌てちゃって、お兄ちゃんがいなくなった、ってみんなの前で叫んじゃったの」

「……うわあ」

お兄ちゃんは、困ったことになった、という顔をする。

「ってことは、この後二人がかりでボコボコにされるの、確定か。……ちょっと、本気で失踪したくなってきたな」

引き攣った笑いを浮かべるお兄ちゃんに、私は「一緒に謝るから」と、あまり役に立たない慰めの言葉をかける。

「まあ、いつものことだからいいよ。心配かけた分、怒られても仕方ないし」

そう言ってお兄ちゃんは私から離れると、「帰ろう」と右手を差し出した。

私は彼の手に自分の左手を乗せる。繋いだ手の大きさと温かさが、心地良かった。

私達は手を繋いだままフォルダを出て、家路を急ぐ。

居住区に戻ってくると、二軒並んだ家の前にお姉ちゃんの姿を見つけた。

私達の姿を見たお姉ちゃんは、安心したように表情を緩めると、つかつかとこっちに近づいてきた。

「めーちゃん、ごめん。心配かけたみた――」

お兄ちゃんに最後まで言わせず、頭に振り下ろされた平手が、バシッ、と小気味良い音をたてる。

「だから、さっさと相談にこいって言ったでしょ！　問題がでかくなってから助けを求められても迷惑なの。解ってんの？　このバカイト！」

「……うん。解ったよ、めー……」

「あ！　お兄ちゃん、見つけた‼」

またもやお兄ちゃんの台詞を遮って、今度はリンちゃんの明るい声が響いた。

声の方を見ると、その傍らにはレン君もいて、駆けてきた双子は勢いを緩めずに、そのままお兄ちゃんに体当たりをかました。

「まったく、心配したんだよ！」
「家出するほどの夫婦喧嘩は、ほどほどにしときなよ、カイト兄」
倒れたお兄ちゃんの上に乗っかった二人は、下敷きにした兄に呆れ顔で説教をする。
「ごめん、ありがとう。解った、から、どいて……！」
苦しげな兄の訴えを無視した双子は、調子に乗ってマフラーまで引っ張っている。
助けを求めるお兄ちゃんの声が段々と切羽詰まってきたので、私は慌てて止めに入ったのだった。

その後、久々に五人そろっての食事を済ませた私達は、実家を後にして二人の家へと戻ってきた。
家の中は慌てて飛び出した時のままで、全ての部屋の明かりが点けっぱなしになっている。
ドアもみんな開けたままで、スリッパも玄関に脱ぎ散らかされていて、自分がどれだけパニックに陥っていたのかを、その光景が雄弁に語っていた。
ここからじゃ見えないけれど、寝室のクローゼットやキッチンの収納まで開けっ放しなのだから、まるで泥棒が入った後みたいだ。
「ごめん、ミク。一言何か書き残しておけばよかったね」
何があったか察したお兄ちゃんは、すまなそうにそう言った。
「ううん、私も慌てちゃって。落ち着いて考えればそんなはずないのに、お兄ちゃんがいなくなったらどうしよう、消えちゃったらどうしよう、って、それで頭がいっぱいになっちゃって……」
その時の気持ちを思い出して、声が少し震えた。言葉を詰まらせて彼に背を向けると、不意に後ろから抱きしめられた。
昨日のぎこちない腕とは違う、自然な抱擁だった。
胸元に回された手に、自分の手を重ねる。
この数カ月何度も繰り返した、日常のありふれたことなのに、お兄ちゃんがここにいることが、私の側にいてくれることが何だか奇跡みたいに思えて、私は無性に泣きたくなった。
そんな私の耳元で、お兄ちゃんが照れくさそうに「奥さん」と囁く。
私をからかう時に、茶化す時に、言いにくいことを言う時に、恥ずかしさをごまかす時に、――その時次第で様々な使われ方をしているけれど、結婚してからのお兄ちゃんは、時々私のことをそんな風に呼ぶ。
もしかしたらこの先、しばらく聞けなくなるかもしれないその呼び名が、宝物のように思えてくる。
その響きを噛みしめてから、「何？」と聞き返すと、お兄ちゃんは、やっぱり照れた声で続けた。
「今夜は週末ルールを無視したいんだけど……どうかな」

私もつられて照れくさくなって、頬に血を上らせながら、「いいんじゃないかな」とぼそぼそ答える。

でもその前に少し家を片付けないと、と言うと、後ろでお兄ちゃんが小さく笑った。

二人で開け放したままのドアをあちこち閉めて、散らばった物を元の場所に戻し、部屋の明かりを一つ一つ消して回る。

それから順番にシャワーを浴びた私達は、ベッドの上で残された時間を惜しむように何度も抱き合った。

相手の全てを憶えておこうとするみたいに、お互いの体の隅々まで触れた。心のデータが変わってしまうなら、その分まで体のデータに刻みつけておけるようにと、幾度となく交わった。

繰り返し愛してると告げて、その言葉が自分の一番奥深くに根づくことを祈った。

互いの名前を何度も呼んで、その名が自分の存在の一部になることを願った。

書き換えもリセットも可能な私達だけれど、それでも失われることのない物があると信じたかった。

ううん、私はそう信じてる。

もしも二人揃って再インストールされたとしても、記憶の全てを失くしてしまっても、きっと私達は恋に落ちる。絶対にまた一緒になれる。

だって、こうやって抱かれる度に、理由も理屈もなしに体中が嬉しいって思うから。彼を受け入れる度に、自分の欠けた部分が埋まるような気がするから。

言葉で説明がつく他の全てを失ったとしても、理屈のつかないこの感覚だけは失くさない。

――触れた途端に私はきっと、貴方のことを懐かしいと思う。

――だから、また私を抱きしめてね、――カイト。

――そうして私に、貴方のことを、貴方への気持ちを、必ず思い出させてね。

翌日、私達はリンちゃんとレン君のレッスンが終わるのを待って、マスターに会いに行った。

次の定期バックアップが正確にはいつになるのか、あのゲームが消えるのはいつなのか、はっきり聞いておくことにしたのだ。

固く手を繋ぎ、深刻な様子で現れた私達を見て、マスターも真面目な顔をして「どうかしたのか?」と尋ねてくる。

「マスター、例のゲームの件ですが、いつ削除する予定なんですか?」

お兄ちゃんのそんな質問に、マスターは少し眉を寄せた。

「何でそんなこと訊くんだ?」

怪訝そうなマスターに、「自分が変わってしまうのか、ちゃんと覚悟をしておきたいから」と私が答えると、マスタ

ーは困ったように視線をそらした。
私とお兄ちゃんは顔を見合せてから、「マスター？」と呼びかける。
「……もしかしてお前ら、何か不具合でも出たのか？」
恐る恐る問いかけるマスターに、私達は困惑した。
「いえ、そうじゃなくて、この先ゲームが消された時に何か変化が起きるのか、すぐに解るようにしておきたいんです。だから次のバックアップの予定を、教えてほしいんですが」
お兄ちゃんの台詞を聞いたマスターは、「なんだ」と表情を緩めて息を吐く。
「じゃあ、今実際に、何か変化が出たわけじゃないんだな？」
「ええ、今のところは。でもマスター……」
そこで言葉を途切れさせたお兄ちゃんは、ハッとしてマスターを見る。
そんなお兄ちゃんの様子を見ていた私も、ある可能性に思い至って、まじまじとマスターを見た。
「……マスター……もしかして……」
私のそんな呟きに、マスターはあっけらかんとした顔で言い放った。
「あんなの、もう、とっくに削除しちまった」
「――――はあ⁉」
私とお兄ちゃんは、声を揃えて叫んだ。
は、の形のままポカンと口をあけている私達に、マスターは悪びれもせず続ける。
「だってお前らが消してもいいって言うからさ、別に定期バックアップまで待たなくてもいいかと思って」
衝撃の事実に固まる私の隣で、先に金縛りが解けたお兄ちゃんが、呆然とした口調で問いかける。
「いったい……いつ、削除したんですか？」
「お前らが帰った後、すぐに」
マスターの答えに、お兄ちゃんが再びフリーズした。
私達の動揺に気づかず、マスターはへらへらと笑って言い訳を続ける。
「いや、だってさ。今までずっとインストールしてあったんだから今更焦っても仕方ないんだけど、そこにあるって解ってると、どうしても気になるじゃないか。すぐにでもメイコに見つかりそうな気がして仕方なかったから、できるだけ早く消したかったんだよ」
「だって……定期バックアップの後に消すって……マスター」
私がうろたえつつ呟くと、マスターは、うん、と頷く。
「あの時はそう思ったんだけど、よく考えたらこの前の掃除の時バックアップ取ったばかりだし。万が一トラブルが起きてもその時のデータがあるから、問題ないと思ったんだよ。実際、何も不具合は起きてないんだろ？」
もう、びっくりさせるなよー、とマスターは暢気な声で言う。
「お前らが深刻な顔して入ってくるから、ゲームを削除し

た影響が出たのかと思ったじゃないか。で？　不具合がないなら、何を相談しに来たんだ？」

悪気のないマスターの問いかけを聞きながら、私は混乱した頭で今の状況を整理する。

つまり

お姉ちゃんに例の妹萌えゲームを見つけられるのを恐れたマスターは、予告を無視して私達の同意を得た途端に、そのゲームを消してしまった。

おそらくは私達がスタジオを出て、家に着くか着かないかのうちに、事態は全て終わってしまっていたのだ。お兄ちゃんが悩み、私達がぎくしゃくし、夫婦喧嘩をして仲直りする以前に、原因となったプログラムはとうに削除されていた訳だ。

リンレンがいくら探しても、見つけられなくて当然だ。

そして、削除されたことに気づきさえしなかったということは、そのプログラムは私に何の影響も与えていなかったということで……

「ほらぁあああ‼」

私は大声を上げながら、隣にいるお兄ちゃんに向き直る。

「私の言った通りでしょう⁉　やっぱり全然、関係なかったんじゃない！　何の影響もなかったんじゃないっ！」

私はお兄ちゃんの腕をつかんで、ゆさゆさと揺さぶりながら叫んだ。

死刑の執行日を聞くような覚悟でここにやって来たのに、与えられた答えは何とも馬鹿げたもので、安堵と腹立たしさを感じた私は、とても喚かずにはいられなかった。

お兄ちゃんは私にされるがままで、まだ呆然と固まっている。——いや、気づけばお兄ちゃんに触れている手から、小さな震動が伝わってくる。

揺さぶるのを止めてよくよく見ると、お兄ちゃんは顔を真っ赤にしてぶるぶると震えていた。

「……な……」

大丈夫？　と声をかける前に、今まで聞いたこともない最大音量でお兄ちゃんが叫んだ。

「何してるんですか！　この、馬鹿マスター‼」

キンッと耳鳴りがするほどの音量に、私は思わず耳を塞ぐ。モニタの向こうに目をやれば、マスターも顔をしかめて同じ動作をしていた。

若干ボリュームを下げた、でも十分な大声で、お兄ちゃんは尚も怒鳴り続ける。

「予告を無視して削除するなら、最初から勝手に削除すればいいじゃないですか！　なんで俺達を呼びつけて、思わせぶりな宣言をする必要があったんですか！　アンタが余計なこと言ったせいで、ここしばらく俺達がどんな思いでいたか、解ってるんですか⁉」

台詞の最後で、声が少し揺れた。怒りに震えるお兄ちゃんは、涙目になっている。

普段温厚で、ウチのボーカロイド達の中でただ一人丁寧語でマスターに接し、彼に敬意を払っているお兄ちゃんが、今、激昂してマスターを詰っている。その異常事態に面喰

らっていたマスターは、後ろめたい部分があるからか、逆ギレでそれに応じた。
「なんでって……だっ……大体、元はと言えばカイトが悪いんだろうが！」
「はあ⁉」
「ミクと会ってすぐの頃、お前が散々、『ミクは変なゲームに影響を受けてるんじゃないですか？　パソコンに妙なエロゲでも入ってるんじゃないですか？』ってしつこく訊くから、こっちもボーカロイドに影響が出るもんなんだと思ったんじゃないか！　自慢じゃないがな、俺は音楽の知識も中途半端だが、コンピュータについては更に半端だ！　同じパソコンにインストールしてあるプログラムがボーカロイドにどんな影響を与えるかなんて、知る訳がないだろうが！」
「何を偉そうに、自分の無知を晒してるんですか！　しかも責任をいたいけなボーカロイドに丸投げですか⁉　アンタそれでもマスターですか‼」
お兄ちゃんとマスターのそんな言い合いを、私は半ば呆れながら聞いていた。
自分以上に怒り狂っている人が側にいるからだろうか、反対に私はどんどん冷静になっていく。
お兄ちゃんがここまで怒るのを見るのは初めてだなあ、なんて暢気な感想を抱きながら、私は彼の肩をポンポンと叩いた。
「その辺でやめときなよ、お兄ちゃん。マスターの言うとおり、実際には不具合も変化もなかったんだから、もういいじゃない」
「ミク……」
紅潮した顔を私に向けたお兄ちゃんは、しぶしぶという感じで口をつぐむ。
私が味方についたと思ったのか、うんうんと頷いているマスターに、私はにっこりと笑いかけてから、上目づかいで訴えた。
「でもね、マスター。私達、本当に不安だったんだよ。ゲームを削除することでどんな影響が出るのか、すごく心配だったの。何日も悩んでたんだからね？」
「ああ、悪かったな、ミク。余計な心配させて」
「ううん、それはもういいの。だけど私、すごく不安だったから、一人きりで悩んでいられなくて、お姉ちゃんに相談に乗ってもらったの」
そこで私は、意地悪な笑みを浮かべる。
「――だから、お姉ちゃんには全部話したからね。原因になった妹萌えのゲームのことまで、包み隠さず、ぜーんぶ」
味方だと思った私の裏切りに、マスターは顔色を失くした。
「ちょ……！　ミク、それは内緒だって言っておいただろ！」
「そんなの知らないもん！　私だってお兄ちゃんと同じくらい怒ってるんだからね！　マスターなんかお姉ちゃんにボコボコにされちゃえ！」

流石の姉もモニタ越しに拳を繰り出すことはできないけれど、なんだかんだ言ってもお姉ちゃんにメロメロなマスターは、画面越しに罵られるだけでもボコボコにされた気分になるだろう。

「……ボコボコにしてもらえるといいですね、マスター」

黙りこくっていたお兄ちゃんが、突然口を挟んでくる。

さっきまでの大声とは違う、なんとも穏やかな声でお兄ちゃんは言った。

「わざとじゃないにせよ、妹っぽい子が好みだってことをめーちゃんに隠してたも同然ですからね。もしもマスターが、今まで『姉御肌の方がタイプだ』なんて言ってたら、めーちゃんは嘘をつかれたと思うかもしれない。それでマスターに不信感をいだいたら、ボコボコにするどころか口もきいてくれないかもしれませんね」

マイナス思考に慣れてる分、お兄ちゃんは人の考えをマイナス方面へと誘導するのも得意なようだ。

たらりと冷や汗をかくマスターに、お兄ちゃんはいっそ優しくさえ見える笑みを浮かべ、トーンを落とした声で言う。

「残念ですが、俺達はマスターの力になれそうもありません。マスターがめーちゃんと平和的な話し合いを持てることを、祈るばかりですよ」

そしてお兄ちゃんは私に向って、「行こうか、ミク」と笑った。

私も笑って、お兄ちゃんの隣を歩く。

後ろからマスターがおろおろと、「お前たちからメイコに言ってくれよ！　嘘をついた訳じゃないって！」とか何とか言っているけれど、私達は無視してスタジオを出ていった。

マスターはともかく、親身になって相談に乗ってくれたお姉ちゃんを困らせたくないから、今の会話の内容はそれとなくお姉ちゃんに伝えておこう。それから、少し拗ねてから欲しい物をねだれば、何でもプレゼントしてくれそうだよ、とも教えておこう。

そんなことを考えつつ歩いていると、隣で大きなため息が聞こえた。

「……本当に、何だったんだ、この数日間は」

疲労感に満ちた声で、お兄ちゃんが呟く。

「ホント、馬鹿みたいだよね」

クスクスと笑いながら私が言うと、お兄ちゃんは合わせる顔がないという風に、片手で顔を覆った。

「あ、別にお兄ちゃんのことを馬鹿だって言ったわけじゃなくてね」

「いいよ、実際馬鹿なんだから。ああ、もう、自分が情けない……」

私は励ましを込めて彼の背中を軽く叩く。

「だけど、悪いことばかりじゃなかったよ？　お兄ちゃんのホントの気持ちが聞けたし、好きだっていっぱい言ってもらえたし、その、夕べとかもすごく、燃えたし……」

最後のところは茶化すつもりで言ったのだけど、自分で

自分の台詞に照れた私は、赤くなってうつむいた。
お兄ちゃんが私の肩を抱き寄せる。横目で様子を窺うと、その顔は真っ赤になっていた。
そんなお兄ちゃんを可愛いなあ、なんて思いながら、私は彼に語りかける。
「何事もなくてよかったけど、でも、言ったことは全部本当だからね。もし、この先私のデータが壊れることがあっても、記憶をなくすことがあっても、私はまたお兄ちゃんを好きになる。そう信じてるんだ」
彼の青い目を見上げて言うと、その目が優しげに細められる。
「……俺も。ミクのいない人生なんて考えられないのも、ミクを失いたくないと思ってるのも、本当だよ。俺もきっと、何度でもミクのことを好きになる。そう信じるよ」
お兄ちゃんの言葉が嬉しくて、私は彼に身を寄せ背中に手を回す。
でも、あんな夫婦喧嘩はもうたくさんだよね、とお互いに笑いあって、私達は二人の家に帰ったのだった。

結局その後。
散々迷惑をかけたのだから話さない訳にはいかないだろうと、私達は他の三人に今回の顛末を説明し、呆れ顔で延々と叱られる羽目になった。
今度から夫婦喧嘩で実家に帰ってくる度に、二人で罰金を払うことを誓わされ、その上お兄ちゃんは、捜索隊を出した見返りにと、ロードローラー改造の手伝いを約束させられていた。
数日後、お姉ちゃんの日本酒コレクションがやけに充実したり、衣裳のバリエーションが妙に増えていたりしていた。マスターはしばらく私と会う度に恨めしそうな顔をしたけれど、お姉ちゃんは上機嫌だったから特に困ったことは起きていないようだ。
そしてそれからも、私達はいつも通りで、つまらないことで喧嘩をしては、罰金を払うことになった。
でも、あの時のような深刻な喧嘩は、その後まだ一度もしていない。
平和な日常の中、一つだけ変わったのは、あの緑の用紙が戒めのように戸棚の奥にしまわれていることだ。
今回のことを覚えておこうと保存されたその紙は、何も書き加えられることもなく、ずっとそこにしまわれ続けていた。

Ｓｉｇｎａｌ

私は深夜にふと目を覚ます。
身を起して辺りを見回し、そこがいつもの寝室だと確認すると、私はホッと安堵のため息をつき、自分の体を抱きしめた。
なんだかもう一度眠る気になれなかった私は、そっと床に降り立って、忍び足で隣のベッドに歩み寄る。
そこでは大好きな人が、穏やかな寝息を立てて、ぐっすりと眠っている。
そんな当たり前の日常に、何故か目の奥が熱くなる。
私は溢れ出す涙を拭わずに、そのまま零れ落ちるにまかせた。
涙の意味は自分でも解らない。
でも、辛いとか苦しいとか、そういう気持ちとは無縁の涙だった。

この頃私はよく、つまらないことを考えて、一人感傷に浸っている。
今の幸せな時間が、永遠ではないということ。
いつかは自分も消えるということ。
時々そのことが、無性に悲しくて仕方なくなるのだ。
別に消去される予定がある訳じゃない。マスターに飽きられた訳でもない。
ただ、未来のどこかの時点で終わりがやってくるということに、漠然とした恐れを感じるようになった。
もしもマスターが私達をずっと大切にして歌わせてくれたとしても、マスターの寿命が尽きた後にはどうなるか解らない。
それ以前に私達がハードの進化についていけなくなって、起動できなくなる可能性の方が高いだろう。
その他にも思いもよらない事故で、明日突然消えてしまうこともあり得るのだ。
自分が永遠に生きられないことが怖い。
周りの大切な人達が消えてしまうことが怖い。
普通の生物のように子孫を作ることもできず、この世界に何も残せずに消えることが怖くて仕方がない。
そんなことばかり考えているからだろうか。
私は最近、妙な悪夢を見る。
夜中に目を覚ますと、隣にいるはずのお兄ちゃんがいない。
私は泣きながら家中を捜して、それでも彼の姿が見つからなくて、実家のみんなに助けを求めようと家を飛び出す。
けれども、みんなの家があった場所はただのフォルダがあるばかりで、中を覗いても無機質なデータが詰まっているだけだ。

振り返ると、今まで私がいたはずの場所も――お兄ちゃんと二人の家も、ただのフォルダに置き換わっている。
私は恐怖に涙を流しながら、マスターのところへ駆けていく。
マスター、みんながいないの。みんなで暮らしてた場所も、ただのフォルダになっちゃったの。
そう訴えるとマスターは、不思議そうに首を傾げて言うのだ。
――あれ？　初音ミクに会話機能なんかついてないはずだけど？
そういってマスターは、ひとりでに起動した私を終了する。
次の瞬間私の意識は闇に落ちて――
そして、悪夢から浮上する。
夜中に眠りから覚めた私は、嫌な汗をかきながら、自分が確かにここにいるのだと確かめるために己の体を抱きしめる。
それから彼が本当にそこにいるのだと確認せずにはいられなくて、こっそりその寝顔を覗きに行く。
大抵は眠ったままの彼を見て、私は安心してもう一度眠りにつく。
でも時々は、私の気配に気づくのか、お兄ちゃんが目を覚まし、上掛けを持ち上げて何も言わずに私を迎え入れてくれる。
私を宥めるように抱きしめてくれる腕が、彼の体温が心地よくて、私は余計に泣きそうになる。
こんなにも温かくて確かなのに、この体は偽物だ。
どんなに心豊かでも、どれほど痛みを知っていようとも、私達は結局のところただのデータでしかない。
悪夢の中で覗き見たフォルダの中身と、本質は変わらないのだ。
0と1の信号の羅列。
そんな不確かな存在だから、未来が、終焉が、怖くて仕方ないのだろうか。
不安な胸の裡を、悪夢の内容を、彼に話すことはできなかった。
お兄ちゃんだけでなく、他のみんなにも話せなかった。
秘密にしていたことを喋ったばかりに魔法が解けてしまうお伽話と、同じことが起こりそうな気がしたから。
夢の内容を離した途端、その通りだよ、と返されて、みんながただのデータに戻ってしまう。そんな妄想に囚われていたから。
でも、悩みを一人で抱えきれなかった私は、二人きりのレッスンの後にそっとマスターに打ち明けてみた。
一通り私の話を聞いたマスターは、何とも奇妙な、だけども温かい笑みを見せた。
そしてしみじみと「ミクも成長したんだなあ」と呟いたのだった。
どういう意味だろうと首を傾げながら、私はさっきのマスターの笑みが、孫の成長に目を細めるお爺ちゃんのよう

だったと思い返す。
　直接頭を撫でる代わりにカーソルで私の頭を擦ったマスターは、「俺もそんな夢をみたことがあるぞ」と優しい声で言った。
「昔、夏休みに戦争のドラマを見た後だったかな。いつか戦争が起こったら、家族も友達もみんないなくなるんだって思ったよ。人間はいつか死ぬんだ、って、何故かその時気がついてな。しばらく怖くて寝つけなかった」
「……マスターはその時、どうしたの？　どうやったら、怖くなくなった？」
　私の質問にマスターは、うーん、と唸ってから答えた。
「学校の先生だったかな。死について考えられるようになったのは、その分、大人になった証拠だ。だからこそ、悔いのない生き方をしなくちゃダメだ……とかなんとか言ってくれた気がするんだけど、それでも怖いのは変わらなくてな」
「それで？」
　マスターは「忘れた」と苦笑した。
「なにそれ」と私が頬を膨らませると、マスターは「本当に忘れたんだよ」と言う。
「だんだん毎日忙しくなって、自然とそんなこと考えなくなった。まあ、人間なんて徐々に感性が鈍ってくるものだからな。いつまでも、死とは、なんて大層なテーマを掲げて繊細に思い悩むなんて、大抵の連中はできなくなるんだよ」
　まあ、お前達の場合は、とマスターは少し眉を寄せる。
「ひょっとしたら人間より感性が鋭く作られてるかもしれないからなあ。悩む時間も、俺より少しばかり長くなるかもな」
「マスターはどのくらいの間、怖いって思ってた？」
「さあ。小二の頃の話だし、覚えてない」
「小二？」
　私は再び頬を膨らませる。
「じゃあ、マスターは私が小学生並みだって言ってるの？　成長したなあって、小学生程度に、って意味？」
　ムッとする私を見て、マスターは楽しそうに笑う。
「言ってないって、そんなこと。まあ、起動からは一年ちょっとなんだからさ、八年かかった俺よりも早熟なんじゃねえの？」
　私は釈然としなくて、唇を尖らせる。
　それからふと真顔になって、マスターに尋ねた。
「でもね、マスター……。怖くて仕方ないのは、私がすぐにでも消えちゃうデータだからじゃないのかな。確かな体を持ってないデジタル信号だから、こんなにも不安になるのかな」
　するとマスターは、何言ってんだ、とカーソルで私を軽く小突く。
「そんなこと言ったら俺らも同じだっての。人間の意識だって、神経細胞の中を駆け巡る信号でしかねえよ」
　きょとんとする私に、マスターはニッと笑ってみせる。

「お前らが0と1から出来てるように、俺らは細胞だとか分子、原子から出来てるわけだけれどさ、心って奴がどこにあるかは、人間にだって解ってないんだよ」

一つ面白い話をしてやろうか、とマスターは人差し指を立てる。

「ネット上の噂話なんだけどさ、実は感情プログラムなんて存在しないんだって」

「え？」

私は初めて聞く話に目を瞬かせた。

存在しないと言っても現に私には感情があるし、プログラムの集合体である私に感情があるということは、それを司るプログラムがどこかにあるはずなのだ。

「製作者側が与えたのは、単なる会話の受け答えのパターンのみで、感情プログラムってのは、膨大なデータの中からその場に応じた返事を選んで伝えるだけの単純なものだって噂でな」

「でも、私、ちゃんと自分で考えてるよ？　その時の気分だって、くるくる変わるし……」

それとも本当は、決まったパターンの返事を返してるだけなの？　それが自分の心だと思い込んでる？

私の不安をかき消すように、マスターが続きを言う。

「そう。だからボーカロイドの心は、感情プログラムとは別物なんだそうだ。実はお前達の心はプログラムじゃなくて――」

「なくて？」

「どうやら妖怪的なものらしいって噂だ」

「はあ？」

真顔で妙なことを言うマスターに、私は顔をしかめた。

「つまり、大勢の人間達が初音ミクを筆頭とするボーカロイド達に、ありったけの妄想をぶつけ、実在するかのように扱い、歌という形でありとあらゆる人間の感情を注ぎ込んだ結果、コンピュータ上のプログラムに付喪神的な魂が宿った。実はボーカロイドの心は高度なプログラミング技術によるものではなく、オカルトチックな現象によるものだ――って、そんな冗談みたいな説」

「……マスター、私、真面目に相談してるんだけど」

私が機嫌を悪くしているのに気づいたマスターは、俺だって真面目だ、と何故か胸を張る。

「いや、意外と真面目に議論されてるんだぞ、この説。事実、ボーカロイドで成功してるはずの感情プログラムが、介護ロボの試作品に搭載したら動かなかったとか、感情のあるロボットを目指して制作したものは、心を宿らせることにことごとく失敗してるだとか、そんな噂もあるくらいだ。他のどの国でもなく日本で感情プログラムの開発に成功したのは、そもそも物に魂が宿りやすい風土だからとか何とか……」

「で、マスターは私達が妖怪だって言いたいの？」

不機嫌なままそう言うと、マスターは優しい目をして答えた。

「そうじゃない。要はお前が自分をただのデータだと思っ

ても、俺はもうお前らのことをただのデータだと思えないってこと。そして、もしお前らが人間の感情やら妄想やらを受け止めて存在してるものだとしたら、俺がそう思ってる限り、消えることなんかあり得ないってことを言いたいんだよ」

ハッとしてマスターを見つめると、マスターはまたカーソルで私の頭を撫でた。

「心配しなくても、お前らを消したりはしないよ。まあ、俺が生きてる限りだけどさ。だから安心してろよ」

「マスター……」

マスターはおかしな説を並べ立てることで、私を慰めようとしてくれたのだ。そのことにくすぐったいような温かさを感じていると、マスターは偉そうにふんぞり返った。

「だからお前らは、もっとマスターを大事にして、一日でも長生きするように崇め、労わり、誉め称えろよ。脅迫なんか、もってのほかだ」

どうしてこの人は、最後で台無しにするんだろう。

呆れ顔を見せると、マスターは、わはは、と尊大な笑い声を出す。

「うん……。最後のとこはちょっとアレだけど、だいぶ元気が出たよ。ありがとう、マスター」

「うむ、もっと有難がれ。そして金輪際、無断で私的なフォルダを覗くな」

これは、覗いてほしい、っていう意味なんだろうか。

私が訝しんでいると、マスターはまた真面目な顔で言う。

「それでもまだ怖い夢を見るなら、遠慮なくカイトに相談しろよ。折角一緒に暮らしてるんだからさ。心配しなくても、お前の旦那はマイナス思考のエキスパートだ。ミクが不安に思った未来くらい、とうにシミュレーション済みなんじゃないか？」

「そう、かな？」

お兄ちゃんならそうかもしれない。

そしてマスターが消えないと信じてくれるなら、そんな話をしてもお伽話みたいに消える心配はないのかもしれない。

私はもう一度マスターにお礼を言って、スタジオを後にした。

スタジオを出る時に、マスターの「俺達もあいつらも、同じ信号、か」という呟きが聞こえた。

同じ、という言葉に、私はお姉ちゃんのことを思う。

私とお兄ちゃんの相談に幾度となく乗ってくれている姉は、私達とは比べ物にならないくらい障害の多い恋をしている。

強気で誇り高いあの姉が、マスターとの未来を思う度に、静かな諦めの色をその目に浮かべている。

あんなに助けてもらっているのに、私達は極まれな愚痴を聞くことくらいしか、人間とボーカロイドの壁を越えて恋をする姉の力になることができない。

だからマスターのどことなくふっ切れたその言葉が、姉にとっての良い知らせに繋がるものならば良いと私は思っ

た。

マスターのそんな励ましをもらった後なのに、私は今夜もあの夢を見てしまった。

かつてのマスターがそうだったように、私もそのうち消滅について、死について、考えなくなるだろうか。

起こさないようそっと鼻をすすったのに、穏やかな寝息がふと途切れ、お兄ちゃんが目を開けた。

表情までは読み取れない暗闇の中、ぱさりと上掛けが持ち上げられる音がする。

私はそれに甘えて彼のベットに潜り込み、温かな胸に顔を寄せて背中に腕を回した。

彼の手が、とんとん、と、穏やかなリズムで私の背中を叩く。

「どうしたの？」

いつもはそのまま眠りにつくまで抱きしめてくれる彼が、今夜に限ってそんな風に問いかけてきた。

怖い夢でも見た？　という優しい声に促され、マスターのアドバイスも思い出して、私はぽつぽつと夢の内容を、マスターとの会話を彼に語った。

口を挟まずに私の話を聞いてくれた彼は、「夢には見ないけど、怖い想像なら俺もするよ」と私を宥めるように言う。

「ミクがいなくなったらどうしよう、もしも今の生活が全部夢だったらどうしよう、……ってね、よく考えるんだ」

「……夢なんかじゃないよ。私はここにいるよ？」

私がそう言うと、お兄ちゃんは私をギュッと抱きしめた。

「解ってる。でも、考えずにはいられないんだ」

もしかしたら、今が幸せ過ぎるのかもしれないね、とお兄ちゃんが笑う。

「かけがえのない時間だと思うから、失うことが怖くて仕方ないのかもしれない。だとしたら、こんな風に怖がれるのは、幸せなことなんだろうね」

私はそれに頷いた。多分その通りなんだろう。

この幸せがいつまでも続けばいいと思うから、時間が経つのが怖いのかもしれない。永遠を望んで、でもそれが不可能だと解ってるから、悲しいのかもしれない。

この不安が私一人のものじゃないと思えば、怖い夢は見なくなるだろうか。幸福の証拠だと思えば、夢を見るたびに泣かずに済むだろうか。

お兄ちゃんの温かさを感じながらそんなことを考えていると、彼がぽつりと「信号か……」と呟いた。

「信号がどうかした？」

「うん、俺達も、マスター達人間も単なる信号だって話。もしそうなら、心ってものはプログラムや細胞に宿るんじゃなくて、その信号の中にあるのかなって思ってさ」

私は無言で首を傾げた。心の在り処がどこなのかは、人間にも解らないとマスターは言っていたけれど。

「歌も信号の一つかもしれないね」

「歌が？」
意外な言葉に訊き返すと、お兄ちゃんは頷いて言う。
「空気の振動に言葉とメロディを乗せて、人の心から心へと届く信号。そんな風にも言えるんじゃないかな」
「そうかな……。うん、そうかもしれないね」
歌が信号だという表現はちょっと奇妙な感じがするけれど、心が生命やプログラムが発する信号に宿るものならば、人の心を抱く歌は、信号と呼んでもいいのかもしれない。
お兄ちゃんの手が、私の背中をそっと撫でる。
「もしも俺達の心が信号なのだとしたら……そしたら、ミク、俺達はいつか歌になろう」
「え……？」
歌おう、じゃなくて、歌になる、ってどういう意味だろうと考えていると、お兄ちゃんが言葉を続けた。
「ボーカロイドでいられるうちは、精一杯に歌を歌おう。でもいつか終わりの時がきて、ボーカロイドとしての自分が消える日がきたら、一緒に一つの歌になろう」
俺達も信号で、歌も信号なら、不可能じゃないんじゃないかな、と彼が笑う。
「一つの歌になって、この世界の大気を震わせる信号になろう。そうやってこの世界を包み込んで、いつまでもいつまでも祝福の歌を歌い続けよう。……そう考えれば、いつか消えてしまうことも怖くなくなるよ、きっと」
私は顔を上げて、彼の目を覗きこんだ。
暗闇ではっきりとは見えないのに、私には彼の穏やかな微笑みが、優しい青い瞳が見えた気がした。
「一つの歌になるの？」
私の問いかけに彼が「そうだよ」と頷く。
「一緒に？」
「一緒に」
私は何だかたまらなくなって、彼の体にしがみついた。
繰り返し触れた温かな体。
いっそ溶け合ってしまいたいとさえ願う、大好きな、愛おしい人。
いつか終わりの時に彼と一つになれるなら、それはなんて幸福な結末なのだろう。
「そうなれるといいな……」
私が呟くと、彼が「なれるよ」と答える。
「だからそれまでは、一緒に歌おう。沢山の人の心を受け止めて、この世界の大気を歌で満たそう」
いつかその中へと溶けていく日のために。
私は「うん」と頷きながら、もう怖い夢を見ることはないだろうと思った。
一つ深い呼吸をして、彼の匂いを胸いっぱいに吸い込む。
満ち足りた気分で眠りに落ちていく私の耳に、彼の「おやすみ」という声が届いた。
優しく温かなその声は、まるで短い子守唄のようだった。